桜散る

夏野梨生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜散る

【Ｎコード】
Ｎ５８６３Ｍ

【作者名】
夏野梨生

【あらすじ】
名門の武道の家に生まれながら、ひきこもりになった落ちこぼれの志摩津桜樹。業を煮やした叔父から、無理やり４度目の大学へ送り込まれる。
だが、大学についた早々、殺人事件が起きた。
志摩津の血が覚醒すると思いきや、ヘタレっぷりを曝す桜樹。エリート検事の兄、警察官僚の従兄を激怒させながらも、風変りなゼミ仲間たちとは打ち解けていく。だが、殺人事件は次々と起き……。

序章

春、麗ら。

水戸地方検察庁の検事、志摩津松芳は、東京の中心にある志摩津邸にひさかたぶりに里帰りをし、門の前で足をとめた。

齢二十四年、幹もおとなの一抱えほどに成長した染井吉野が、青空の下、風に花弁をまき散らしていた。

その桜吹雪のなか、志摩津吉鷹が空をみあげていた。

茶色の髪の襟足を長めにのばし、細い引き締まった身体に、ダークグレーのソフトジャケットをすらりと着ている姿は、警察官僚というよりモデルのようである。

端麗な貌でまっすぐに天を仰ぐ姿は桜吹雪に霞み、桜の精霊のごとくも見える。

だが、この男は情緒や感傷というものはほど遠いはずだ。

「どうした」

松芳が声をかけると、吉鷹は無表情のまま傍らの車にあごをしゃくった。

ＢＭＷ　Ｍ３クーペ　アルピン・ホワイト

ピカピカに磨きあげられた純白の車体に、とめどなく桜の花片が

降り注ぎ、はりついていた。

「鬱陶しい」

忌々しげに、吉鷹は言った。
やはり。
散りゆく桜吹雪に、感傷に浸っていたわけではなく。
車に貼りついた花片に、立腹していただけのようだ。

松芳は口笛を吹いた。

「また買ったのか」
「ご当主様に買っていただいた」

この血のつながらない従弟は幼い時に志摩津家の養子となったが、未だに養父のことを「ご当主様」と呼び、父と読んだことはなかった。

吉鷹は端麗な貌を松芳に向けた。
一緒に育った身であっても、どきりとする。
澄んだ切れ長の瞳であった。

「松ちゃんは桜樹の見送り？　いや、迎え？」
「ハ？」

なんだそれ、と、聞き返そうとした時。
すさまじい音がして、志摩津家の玄関から桜樹の体が吹っ飛んできた。

「やだやだやだ。行かない、オレ、そんなとこ絶対に行かない」

桜樹は両手をばたつかせ、玄関の引き戸にしがみついている。

子どもではない。

松芳の四歳違いの、実の弟。

帰省そうそう、縁起の悪いものを見てしまった。

「アイツ、ひきこもりなおったの」

「いや。

それでご当主様が新しい大学を手配したんだ」

松芳は眉をひそめた。

「無駄じゃないのか。

三回目の大学でも駄目だったんだろう。一生、座敷牢にでも閉じ込めておけばいいんだ。

どうせひきこもっているんだ。大した違いはない」

志摩津家は志摩津式古武術の宗家である。いま、松芳たちが立っている場所は家人たちのごく普通の家屋だが、奥には広大な道場があり、寝泊まりしている内弟子だけでも百名弱いた。

警察や自衛隊にも武術指南を行う、武術の名門家。

松芳は検事で、吉鷹は警察官僚。

松芳の父や兄は防衛省官僚。

叔父は志摩津家当主。

その中で、末っ子の桜樹だけは甘やかされ放題に育ち、三度目の大学にも通うことができず、もう長いこと家でひきこもっていた。

家名汚しもいいところである。

着流しに隻眼、見た目も中身も、時代劇の剣豪のままの叔父の飛翔が出てきた。
桜樹の首筋をつかんで容赦なくひっぱる。桜樹がこらえきれずに手をはなすと、そのまま桜樹の体を、飛翔は庭石に叩きつけた。
長身だが童顔の桜樹は、顔をぐしゃぐしゃにゆがめ、泣いたまま、口の端から血を流しうずくまってしまった。

志摩津の直系のくせして。
受け身すら取れないのか。
舌打ちすることすら、忌々しい。

吉鷹は無表情のまま角ばった手で、すっと前髪をかき上げた。

「家長様も蓉一サンもおなじこと言ったんだが、ご当主様が今度こそ大丈夫だって、譲らないんだ。
オレはご当主様に従うだけだからな」
「叔父貴が」

なぜ大丈夫というのだろう。大学をいくら変えたって、あの生まれつき甘ったれた、我儘放題の根性が治るとは思えない。
いっそ死んでくれとすら、父は言った。

「松芳、桜樹の迎えに来たのか」

松芳に気がついた、飛翔が言った。

「いえ。単なる帰省です」

きっぱりと関わるまいと言外に示すと、松ちゃん、と吉鷹が言っ

た。

「桜樹の行く大学、茨城だから。水戸地検からそんな離れてない。長谷部のご当主様がこの春から教鞭をとられているらしいんだ。時間があったら、松ちゃんからも挨拶頼む」

すうっと冷たい汗が松芳の背を流れた。

なぜ。

そんな疫病神を押しつける。

事後に告げてきたのは、事前に知らされていれば松芳が徹頭徹尾反対すると、見越してのことか。

吉鷹は運転席に乗り込みながら、

「どうせ戻るなら一緒に乗って行かないか？」

「いや。

帰ってきたばかりだ」

そりゃあ、週明けまでには戻るが。

どこをどうしたら、帰省したばかりの自分が実家の敷居もまたがずに、桜樹につきそって戻らなくてはいけないのか。

これが吉鷹とふたりきりでドライブなら、地獄の果てでも行く。

だが、桜樹が絡むなら、別だ。

飛翔に無理やり引っ張り立たされた桜樹は、じとっと恨みがましく松芳を上目づかいに見た。

本来、兄だったら弟を助けてくれて当然と、桜樹は思っている。

血のつながらない吉鷹より、直系の自分がなんの努力をしなくても、ちやほやされて当然と、思っている。

そして思い通りにならないと、癇癪を起し、ふてくされ自分の世界の中に閉じこもり、よりいっそう家族たちへの恨みつらみを一方的に増殖させた。

見ているだけで、苛々する。
存在だけで、腹立たしい。
なのによりによって、水戸地検の近くに来るって？
いったい、自分が何をしたというのだ。

「吉鷹にこれ以上、迷惑をかけるんじゃないぞ」

飛翔は桜樹をＢＭＷに押し込むと、

「松芳も乗って行くのか」
「いえ。帰ってきたばかりですから」

この父子は血がつながっていないのに、不思議と行動と発想がよく似ていた。
次の叔父貴の発言も予想つく。

桜樹が乗ると同時に、エンジン音が響いた。
あっという間に車は見えなくなった。

「ああ、松芳、桜樹の行く大学は」
「わたしは長谷部家の現当主さまには、ご面識がありません」

先回りして、松芳はきっぱりと言った。

「時宗さまは非常に素晴らしい方だ。教育関連の仕事をいくつも歴任されている。

ただ……」

隻眼の飛翔は口ごもって、視線を落とした。
どんな剛の者をまえにしても漂々としている叔父には珍しく、肩を丸めてしょんぼりとしている。

この叔父は外見に反して、とても優しく、繊細だ。
実の父兄がとうに見切りをつけている桜樹に、いまだ心を砕くのは飛翔だけ。

「ただ、なんです？」
「断られているんだ」
「ハ？」
「受け入れたくないと。
桜樹の経歴をみて、やる気がなさそうだとおっしゃられて」
「じゃ、ダメじゃん」

思わず少年時代の感覚で言ってしまった。
飛翔は松芳にというより、自らに言い聞かすようにつぶやいた。

「でも、時宗さまは信頼できる方だ。とりあえず背水の陣で追い出したら、どうにかなるんじゃないかと思って」
「背水の陣て……桜樹（アイツ）溺死すると思いますけど」

松芳は染井吉野を見上げた。
もう。
この桜も今年が見納めかもしれない。

桜はまだとめどなく、花片を散らしている。

1.

「ねえ、よっしい、だから、これ、なんだって言ってるんだよ」

きいいっと、志摩津桜樹は叫んだ。

周囲には何もない山道の道路のわきで、段ボール箱を抱えさせられて、桜樹は立っていた。

吉鷹は車のトランクから続けてスポーツバッグも降ろすと、大学の封筒に、鍵と通帳と印鑑、携帯電話を段ボール箱の上においた。

「長谷部時宗さまのゼミは3時から。2時半にうかがう約束になっているから、急げよ。

アパートの住所は中に入っている」

「エ」

「これは当面4年間の生活費だそうだ。

一切、家には電話するなって。緊急の場合はオレの携帯に連絡しろ」

「こんなとこで、オレひとり、ほっぽり出す気かっ。

フザケンナっ」

吉鷹は無表情のまま、道路わきを指した。

にょっきりとアスファルトの柱らしきものが二本、道の横に立ち、『桃城大学』と看板がつけられている。柱の間からはゆるやかにくねった上り坂がのびていた。

舗装されていない上り坂は、しばらく前に雨が降ったのか、真黒の土が艶やかにぬかるんでいた。

「オレの車で行けというのか？」
絶対零度の声が言う。
桜の花片が車体につくのすら嫌悪する。
こんな泥道、吉鷹が純白の新車でのぼるはずがない。
「で、でも、オマエ、叔父貴のいうことには絶対じゃん。
オレのこと頼まれたんだろ」
吉鷹は片手を腰にあてると、あごをつきあげて桜樹を見下ろした。
「車を試乗するついでに、大学まで送るように頼まれた。
それだけだ」
それだけにしては、ずい分と面倒見がよいのだが、過保護に育てられた桜樹にはそこまで頭が回らない。
吉鷹はサヨナラも言わずに、車に乗り込んだ。
「えーっ、ちょっと、よっしーっ、待ってよぉっ。ここ、どこだよ、って、オレなにすんだってばっ」
遠ざかるＢＭＷに向かってわめいたが、あの吉鷹が戻ってくるはずがない。
当面？
当面４年間って言葉、あんのかよ。
その間、家には連絡をするなって……。

（これって……）

オレ、捨てられた？
みたい？？？

「うそぉ……」

桜樹はアスファルトにへたり込んだ。

なだらかな山道。
周囲には建物の姿も見えない。コンビニも近くで通り過ぎた覚えもない。

唯一あるのが、学校の看板とそのあいだの曲がりくねった登り道だ。
青空には白い雲が漂い、日差しは穏やかだが、田舎の風はさわやかと言うには少しばかり、肌に冷たかった。

志摩津桜樹はどうしていいかわからず、へたりこんだまま茫然としていた。

軽い足音とともに、ひとかげが近づいてきた。
桜樹と年の変わらない、小柄な少年だ。
黒いジーンズに黒のTシャツで、バックパックをひょいと片肩にかけて、両手に積み上げあられた本を抱えている。黒髪に黒縁メガネの、これといって目立つ少年ではない。

少年はすこしはなれたところで立ち止まり、かるく顎をつきだして桜樹を見下ろした。

桜樹はあわててたちあがり、荷物を両腕で抱きしめて道をあけた。

「ども」

と少年は通り過ぎた。

大学の看板のわきを抜けて、登ろうとしている。

ということはこの大学の生徒か。

「あ、あのう、待って」

少年は上半身をねじって振り向いた。

黒い影が桜樹にかかる。

逆光の中、眼鏡越しに少年の漆黒の瞳に桜樹が映った。桜樹を見つめる。きれいな、吸い込まれそうな瞳だった。

その時になって、桜樹は、少年がきめ細やかな透き通るような皮膚をしていることに気づき、わけもなくうろたえた。

「あ、あの、桃城大学に行けって、ここに置いてかれて、そのう、えと、オレ、ひきこもりで、これで大学も４度目で、それでたぶん、みんな、オレのことイヤになって」

じ、と少年は桜樹をみつめていた。

「そ、そのう、と、は、は、長谷部教授という人に、二時半に会わなきゃいけないんだけど」

少年はこっくりとうなずいた。

「僕もこれから教授のとこに行くから」

ついてこいということか、くるりと踵をかえした少年を、桜樹はあわてておった。

スポーツバッグを肩にかけ、ダンボール箱を抱えたままだ。

ずっとひきこもっていた身には、大荷物を抱え歩くのは、つらい。

舗装されていない泥道が、だらだらと曲がりくねったした山道が続く。ときおり、車やバイクが泥をはじいて横を通り抜けていく。

たしかに吉鷹のピカピカの新車とは程遠い、ながいこと洗車をされてなさそうなくすんだ車ばかりだった。

桜樹はなんども振り返り、

「ここ、大学だよね」

と念を押した。

「そうだよ」

その度ごとに、少年はそっけなく言う。

十分ほど歩き続けると、ただの空き地のような黒土がむき出しの駐車場に色褪せた車やバイクが止まっており、廃校のような木造の校舎と、ふるい鉄筋の建物が建っていた

「ここ大学じゃないよね」

と念を押すと、

「教授の研究室はこっち」

と少年は木造の校舎に向かった。

ドアを開いても、階段を上っても、ぎしぎしときしむ。人間より、妖怪のほうが似合いそうな建物だ。

こんな大学があるのだろうか。

化かされているのかもしれない。

吉鷹の嫌がらせか。

それにしては大がかりすぎるし、そもそも吉鷹は手間暇かけて嫌がらせをするほど、桜樹には関心を持っていない。

いつでも逃げれるように、と身構えていると、がらりと開いた扉から人影が飛び出し、少年にぶつかった。

少年の抱えていた本が四方八方に飛び散る。

「あ、あ、あ」

長い髪を首の後ろでくくり、のっぺりした顔の青年はやけにあわてていた。

「守屋さん?」

少年が不思議そうに言うと、

「し、死んでる」

青年が早口に言った。

2.

「死んでる?」

少年が聞きかえしたときには、青年はどたどたと階段を駆け降りていった。

「え、ちょっと、守屋さーん」

「今、守衛を呼びに行った。警察にも連絡したところだ」

背後からの声に、桜樹と少年は振り返った。

「あ、教授、どうしたの」

教授と呼ばれた初老の男性は、苦い顔で教室の前に立っていた。ということは、この男が叔父貴の言っていた長谷部時宗か。

こいつがすべての元凶かとむかむかしながら睨みつけた。

白髪の交じった髪だが、背は高く、肩幅もがっしりしていて、全身から力がみなぎっている。

ジーンズにチェックのコットンシャツのカジュアルな服装だ。彫りの深い顔立ちで、教授というより西部劇の俳優のような外見だった。

「死んでるって?」

黒髪の少年はひょいと、教授のわきをすり抜けて、室内に入った。

中は学校の教室半分の広さだ。目の前には十人ほどが座れる机があり、両サイドに何列もの本棚がぎっしりとならんでいる。
奥の大きく開いた窓からは初夏の景色が広がり、カーテンが風に揺れていた。
窓の横には教授のものらしい大きなデスクと椅子があり、その横で女は手足をぐにゃりとまげて横たわっていた。
マスカラをたっぷり塗った目を見開いて、グロスでてかったくちびるをぽっかりとひらいている。
黒ずんだ木の床にひろがったどす黒い血のうえに、濃い黒髪が、どっしりとうねり、ひろがっていた。

「あ、ホントウだ」

少年はひょいひょいと室内に入ると、女の上にかがみこんだ。鼻先をつきだし、女の首筋に顔を近づける。

（なんで……）
（なんで、こいつ、平気なんだろう）

たとえようもない違和感が体の奥底からこみあげてくる。

なまぬるい、ねっとりとした血の味が、鼻腔から桜樹の体内に侵入する。

ちがう。

距離があるから、血のにおいなど、するはずがない。

だが。

どくん。

心臓がつよく収縮した。

どくんどくんどくん。

心音が、脳内でがんがんと響きだし、目の前がくらくらとまわりだし、よろめき、かべにもたれ、それでも体を支え切れずにずるずるとすべって、床に尻をつく。

股間が生温かく濡れた。

だれかが桜樹の肩に手をおいて、なにかを言っている。

その声は、遠くに近くに響き、反響して、音が聞き取れない。

ちがう。

そうじゃない。

死体が怖いんじゃない。

この匂い。

この味。

オレは知っている。

それはもっと。

ずっと。

オレは……。

そう、オレは。

「うわあああああああ」

桜樹は教授を突き飛ばし、消火用の赤いバケツにかがみこむと、

胃の中のものを吐き出した。

二度、三度、と胃液を吐き出して、ぜえぜえと肩で呼吸をしていると、長谷部教授がやけに冷めた目で自分を見下ろしていることに気がついた。

「どうしたの」

黒髪の少年がもどってくる。

「志摩津のおちこぼれというのは本当らしい」

教授はひとり言のように言うと、現場保存は鉄則だが、と呟きながら、教室の中に入って行った。

奥の扉をあけ中に入ると、すぐにジーンズと、封のあけていないトランクスを持ってくる。

「向こうに洗面所がある。人が来る前に着替えなさい」

桜樹が這いつくばったまま、だらだらと汚物で口を汚していると、

「こっち」

散らかった本をひとまとめにして廊下に積み上げた少年が立ちあがった。桜樹が吐瀉したバケツを持ち上げる。

「藤木くんがしなくても」

長谷部教授は不快そうに言ったが、

「非常事態でしょ」

しれっと言って、藤木と呼ばれた少年は廊下の奥へ歩き出した。

桜樹もあわてて後を追った。

奥には、昔ながらの寒々しい洗面所があった。

藤木少年は奥の、清掃用具入れを開き、シンクに吐瀉物を流して、バケツをすすいでいる。

「はやく着替えなよ」

せかされて、桜樹は個室に入った。

濡れた下着を脱ぎ、バッグの中からハンカチをとりだして体をぬぐい、着替えた。

裾がやけに余る。

なんであんな中年――いや、初老の男が桜樹より足が長いのかと、むかっとして個室を出、口をなんどもなんどもすすいでいると、

「裾、まくらない」

藤木少年が見かねたようにしゃがみこんで、ジーンズの裾をまくりあげた。

「いいよっ、もうっ」

足でふり払って、腹立たしげに洗面所から出た。

長谷部教授は廊下で窓ガラスを背に腕組みをし、すらりと引き締まった足を伸ばして、考え込んでいた。

桜樹たちが出てくると、

「ああ」

と腕をほどき、

「守屋が下でほかの生徒たちといる。そちらに行っててくれ。間もなく警察も来るはずだ。ご家族にも連絡した。

それと、志摩津桜樹くん」

といちど言葉を区切ると、日に焼けた彫の深い顔を桜樹に向け、

「きみの受け入れについて、今日面談して決めるとのことだったけど、結論を今言った方がいいか」

桜樹の頭が真っ白になった。

「面談……？　受け入れって？」

「正直なところ私は生徒を増やす気はないし、きみの今までの経歴からしても民俗学に興味があるとは思えない。

ただ、志摩津家のご当主様の頼みをむげにもできないから、今日の面談で返事をすると志摩津のご当主様に言ったはずだが」

桜樹は口をパクパクさせたが、声がでなかった。

いま、結論を出されて、合格なわけがない。

もちろん、ここに通いたいわけではない。

だが、不合格になったからと、家に帰らさせてくれるはずがない。

そうしたら、行く場所がなくなるだけ。

今度こそ、本当の本気で、父や兄から殺されるかもしれない。

「で、でも、オレ」

「服は返さなくても」

と教授が言いかけたとき、

「ストーーップ」

と、藤木少年が人差し指を教授に突き立てて、言葉を遮った。

ぶあつい黒メガネの下で、漆黒の瞳をきらりと光らせる。

「なにもこんな時に決めなくてもいいでしょ。

それより、教授、昨夜はここに宿泊？」

「いや、東京の本宅で」

「証明する人は？」

「家人とか……守屋も一緒だったし。まあ、電車の車掌とか、近所の人も会話したかな。

アリバイ？」

生徒にしてはずけずけとしたぶしつけな言い方だったのに、教授はまなじりにしわをつくって、笑みをみせた。

藤木少年もにやりと笑う。

「そ、アリバイ。あって良かったね」

「どうだか。

いい年した弟たちの兄弟げんかの仲裁で呼び出されたんだ。あまり人に言えたもんじゃない」

「へえええ」

藤木少年は面白そうに言うと、

「行こ」

と桜樹の手をひいた。

「きみ、探偵？」

ときしむ階段を降りながら、桜樹は言った。

「は？」

藤木少年はきょとんとする。

「なんかしゃべり方とか、……平気だし」

血とか、死体、との単語を口に出せずにもごもご言うと、

「いろいろやっかいごとに巻き込まれる家系だからかなあ。慣れちゃったのかなあ」

藤木少年は天井をあおいで、ため息をついた。

3.

階下では、通せんぼするような形で、先ほどの守屋という青年が立ちふさがり、十代らしい少年少女に囲まれてわやわや質問攻めにあっていた。

「あ、藤木海がなんでいるんだよ」

めざとい少年が、険のある高い声を張り上げた。

「教授から本頼まれてたからだけど」

面倒くさそうな顔で、少年――藤木海という名らしい、は頭をかいてぼやいた。

「本？」

桜樹が不思議になって問うと、

「あ、僕、図書館のアルバイトだから」

「え、生徒じゃなくて」

「うん」

「て、そもそも図書館て、なに？」

藤木海は驚いたように目を見張り、

「本がたくさん置いてあって、貸出とかしているとこ」

と真顔で答えた。

「そうじゃなくて。なんで図書館のアルバイトがわざわざ研究室に本を持ってくるの。今って、そんなにサービスがいいの」
「そりゃあ大学の図書館だから当然でしょ」
「大学の図書館？」

どうも話がかみ合わないと思っていると、大学の本校は、桜樹たちが昇ってきた道の反対側にあり図書館や体育館、食堂はそちら側にある、ここは今年から長谷部時宗教授のために廃校をリサイクルして使用している校舎とのことだった。

「きみ、ほんとに何も知らないんだね」

けたけたと、眼に涙をにじませながら藤木海は笑った。

そこまで笑われるほどのことでもないとむくれていると、サイレンを鳴らしたパトカーが何台も来、警官がどやどやと黄色いテープを張ったり、生徒たちの整理をはじめた。
生徒をせき止めていた守屋はほっとした顔になって、

「桜樹くん、来た早々、大変だったね。大丈夫？」

と気づかってくれた。

「あんまり」

桜樹が仏頂面で応じると、

「そりゃあ、こんなんじゃね。
あ、わたしは教授の助手をしている守屋。あとでアドレス教える

から。
いつからゼミが行えるかわからないけど、それまで相談に乗るから。なんでも連絡して」
と人懐っこい笑顔を見せた。
「でも、オレ、不合格って」
「え」
と守屋は驚いた顔をした。
藤木海が口をへの字に曲げていった。
「首の皮一枚で、とめたけど」
「でもでも、教授、志摩津のご当主様の説得で根負けしてなかったっけ」
「それがねぇ」
海は手招きして長身の守屋をかがませ、こそこそと守屋に耳打ちをした。お漏らし、げろ吐いた、と聞こえてくる。
う、と守屋が言葉につまり、
「そんなあ、二十四歳にもなってお漏らしをしたことくらい……、まあ、ふつうはしないけど。でも、志摩津のおちこぼれってホントだったんだ。
すごいねえ、あの志摩津家の直系で」
とフォローをしているのだか、ダメだししているのか分からないコメントをする。

図書館のアルバイトって、ずいぶん教授や助手と仲がいいんだなあ、前に行った大学でもこんなだったっけ？　と考えていると、刑事が降りてきて、生徒たちから話を聞きたいと守屋に言った。

「ええと、じゃあ……」

と守屋が生徒をまとめて一階の空き教室に入らせた。

桜樹も海も一緒に入る。

「生徒はこれでぜんぶ？」

と刑事がきく。

教室内には桜樹たちのほかに女三名、男五名の生徒がいた。みな、桜樹よりは（あたりまえだが）若い。

「ええ、あとは先ほどの……亡くなられた野瀬あゆみさん。あと、彼、藤木海くんは図書館のアルバイトですが、研究熱心なので特別生としてゼミに参加してもらっています。

それと本日から参加する予定だったのが、この志摩津桜樹くんで」

「アイツ、自殺したんじゃねーの。

自己顕示欲と自己陶酔の塊だったじゃん。教授にいつまでも自分を覚えていて欲しいとかで試しに死んでみるって、いかにも野瀬らしいじゃん」

いきなり男子生徒のひとりが言った。

黄色く染めた髪を肩までのばし、原色の服にぬいぐるみやら花飾りをたくさんつけて、椅子の背もたれを前にして座り、組んだ腕に顎を乗せて背を丸めている。

あまり親しくなりたくない少年だった。

4.

「椎くん、椎行凪くん、いい加減なことを言わないように。
野瀬さんは殺されたんです」

守屋がぴしゃりと言った。
椎はきつい視線で藤木海を睨みつけた。

「じゃ、藤木だ」

「えええええええ？
僕？」

藤木海はびっくりしたように、自分をゆびさしてきょとんとした。
いくらなんでもあり得ない。
藤木海の様子からして、人殺しには程遠い。
そのくらい、初対面の桜樹にでも分かる。
だが、椎は椅子に座ったまま、

「だって野瀬にさんざん苛められていたじゃないか。アルバイトのくせして、教授のお気に入りって」

心底怒っているように、藤木海を睨みつけている。

「椎くんいい加減にしなさい」
「椎、お前こそ野瀬を殺したんじゃないのか」

守屋がぴしゃりと言うと、別の男子生徒が言うのが同時だった。
手足がひょろりと長い、ごく普通のどこにでもいそうな男子生徒

だ。
上半身をかがめて身を乗り出し、
「お前の方が野瀬ともめてたし、藤木を苛めているのは椎も、だろ。次は藤木を殺したりして」
僕、殺されるんだって、と藤木海が面白そうに呟いた。
「でも、ふつうに考えたら、教授がやったんじゃないの。だって教授はここに住んでいるだし、野瀬が押し掛けてトラブって、なんていちばんありがちなパターンじゃないか」
気まじめそうな少年が、くいっと眼鏡をあげながら真顔で言った。
それまでじっと話を聞いていた少女が身を乗り出して早口で何かを言った。
日本語じゃない。
別の男子生徒も口論に加わる。
こちらも日本語じゃないし、また、別の外国語のようだ。
「ち、ちょっと……おい、なんなんだ、このクラス」
刑事が守屋に言った時。
バン……と大きな音が響いた。
いまどき珍しい三つ編み眼鏡の、つるんとしたおでこの長身の女の子が両手で机を叩いていた。
心底怒っているようで、きっとした眼で、教室中をぐるりと見まわし、胸元で指を動かす。
手話だ。

『みんな、分かっているの。
これはシミュレーションじゃない。
野瀬さん、亡くなったんだよ』

何人かは手話が分かり、分からない人間もおおよそ意図は伝わっているようで、しんと教室が静かになった。

三つ編み少女は心底傷ついているように、がくりと肩を落としている。
本当に。
彼女だけはまともに悲しんでいるようだった。

『仲、良かったんだ』

桜樹が手話で聞くと、少女は栗鼠のようにくるっとした瞳に、桜樹を映した。

『もっと、仲良くしておけば良かった』

「桜樹くん、手話できるの」

守屋が驚いた顔で、桜樹にいった。

「え……と、まあ、昔、ボランティアサークルで」

本当は中学の時にじゃんけんで負けて、福祉部に無理やり入れられたからだ。
それを言うとたいてい馬鹿にされたような、同情されるような顔をされるので、ボランティアサークルと格好をつけている。

「便利ぃ〜、かも」

場にそぐわない、間の抜けた声で藤木海が言ったとき。

「一体、なんなんだ、このクラスは。
イマドキの大学生は、みんなこんななのか」

刑事が薄気味悪そうに、守屋に言った。

「教授の方針で、ゼミはつねに生徒同士の議論にて運営しているんです。テーマ選びから資料揃えもすべて生徒が自主的に行っています。
言葉に頼って議論をしないためにも、中国や韓国の留学生、言葉の不自由な柊さんにも入ってもらっています。
だからその癖が出てしまったのでしょう」

あの娘。
柊さんというのか、と、桜樹は心の中にメモをした。

「なんだ、要は教授の手抜きか。
こんな田舎の三流大学だもんな」

守屋がすっと険しい視線を上げた。
先ほどまでの茫洋としていた姿とは別人。
生徒たちも真顔になって、刑事を睨みつけている。

「な、なんだよ」

まだ若く、にきびだらけの顔の刑事がたじろぐと、椎行凪がガタ

ゴト椅子を揺らして笑った。

「やだやだ、これだから貧乏人ってさア。
長谷部時宗教授が誰なのかまったく知らないなんて。
上司からぶん殴られるぜ」

「椎クン、その指摘は的外れだ。
資産の有無と教養のレベルに相関関係はない」

先ほどの眼鏡男子が反論すると、柊がつかつかとふたりの間に立ち、パンとこぎみよい音で手を叩いた。
きりりと二人をねめつける。

「はい……」
「すみません」

意外にも、プライドの高そうな男子生徒ふたりが、しゅんとおとなしくなった。

「彼女、柊まどかさんがこのゼミのリーダーです。
柊さんになんでも聞いてください」

守屋が冷ややかに言った。
柊まどかは若い刑事の前にすらりと立つ。
顔つきからして、彼女も刑事に腹を立てているようだ。
どうやら、ゼミの前では教授の悪口を言わない方がいいらしい。

「何でもって、唖じゃないか……」

柊は白墨をとると美しい筆跡で、

大丈夫です
と黒板に書いた。
「筆談ホステスだっているのに、筆談のゼミリーダーのどこがいけないの」
今まで黙っていた女の子が言った。
ショートカットで小顔の、けっこうカワイイ系のコだ。
頬杖をついて、ふくれっつらで刑事を睨んでいる顔も、なかなかイイ。
若い刑事はちらちら、助けを求めるように守屋を見るが、守屋は素知らぬ顔をしている。
（あー、やっちまったな、コイツ）
桜樹は、すこしばかりこの無知な刑事に同情した。
椎のように貧乏人が、とまで荒く括らないけど、吉鷹や、他の志摩津の門下生ならこんなミスはしない。前情報を得るのに手を抜かないし、目の前に出ている情報だけで、相手をなめてかかることもない。
この大学の場所からすると、茨城県警の巡査部長だろうか。
茨城県警には志摩津の身内はいなかったよね、と考えて、ぎくりとなった。
どくどくと心臓が波打ちだす。
殺された？
って、ことは殺人事件だ。

殺人事件なら、とうぜん検察が絡んでくる。

松芳兄さん……。

よりにもよって、松芳兄さん？

父親や長兄より、松芳のほうが陰湿で陰険。

桜樹が最も苦手な松芳に、すべてが筒抜けになる？

（ど、ど、ど、どうしよう……）

背筋がすうっと冷たくなる。

今から教授に口止めしよう、そうだ、藤木くんや守屋さんにも、と気づいた時。

がっしりとした体つきの刑事が、

「小便漏らしたってどいつだ」

と大声で教室に入ってきた。

5.

教室がしんと静かになった。

（洩らした……？）
（だって大学生で？）
（まさかねえ）

ひそひそとざわめきが起きる。

守屋は桜樹に背を向けて立っていたが、ありありとこちらを気にしている気配がする。
藤木海も桜樹を見ないように見ないようにして、露骨に気にしているのが視界の端に見える。

「おい、いるんだろ。
小便漏らして長谷部時宗にパンツ借りたヤツってのが」

さらに大きい声で、ドラ声の刑事は言う。

人権侵害もいいところだ。
プライバシーという概念はないのだろうか。

こらえきれなくなったようにちらちらと、海が桜樹を横目で見た。

観念して、こそっと手を上げると、

「ちょっと来てくれ」

とドラ声で言われ、教室中の視線が桜樹の全身に突き刺さった。
柊まどかやショートカットの可愛いコも、目を見開いて桜樹を見ている。

酷い。

死にたいというか。
この場から消えたいというか。
いっそ、地球が爆発してほしい。

ぜったいにこの刑事、あとで訴えてやる。

「僕も一緒にいたけど」

海がのんびりした声で言った。

「じゃ、君も……ああ、あんたも昨日、長谷部時宗と一緒にいたんだろ。
ちょっと来てくれ」

ドラ声の刑事は守屋を指差すと、急き立てて階上へあがらせた。

「……兄弟は全部で六人……そのうち二人が……職業は会社員と弁護士と芸者で、いえ、だから」

古びた校舎の二階の廊下。
午後の穏やかな日差しにふさわしく、長谷部教授はのんびりと聴取に応じていた。
だが、反比例して、ぎょろ眼の初老の刑事が真っ赤に怒り、語気が荒くなっていた。

他にもう一人、いかにもキャリア組と言った背広を着た若い刑事もいるが、無言で話を聞いているだけのようだった。

「じゃあ、弟が三人、昨夜は一緒にいたんだな」
「ですから二人ですって。ひとりが会社員で、もうひとりが弁護士と芸者をして」
「あんた、警察をおちょくってんのかっ。そんなふざけた奴いるわけねえだろっ」
「そりゃあ、わたしもそう思います。優秀というか、器量良しとほめてやるべきか。
でも、現実に弟がそれで。それが兄弟げんかの原因なんですが仲裁を頼まれても、難しいところなんですよね」
「もういいっ、嘘だったらすぐにわかるからな。弁護士会に問い合わせるっ、名前は」
「長谷部結香と李香。所属はたしか大阪弁護士協会だったかと」

刑事がなんだ、という顔をした。

「なんだ、女でふたりなんだな」
「いや、弟でひとりですよ」

うわあああ、と、刑事が頭をかきむしった。

「教授、なに遊んでいるんです」

呆れたように守屋が言った。
ああ、と長谷部教授は白い歯を見せ、

「我が家のありのままを話してみたのだが、どうやら世間一般には理解されにくい、ということが判明した」

「そんな実験、今しなくても」

守屋は両手を腰に当てて嘆息した。

まったく、その通りだ。

自分の生徒が殺されたというのに、ずいぶんと落ち着いている。

「しかし、どうやら私が容疑者のようだ。

たまたま昨夜はいなかったとはいえ、この奥はわたしの住居だし、いちど部屋にも入ったし」

「ああ、警部、その件で小便漏らしたガキ連れてきたっスけど」

声の大きな刑事が言うと、教授を詰問していた刑事が顔を上げ、桜樹と海をじろりとみた。

「ちがうちがう、僕じゃない。こっち」

と海はひっしに手を振り、桜樹をしっかと指差した。

教授はうなずくと、

「そうだね、藤木くんは守屋とぶつかって、本を散らかしてそこで拾っていて、で、志摩津くんはここでバケツにうずくまってもどしていて……あ、バケツは？」

はいはーい、と海がいきおいよく手を挙げ、

「洗ってトイレに干してきた」

「証拠物件を」

ぎょろ目を動かし威嚇するように脅しつけると、

「だって、ゲロだよ」
しれっと海が言う。
「そうしたら、志摩津くんが失禁していたんだ。教育者として生徒をそのままにしておけないだろう。で、部屋に入ってジーンズと下着を持ってきた」
「志摩津……？」
今まで黙っていたキャリアの刑事が口をはさんだ。
細い糸のような、見えているんだかどうかわからない眼を桜樹に向ける。
「志摩津って、あの志摩津家の」
「志摩津本家の三男の桜樹くんだ。本日よりわたしのゼミに参加してもらう予定だった。お兄さんが水戸地検にいるはずだが」
「志摩津松芳検事ならよく存じ上げています。確認させていただいても？」
「だめっ、絶対だめっ」
「是非、そうしてくれ」
桜樹と長谷部教授が同時に言った。
「だめだめだめ、絶対だめだって」
桜樹はじたばたと足をふみならした。
刑事たちや守屋、海の不思議そうな視線が桜樹につきささる。

長谷部教授は上半身をかがめて、桜樹に視線をあわせた。
桜樹だって身長１８０センチはあるのに、日本人離れした長身だった。

「志摩津くん、警察の捜査に協力するのは国民の義務だよ」

桜樹はぶんぶんと首を振る。
教授は松芳の陰湿さを知らないから、そんな非人道的なことを平気で言えるんだ。

「亡くなったのはゼミの生徒で、警察がきちんと捜査を行えるように情報を提示して協力するべき……ええと、そう、お巡りさんたちに、ここにいる人たちをいい人か悪い人か、調べてもらわなきゃいけなくてね。桜樹くんのお家の人にも聞けなきゃ、お巡りさんが大変だろう？
分かるかな？」

ぷっ、と藤木海が噴き出した。
守屋も口を押さえ、肩を痙攣させて笑いをこらえているし、刑事たちも生まじめな顔を装いながらも、薄皮一枚下で爆笑しているようだった。

「ンなの分かってる！　でも、怖いんだっって」

長谷部時宗は目の細い刑事に向きなおり、

「志摩津検事に身元確認をお願いします。
志摩津くんとは今日初めて会ったばかりなので、わたし自身、身元の保証には自信がありません」

ときっぱり言った。

藤木海は体をくの字に曲げてひーひー笑いだし、「もうダメ」「息が苦しい」といいながら笑い続けている。

「お前、失礼だろっ」

むっとして、桜樹が蹴っ飛ばすと、

「ゴメンゴメン、あまりに可笑しくて」

と眼鏡をずらして、笑い涙をぬぐいながら謝った。

教室の中ではまだ鑑識作業が続いている。

「しばらく部屋は使えそうにないな」

長谷部教授がひとり言のように言うと、

「そうしていただければ助かります」

細い目の刑事が礼儀正しく言った。

どことはなしに、吉鷹と似た、そつのない匂いがする。

イヤな感じだ。

「それなら、しばらくは守屋のところで居候するが、喪服とスーツは取らせてもらいたいが構わないか。

ご家族にも会わなくてはいけないし」

教授は息を吐き、

「親御さんの気持ちを思うと、辛い」

と厳しい顔で呟いた。

「ねえ、教授」

藤木海がようよう笑うのをやめて、息を整えながら言った。

「教授、それで桜樹の面談の件だけれど、やっぱり不合格？
なんだよね？」

桜樹はびっくんと飛び上がった。
そうだ。
肝心な件を忘れていた。
不合格になったら、桜樹には行く場所がない。

けど……。
けどぅ……。
どんどん、恥をさらしている気がする。
桜樹が悪いわけではないのに。

長谷部時宗は不思議そうな顔をした。

「ちょっと待ってくれ、不合格だなんて誰が言ったんだ」

桜樹と海、守屋が教授を見ると、

「……いや、わたしはゼミが再開したらきなさい、と言うつもりだ

ったのだが。それで藤木くんはさえぎったのか」

海はこっくりうなずいた。

「だって、教授、桜樹のことおちこぼれとかいうし。服は返さなくていいって」

「そりゃあ、そうだろう。返してもらっても、君なら着るかい。漏らした後に履かれたパンツとジーンズ」

その場にいた皆が、刑事を含めていっせいに首を振った。

「これじゃあ、あの堅苦しい志摩津家では、辛いだろうと言ったつもりだったんだ。

守屋だってそうだったんだし」

守屋はびくりと肩を怒らせて、

「わたしは人前で失禁したことはありません、一緒にしないでください」

ぴしゃりと言って

「でも、まあ、良かった、ですかね」

と、ふうっと息を吐いた。

6.

長谷部教授は、あとは守屋に任せると言って、今からゼミ生徒たちの様子を見、刑事たちと学長室へ行き、野瀬の家族に会いにいくと告げ、慌ただしく出ていった。

桜樹の大荷物を見て、守屋は吉鷹のメモにあったアパートまで、車で送ってくれた。

大学から山道を降りてすぐのふもと、表通りに面して近くにコンビニも見える、二階建のアパートだった。

オートロックでもなければ、鉄筋のマンションでもない。

寿荘という名の、古臭い、いかにも昭和の時代のアパートだ。

なぜか、藤木海も一緒に乗り、同じアパートで降りた。

「なんでついてくるの、引っ越し手伝ってくれるの」

桜樹が言うと、藤木海はぷううっとほおを膨らませた。

「どうして僕が君の引っ越しを手伝うわけ？

ここ、僕のアパート。僕もここに住んでるんだ」

「そうなんだ。じゃ、これ持ってって。

二階。大変なんだ」

桜樹は段ボール箱を海に突き出した。

海はあんぐりと口を開けた。

「君さ、兄さんがいるんだっけ。すっげー過保護にされてきたろ」

「ま、さ、か。アイツら見たら、絶対そんなこと思わないって。すっげー悪魔で暴君なんだ。
日々虐待されて、暴力に罵詈雑言。
従兄もいるんだけど、コイツがまた、ちょー根性歪んでいて、性格悪くて。

えーと、部屋は二階のいちばんはし……あー、西日がすっげー入りそう。
ち、よっしぃ、どうせ適当に選んだんだ」

錆びた鉄の階段を上り、一番奥の部屋の鍵を開けた。
真新しい畳の匂いのする和室。
すすけた磨りガラスの窓から西日が射しこんでいる。

中には何もなかった。
ベッドと卓袱台、机に本棚。
シンプルな食器や調理道具、日常生活品、勉強道具があるだけ。

テレビもなければＰＣもなく、ゲームもオーディオセットもマンガもない。

「なんだよっ、これっ」

桜樹はあわてて段ボールをひっくり返し、スポーツバッグの中身もぶちまけた。
やけに軽いと感じてはいたが、中身は着替えと、弁当にお茶っぱだけだった。

「ウソウソウソ、テレビもパソコンもゲームもないっ」

ゲームのない生活なんて耐えられない。慌てて、吉鷹に電話をかける。すぐに回線がつながった。

「よっしー、ひどいじゃない、ゲームないじゃない、パソコンもテレビもないじゃない、なんだよ、これじゃあ……」

最後までしゃべる前に回線が切れた。

リダイヤルをするが、『お客様がおかけになった番号は……』とそっけなく流れてくる。二度、三度とかけなおしてもおなじだ。

「うそぉ……」

ふんふんふん、と勝手に浴室をのぞいていたらしい海がもどってきた。

「部屋のつくりは同じだねえ、って、どうしたの」

「な、なにもない……」

「そお？　ひととおりそろっているように見えるけど」

「ないんだよっ！」

桜樹は地団駄踏んで叫んだ。

「ないんだってばっ。
ないないない。
なんにも必要なものはないっ。
こんなんで生きてけるわけないじゃん。
あいつら、オレに死んでほしんだよっ」

海は膝をかかえこんでしゃがみこみ、ぶちまけられた桜樹の荷物

をひっくりかえして吟味していた。
輪ゴムで止められた大きな平べったい紙の包みを開くと、ワンウェイの容器に詰められた弁当が出てきた。

「あ。
お弁当、あるよ」

これ見よがしの弁当は、いかにも母親の想いらしく、露骨で胸糞悪い。

「いらない」
「いたんじゃうよ。お茶っ葉も入ってる。
狭山のいいヤツだよ、これ」

桜樹は首を振った。

「じゃ、僕がもらう。
お茶淹れよ」

海が急須、急須と、広げられた荷物や台所を探すが、急須はなかった。

「ないよ、ないんだよ。
ほら、やっぱり、あいつら、なにも用意してくれてないんだ。なんだよ、お茶っぱ入れて急須がないなんて。どうしろって言うんだ。
結局、オレのことなんて、どうでもいいんだ。
オレなんかいなくなればいいと思ってんだ。
当面四年間、家に帰っちゃいけないって、オレに死ねって言ってんだよっ」

ぱあん、と小気味の良い音がした。
藤木海は両手を叩いて桜樹のしゃべりをやめさせると、
「なにぐたぐた言ってんのサ。急須なんて百円ショップでいくらでもあるじゃない。いいよ、もってくる」
と早口でまくしたてた。
去られると思うと、急激にさみしさが襲った。
このままひとりきりになるかもしれない。
怖い。
怖い怖い怖い。
桜樹は慌てて、海の足にすがりついた。
「オ、オレもついてっていい、お、お、お弁当あげるから」
海は硬直し。
心底呆れたように桜樹を見下ろした。
「いいけど、ね。
君の兄さん、いつもどうしているのか、ホント見てみたいよ」
とため息をついて、言った。
おなじ二階の、東の端にある藤木海の部屋はみたところ間取りはいっしょだった。
六畳一間の和室。小さな台所がつき、手洗いと風呂は別。
部屋のいたるところに本が積み上げられている。難しそうな専門書だ。部屋の片隅にたたまれた布団とちゃぶ台があるだけの、桜樹の部屋よりもさらに何もない部屋だった。

「藤木くんのとこも文化的なものないんだね」

ゲームさせてもらえるか、せめてもテレビが見れると思っていたのに。

「あるよ、携帯。ほら、こんなに薄くて、テレビ電話ができるんだ」

海は嬉しそうに薄型の携帯をみせびらかすと、やかんを火にかけた。

ちゃぶ台をひろげ、お弁当の包みをほどく。中は、おにぎりが十個。鶏のから揚げと、卵焼きがぎっしりと詰められていた。冷凍ミカンもついている。

一人分にしては量が多い。吉鷹と一緒に食べることを考えていたのかもしれない。

あの男が桜樹と一緒に食事するわけはないのに。

「おいしそう」

海は指をぺろりとなめて、小さな口をあんぐりと広げて、おにぎりにかぶりつく。

心底おいしそうに食べているのを見ていると、食欲が出てきた。

ぐーっとおなかが鳴る。

「食べなよ」

と海が弁当箱を押し出したので、桜樹は素直におにぎりをほおばった。

懐かしい味がした。

懐かしくて、遠い味だった。
涙が零れた。

「人が……人が死んでたんだ」
「うん？」
「こ、こわ……。
怖くて」
「うん」

桜樹は声を上げてわんわん泣いた。
泣きながら。
なんで、みんな怖くないんだ、
死んじゃうんだ、
いつかは死んじゃうのに、なんで真面目に生きたりするんだ、
とぐしゃぐしゃになりながら、訴えた。

藤木海は眼鏡の奥の漆黒の瞳で、じっと話を聞いていたが、

「お茶淹れるね」

抹茶の薫り高いお茶を、前に置いてくれた。
鼻腔の奥に、抹茶の安らかな香りが広がる。

すこし。
気持ちが落ちついて。

恥ずかしくなった。

藤木海は片膝を立てて、片手で抱いた。

黒い衣服から出た皮膚は、白くきめ細やか。
大ぶりの、やぼったい黒縁メガネをかけているが、よくよく見ると、漆黒の吸い込まれそうな瞳と、小さなかわいらしい口元の、相当な美形だ。
体つきも、華奢ではないが無駄な肉がなく、しなやかでバランスも整っている。

海は、からかうように唇に微笑を浮かべた。

「さっきさ、キミのイトコ、ワンコールで出てたよね」
「ちがうよぉ。居留守電だよ。
ぜんぜん出やしない」
「一回目の。
ワンコールだったでしょ、待ってたんじゃない？」
「待ってた？」
「警察から身元照会があったんじゃないの。
で、連絡を待ってたんでしょ。
心配してんじゃない。
もう一度、ちゃんとかけなよ」

そんな筈、あの吉鷹に限ってあるわけない。
くどくどと吉鷹の酷さを海に訴えたが、海は電話をかけろと譲らない。

「じゃあ、一度だけ」

根負けして電話をすると、やはり留守番電話に接続される。
生徒が殺されていたこと、でも、いちおう教授から合格をもらったこと、変な刑事がいたことなどを留守電に入れると、いきなり吉鷹が出た。

「大丈夫なのか」
「分かんない」
「じゃ、大丈夫なんだな」
一方的に電話は切れた。

やっぱり。
桜樹のことなんか、ぜんぜん、心配してないじゃぁないか。

藤木海に文句を言う。

「そんなもんでしょ」

あっさり言って。
ず。
ずずずーっ、と、旨そうにお茶をすすった。

7.

ぽかぽかした日差しの中で、桜樹はうとうとと目を覚ました。
小さな電子音が規則正しく鳴っている。
やけに身体があたたかいと思うと、桜樹の腕のしたに、色白の、
密集したまつげを伏せた少年がぐっすりと眠っていた。

「うわあああああっ」

桜樹は飛び上がった。

ココハドコ
コイツハダレ
コノ音ハ

奇妙なまでに殺風景な部屋。
何も文化的なもののない部屋。
ずっと電話が鳴っている。

「ん？　電話？」

少年の枕元に、折りたたまれた黒ぶち眼鏡と、薄型の携帯があり、
ずっと鳴り続けている。
表面のディスプレイに「守屋さん」とチカチカ表示されているので、目覚ましのアラームではなく、電話のようだ。

桜樹は慌てて藤木海を揺さぶった。

「ねえ、藤木くん、電話。

守屋さんからみたい。
ずっと鳴っているよ、大丈夫？」

うー、とか、あー、とか呻って、藤木海はもぞもぞと深く布団にもぐる。
すごい。
寝起きの悪さだ。

「ねえ、起きてよ。ずっと鳴っているよ、守屋さんからみたい」

強く海を揺さぶっても、くうくうと規則正しく寝息を立てて、起きる気配はない。
まだ、電話は鳴り続けている。
よほど重要なことなのか。

「もしもし、あのう、藤木くん、おきなくて」

とりあえず、桜樹が出ると、

『え、桜樹くん？　良かった、桜樹くんを探してたんだ、番号、聞き忘れてたし、家にもいないようだし』
「藤木くんのとこにいて」
『あー、こっちね』

言うと同時にドアがノックされた。
ドアを開けると、携帯電話を耳にあて、ビニル袋を下げた守屋が立っていた。
快晴の空をバックに、今朝も、にこやかな笑顔だ。

「あ、ありがとう……って、ずい分、仲良くなった、みたい、だね

？」

六畳一間の和室は玄関から丸見え。
ひとつの布団の半分に、まだ藤木海がぐでっと寝ている。
誰にでも、桜樹と海が一緒に寝ていたことは、一目でわかる。

「あ、いや、これはその」

何もないアパートで、ひとりで寝るのも、ひとりで起きているのも怖くて、散々嫌みを言われながら藤木海の部屋に居ついてしまったのだ。

「藤木くんは……起きないよね」
「うん。ぜんぜん」
「藤木くん、朝は苦手だからね。
朝食、差し入れで持ってきたんだけど、置いとくね」

守屋が声をかけて、コンビニの袋を卓袱台に置いたが、海は布団を腕で抱えたまま、ピクリとも動かない。

「桜樹くんにはこっち」
「え、なになに。オレ、朝は甘いモノがいい」

桜樹が身を乗り出すと。

守屋はにっこりと取り出したロープで、ぐるぐる巻きに桜樹を縛り上げた。

「なになに、何すんだよっ」

桜樹は慌てて暴れるが、ますますロープは身体に喰い込んでいく。

「ごっめーん、松芳サンに頼まれちゃって。
それにしても、ホント、志摩津の直系なのに隙だらけだねえ。
それとアドレス交換させてね」

桜樹の携帯をポケットから抜き取ると、勝手に赤外線通信している。

「ウソっ、なんで、兄さんが。
って、なんで守屋さん、兄さんを知っているの。裏切りモノ、志摩津のスパイっ？」

むくっと藤木海が起き上がった。
ぱちりと開いた、漆黒の吸い込まれそうな瞳を守屋に向ける。
寝ぐせで髪はぐしゃぐしゃのまま。だが、瞳は鋭く冴えている。

「桜樹、どこに連れてっちゃうの」
「あ、教授のところだから大丈夫。
松芳サンが教授のところに挨拶に来るので、桜樹くんも連れて来いと頼まれて」
「なんで縛るの」

藤木海は色白のほおを張りつめたまま言った。
もっともな発言だ。
うんうんうんと桜樹は縛られたまま頷く。

「あー？　そういや、なんでだろ。
松芳サンの趣味？」
「オニだからだよ、アクマ、サディスト。

そうだ、藤木くん、一緒に行こう。
兄さん、見たいって言ってたじゃない」

桜樹が身を乗り出して誘うと、

「こら」

守屋がぐいとロープを引っ張った。

「藤木くんは関係ないでしょう。
まあ、私も元志摩津の門下生で、長谷部の家に転門したクチだから、ちょっと松芳サンには立場が弱くて。
でも、松芳サンは優しくて、すっごく面倒見がイイから心配ないよ」

「うそつけ」

即座に桜樹は否定した。
優しい人がどうして、実の弟を縛り上げるんだ。
藤木海も布団を抱えたまま、じっと、心配そうに桜樹を見ている。

「松芳サンは超エリート検事だから、ちょっとキツイところはあるけど。在学中に司法試験通って、最短で検事になったクチ。
しかもすっごい美人なんだよね。
女性の有罪率１００％だって」

ん？　と海が小首をかしげた。

「美人と有罪率って関係ある？」
「すっごいイイ男に真正面から睨みつけられると、どんな悪女や魔女だってコロっとイってしまうんじゃない。

それだけイイ男ってこと。
心配ないから。寝てていいよ。ちゃんと鍵かけるんだよ」

守屋が言い終わる前に、藤木海はぽてっと布団に倒れこんだ。
すでに、熟睡しているようだ。
くうくうと寝息が聞こえてくる。
まったくもって、頼りにならない。

結局、守屋にロープを巻かれたまま、車に押し込められ、大学に連行された。

昨日の妖怪学校のような教室ではなく、通りをはさんで向かいの本校である。田舎の大学らしく、広い敷地に校舎が点在しており、日曜日だと言うのに生徒たちもけっこういて、なんだかみんな、生き生きと楽しそうにしている。

ロープでぐるぐる巻きにされ守屋に引きずられている桜樹は人目につくらしく、ものすごく、視線を感じる。

昨日に引き続き、なんでじぶんばかり、こんな目に会わなきゃいけないんだろう。
なんで、こんな大学にいつまでもいなきゃいけないんだ。
こんな生活しなきゃいけないんだ。
自分がどんどんかわいそうになってくる。

「行こう、行こ。
早く行こ」

桜樹が足を速めると、

「あー、なんだかんだ言って、やっぱり早くお兄さんに会いたいんだね。
いろいろ心細かったしね」

にこやかに、守屋が言った。

大学の本校の、教職員が使うらしい、立派な応接室に桜樹は連れられて行った。

革張りの重々しいソファーに、長谷部教授は昨日と同じラフなジーンズ姿でくつろいで座っていたが、松芳はグレーのストライプのスーツをきっちり着、背筋をぴんと伸ばしていた。

色白の鋭角の貌に、細い銀縁の眼鏡。
神経質な眼をぎっと桜樹に向ける。

「お前……」

松芳はすらりと立ちあがった。
日々鍛錬を怠らないだけあって、細い、抜き身の刀のような体形。
鋭い眼で射抜くように睨みつける。

女性じゃなくたって。
犯罪者じゃなくたって。
とりあえず謝ってしまうにきまっている。

8.

「お前、一体何なんだ。
休日の帰省中に茨城県警から身元照会が入って、殺人現場で、も、洩らしたガキがいるが本当に弟なのかって。
検事の私が、茨城県警から……っ！　私の気持ち、お前に分かるかっ」

桜樹はバン……とドアにへばりついた。
こいつのどこが優しいってんだ？

「だ、だって、人が死んでたんだ。怖くて……」

ピキピキピキ、と松芳が凍りつく音がはっきりと聞こえた。

「お前、志摩津の直系だろうっ」
「オレだってしたくてしたんじゃないやいっ」
「ふざけんなっ。
鍛錬を怠っているからそうなるんだ。
腹筋五百回、今しろ、すぐしろ、数ごまかすな」

桜樹は（いや、だって、大学じゃん、教授もいるじゃん、縛られてるじゃん）とぱくぱく口を動かしたが、松芳は居丈高に桜樹を見下ろしている。
桜樹がおろおろしていると、

「松芳くん、君の気持も分かるが、一般的には洩らした当人の方が、ずっと恥ずかしいんだ。
そのくらいにしてやってくれ」

長谷部教授が桜樹を庇った。
松芳は両手でバンと机を叩くと、ぐいと顔を前に突き出した。
ぎりりと長谷部教授を睨みつけている。

「おおっと」

と長谷部教授は道化たしぐさで身をひいた。
なんとはなしに、近所のガキの相手をしているオジサンのようである。

「私は検事です」

松芳はキランと眼鏡を輝かせて言った。
松芳は桜樹より百万倍プライドが高い。松芳に限って言えば、洩らした当人より恥ずかしい思いをした、かもしれない。

「父や兄とも相談して、桜樹は連れて帰ることにしました。
長谷部のご当主さまにはご迷惑をおかけしました。後日、改めて御挨拶に伺うつもりです」
「オレ、帰れるの？　帰っていいの」

桜樹が縛られたままはしゃぐと、松芳は桜樹の襟首をつかみ、顔をよせ真正面から睨みつけた。

「お前みたいなヤツは一生涯、座敷牢にひきこもってりゃいいんだ」
「それは志摩津家ご当主の発言？」

長谷部教授はちらりとも桜樹を見ずに言った。

「飛翔くんは昔から、感情の発露は静かだが、意志は固かった。どんな状況であれ、いちど決断したことを翻したことは一度もなかったと記憶しているが」

松芳の骨ばった指から力が抜けた。

くちびるを曲げ、不服そうに視線を床に落としている。

長谷部教授が窓から射す陽光を背に立ちあがった。

逆光で、表情がはっきりと見えない。

「もし、桜樹くんを連れて帰りたいならば、飛翔くんから直接連絡が欲しい。

一応、私としても預かった手前というものがある。

じゃあ、私はこれで失礼させていただく。今はいろいろ取り込み中なんだ。

守屋も来てくれ」

「あ、はいはーい。

じゃあね。兄弟仲良くね」

守屋は手を振ると、長谷部教授の後を早足で追いかけ、応接室から出ていった。

どうやら、桜樹はまだ帰れないらしい。

長谷部教授、なんで余計なことを言うんだろう。

桜樹自身にはなんの関心もないようなのに。

松芳はため息をつき、心底不満そうに桜樹のロープをほどいた。

「帰る。駐車場まで送れ」

「イヤ」

松芳は桜樹の首に腕をかけ、ぐっと締めあげた。

「送れ」

「ハ、ハイ……」

頭脳明晰な兄は、地図を確認することなく早足で歩いて行く。桜樹より、よほど構内を把握しているようだ。キャンパス内で見るスーツ姿の背中は、家で見ているより、さらに大人びていた。

駐車場は大学の敷地に接していて、日曜日なのに駐車している車の数は多い。

へき地にあるため、通学は車でしている人が多いようだ。

「守屋さんて、前、うちにいたんだって？」

「ああ？

覚えてなかったか？　志摩津の内弟子だったのに、長谷部家に引き抜かれたんだ」

「なんで？」

「連中、口がうまいからな」

松芳はイライラと、気障なしぐさでストレートの髪をかき上げた。女性が見ればカッコいいと思うのかもしれないが、実の弟からすると、アホだ。

「言っとくがな、長谷部の魑魅魍魎に比べたら、志摩津なんて単純明快で、ずっとマシなんだ。

お前は自分が志摩津本家の直系だということ、忘れるなよ」

「……」

「きちんと三食とって、ちゃんと鍛錬しとけよ」

松芳は、よれよれになった桜樹のTシャツの襟をととのえ、裾をひき、はあっと息を吐いて肩を落とした。

「なんで、こんなだらしなく見えるんだろう」
「知るかよ、オレのせいじゃないよ。生んだ母さんに文句言えよ」
「あまり恥をさらすんじゃない」

キツイ眼で桜樹をひと睨みすると、松芳は車で去って行った。

やれやれ。
帰ってまた寝よう、と思った時。

強い視線を背に感じた。
できれば振り返りたくはないが、見ずにはいられない。

振り返ると。

椎行凪がそこにいた。
どピンクで塗装された軽トラから降りてきたところだった。
今日もビニールやらぬいぐるみやらコサージュやらをあちこちにつけた、奇妙な様相だ。
ぽかんと目を見開いて、走り去った松芳の車を見ていた。

「今のって……」

9.

「お前の恋人？」

椎行凪のいきなりの発言に、桜樹は飛び上がった。

「はあああ？　なんで、そーなるんだよ。
いや、ふつーに、兄さん、なんだけど」
「うっそお、似てねー。カッコいい。
独身？　何している人」
「検事で、仕事一筋。すっげーイヤな性格」
「うわぁ、憧れる……」

椎はうっとりと言って、慌てて首を振った。

「いや、ま。
教授ほどじゃないけど。
そうだ、それより、オレ志摩津に話があったんだ。パンツ、見せて。
いや、売ってよ」
「はあああああ？」

いったい、コイツなんなんだ。
桜樹が股間を思わず抑えてたじろぐと、

「イヤ、だから、お前のじゃなくて。
長谷部教授の。もらったんだろ。
な、な、いくらでも払うから」

わけが分からん。
桜樹が絶句して、逃げ道を探していると。
いきなり紺色のタントエグゼが横づけされた。

「あ、椎だ。時間、いいの。
てか、志摩津くんもいるゥ」

ゼミのショートカットの可愛いコが助手席から降りてきて、よっ、とこめかみに手をあてて挨拶をした。ショートパンツからすらりとした足がのびていて、今日も可愛い。
柊まどかも後部座席、手足のひょろりとした男子生徒が運転席から出てくる。

なんだかやけに負けた気がする。
オレも車買わなきゃ、と、気が焦る。
その前に免許もいるんだっけ。

椎が飛び上がった。

「わ、時間、いけね、はじまっちまう。
あ、志摩津もきてよ」
「え？」

なにが、と桜樹が聞く前に、椎行凪はダッシュで走り去った。
どうにもこうにも、訳のわからない、賑やかなヤツだった。

「なに、今の」
「なにって、ライブがあるんだよ、椎の」
「なーんか、観客集まらないんだって。で、打ち上げコンパおごってくれるからって誘われて。ま、暇だし、いっかな、って」

くすくすと、ショートカットのコが笑いながら言った。

『志摩津くんも行く？』

柊まどかがはにかんだ笑顔を見せて、手話で尋ねた。

今日も三つ編み。つるんとしたむきだしのおでこが、ゆで卵のようで、可愛い。

柊はうってかわって、小さな花柄の、丈の長いワンピースだが、それはそれでよく似合っている。

ホント。

どっちも甲乙つけられないほど、可愛い。

「あ、そーか、志摩津くんは通じるんだっけ。いーよな、なかなかオレ覚えられなくて」

「なあに、水戸部、手話に興味あったんだ」

「つか、柊さんと話したいじゃん」

「なにそれ」

ショートカットのコがぷっとむくれて、少年の尻をつねった。

「てててて、何すんだよっ」

大げさな身振りで少年が痛がった。

くすくすと柊は、

『あのふたり』

つきあっている、と桜樹に告げた。

「ア……そう、なんだ」
『ショック？』
「いや、まあ、ええと、ウン」

柊まどかはふわりとスカートの裾を広げて身を翻し、するりとショートカットの少女に腕をからませ、身振り手振りでくすくすと密告している。
手話は分からなくても、意図は伝わっているよう。
顔を寄せ合って笑っている姿は、ふたりともすごく可愛くて、やっぱ女のコっていいなあと思う。

手足のひょろりとした少年は、桜樹の肩に手をかけ、ぽんぽんと叩いた。

「志摩津、お前には柊さんがいるだろ。
そうだ、お前らつきあっちゃえば」
「そうだ、つきあっちゃえ、つきあっちゃえ」
「え、そんな、簡単に」

ちろりと柊まどかをみると、くすくすと満更でもない顔で笑っているようにも、笑って流しているようにも見える。

『早く行かないとライブ始まっちゃうよ』

柊は少女の手を握ると、羽があるように軽々と歩いていく。

「オレたちも行こう」

なんとなくタイミングを外して、断りきれなくなった。歩きなが

ら、少年は水戸部鉄士、ショートカットの少女は稲岡碧と名乗った。
地元出身の幼馴染どうし。腐れ縁だとぶーぶー、お互いに文句を言ってみせる。
椎行凪も地元の出身で、学年は二つ下だけれど、昔から顔なじみらしい。
変わっているけど、悪いヤツじゃないし、あれでいて頭はいいんだ、と水戸部は言った。

桜樹は家にいる時はずっと門限が夕方五時。
夜遊びしたこともなければ、ライブハウスとか行ったこともない。
少しばかりわくわくしながらついて行くと、ごちゃごちゃした機材を壁に寄せ、空いた空間に座布団をひいた部室が会場だった。

のどかな陽光が射しこんでいるし、窓の外には山並みが見えるし、テレビで見るライブハウスとはやけにちがう。
柊たちは慣れているようで、座布団の上にちょんと座っている。
観客は十人もいないし、みな、友だちのよう。
現実の世界はこんなものなのか。おかしいと言うと、桜樹の方がおかしいと思われるかもしれない。
びくびくしながら、澄ました顔で柊に並んで座布団に座る。

ド派手な……いつもと同じ姿の椎や、似たような服装の少年たちが、ばたばたとコードをつないだり、音を出したりして、急げ、時間がないとかわめいているのを、観客は座布団に座ってぼけーっと待っている。

やはりなんか違うんじゃない、と思った時、大音量でライブが始まった。

聞いたこともなければ、日本語であるかどうかも分からない、鼓

膜が裂けそうな音楽。
上手いか下手かもわからないが、とにかく喧しい。
やっぱり兄さんたちの言いつけを守っていればよかった。
後悔した。

10.

「じゃ、おっつかれさまー。
来月もよろしくー」

椎行凪がウーロン茶のジョッキを高々と掲げて、打ち上げコンパが始まった。

大学の敷地の横に立つ、プレハブ小屋のお好み焼き屋の貸し切り。車やバイクで移動している人がほとんどなので、飲み物はウーロン茶とジュースばかり。

（これがコンパ？）

椎や水戸部たちは楽しそうにはしゃいで、お好み焼きや野菜を焼いている。

なにかが違う気がする。

コンパって、おしゃれな雰囲気のある店で、とりあえずお酒飲んで酔っ払って、王様ゲームとかしたり、女の子を酔わせてお持ち帰りしちゃったり、するんじゃないの。

とはいえ、都会の大学に三度も通っても、いちどもコンパに行ったことがなく、誘われたこともなかった桜樹は、いまひとつ、文句も言えない。

それに。

「おつかれー」

碧と柊がウーロン茶のジョッキを桜樹にカチンとあわせて、にっ

こりする。

（ま、いっか）

二人とも休みはなにしているの、趣味は、好きなタレントは、と聞こうとした時。

「志摩津くぅぅぅぅん」

椎行凪が背後から抱きついてきた。

「ホントに来てくれたんだ、オレ、嬉しい」

「いや、まあ、その」

「オレたち親友だよな」

柊と碧は特に気にした風もなく桜樹に背を向けると、水戸部と三人できゃぴきゃぴとはしゃいでいる。

（オレ、あっちがいい……）

柊たちに混ざりたいのに、ごろにゃーん、と椎が桜樹にもたれかかってくる。

ぬいぐるみやらコサージュがゴツゴツと身体にあたり、エライ迷惑だ。

「な、な。

お前、キスしたことある？」

「はあ？」

「オレ、決めてんの。

ファーストキスは絶対、年上の、カッコいい男性がいいって」

桜樹は口に含んだウーロン茶をジョッキに吐き戻した。

「うわっ、きったねえ。
志摩津くんて、ダメダメ系？」

コイツにだけは言われたくない。

聞こえたのか、柊が心配そうな顔で振り返り、おしぼりを差し出してくれる。
稲岡碧も店員を呼んで、ウーロン茶のジョッキを交換してくれた。

「なに？　どうしたんだ」

水戸部が身体を乗り出した。

「椎が変なこと言うから」
「変なこと？」
『いつもの』

柊が苦笑いしながら、桜樹の代わりに身振りで答えた。

「あー、行凪、まだお子ちゃまだもんね」

碧がよしよしと、椎の頭を撫でている。

「そーゆー問題？」
「だって、小さい時って、カッコいい同性の年上に憧れるじゃない」
「いや、でも、なんか違う、と思う」
「たとえば、どの辺が」

桜樹は水戸部を引っ張って、「教授のパンツを売ってくれと言われた」と耳打ちした。
さすがに、女子ふたりには聞かせられない。
水戸部はぶっと吹き出し、腹を抱えて笑ってる。

「あー、そりゃあ、志摩津の気持ちも分かる。
椎、ちょっち、キツイぞ」
「なに言ってんだ。
オレ、ピンと来たんだ。
志摩津くんはオレの親友だ」

椎は両手を握りしめて、力説する。
勝手に決めないでほしい。

「そうだ、親友の証にコレ、志摩津にやる」

椎は自分の携帯ストラップを外すと、桜樹の携帯を出させ、勝手に取りつけた。
爪の先ほどのミニチュアのＣＤジャケットで、クルンとしたブタの尻尾がついている。
よくよく眼を凝らすと、ジャケットの人物のカッコは椎と同じ系統で、さらに派手で上をいっている。

「なに、これ」
「なにこれ、って、Ｐｉｎｋ　Ｐｉｇ　Ｓｃｕｔの限定アイテム。
これ貰うために、アルバム発売日にわざわざロンドンまで行ったんだから」
「てなに」
「今日、やっただろっ。

もう解散しちゃったけど、イギリスのフュージョンバンド、すごかったんだから。ｉｉ　ｍｙｕｉｉも参加してたんだぜ。教授の著書使ってさ」

「ごめん、話が全然見えない」

「こんなすごい日本人もいるんだ、ぜったい教授の大学に行くと英語勉強してたら、いつの間にか教授が帰国していて、桃城大に来てくれるなんて。

でも、はじめは教授は研究に専念するとかで、授業はもたなかったんだ。

だから親父に頼んで、なんども大学に交渉したんだよ。

すっげー、苦労した。

なのに、藤木のヤツなんかただ乗りして。おまけに教授のお気に入りで。

前はいいヤツだと思ってたのに。

裏切り者だ」

「ちょっと待って。大学に交渉って？」

「ウチの家は地元だから。大学の創立時に敷地提供したりして、いろいろ顔がきくんだ。

今でも寄付とか援助とかしているし、変な学校とかおなじ地区にできないようにしてるから。

ア、桃城大学の創立メンバーには教授のご先祖様もいる。

古文書で記録見つけた時は鳥肌たっちゃった。

これって、絶対、運命だよな。

だから決めたんだ、ファーストキスは教授とって」

「あー、そう……」

さすがに長谷部教授が気の毒に思える。

が、あれだけの大人なら、キスのひとつやふたつ、どうってことないかもしれない、と思い直した。

「教授に言ってみたら」
「言ったよ。
ノーベル賞とったら考えてもいいって。
だから、オレ、頑張って勉強しているんだ」
椎行凪は真顔できっぱりと言った。

（絶対……）
（騙されているぞ）

松芳ですら涼しい顔であしらっていた長谷部教授なら、椎なんか小指の先で扱えるだろう。
まじまじと椎を見る。
化粧は濃いが、目はつぶらだし、顔立ちもあどけない。
水戸部たちより年下なら、桜樹よりはひと回り近く、若い。

（まだ、子どもなんだ）

「分かった、オレにできることは何でもする」
「やったーっ。
じゃ、パンツ売って」
「それはちょっと……」
「じゃ、兄さん紹介して」

いや、それはやめた方が、なんだよ、ケチ、ふたりで言い合っているところに、水戸部が加わり、女子二人も加わり、とりとめのない会話で意味もなく盛り上がる。
楽しい。

すごく楽しい。
最後は店中でたわいもないゲームをしたり、知らない歌を歌ったり。
明け方まではしゃいで、水戸部の車で送ってもらい、そのままベッドに倒れ込んで、目覚めるまで藤木海のことは忘れていた。

11.

目が覚めると、とうに昼を過ぎていた。

明け方まで騒いだ高揚感が残っているから、ベッドの上でごろごろしているのはもったいない。

昨日、ねぼけた藤木海をそのままにしてきたことを思い出し、部屋に押し掛けたが、鍵がかかっており、居る気配もない。

やることも、することもない。

桜樹の携帯には、吉鷹と守屋の番号しか登録されていない。

守屋に電話をかけた。

すぐにつながる。

『もしもし。どうしたの？　なにかあった？』

「藤木くんいないし、することないんだ」

桜樹が言うと、ちょっと間が空き。

『ええと、わたしは教授の部屋が解禁されたから、片付けに行くんだけど。

一緒に来る？』

「うーん。片付け、イヤ」

『することないんでしょう。

終わったら、食事おごるから、ね』

守屋に車で迎えに来てもらい、大学に向かった。

車の中で、昨日あったことを延々と話す。教授は椎をだましているんじゃないか、と文句をいうと、守屋は苦笑いをしながらハンド

ルを切った。

「でもさ、まだ、憧れに憧れているだけだから。
もう少ししたら、変わるよ。
そういう年頃なんだって」
「そっかなあ。
そいや、守屋さん、なぜウチから出てったの。
兄さんたちに苛められた？」
「まさか。
そんなんじゃなくて。
長谷部の人の強さって、志摩津の対極にあるじゃない。考えたこともない世界だったから、夢中になっちゃって」
「それって教授のこと？
教授って強いの。叔父さんより？」
「難しいね、答えるの」

守屋は、吉鷹とは違って泥道を車で上がり、妖怪学校のようなボロ校舎前に車を止めた。

「あ」

といきなり守屋が声を上げた。
華奢な人影が木造校舎に入っていくところだった。

「結香さんだ」

守屋がいつになく慌てて車を降り、駆け足で校舎に向かう。
桜樹もわけもわからないまま、追った。
ノックの音がして、

「兄サァン、八重山上布ちょうだい」

とのんびりした声と、引き戸を開く音がした。

「結香さん、教授は今日、東京ですけど……どうし」

階段を駆け上がった守屋が言うのと、華奢な人物が振り返るのが同時だった。

綺麗な人、ととっさに思った。涼しい切れ長の目に、遠目でもはっとする、抜けるような白肌。男性なのに、全身からやわらかな雰囲気が漂っている。

ありふれた紺のスーツのジャケットを腕にかけた長谷部結香は、整った顔を守屋に向け、

「死体、まだ撤去してないの？」

とのどかな声でいった。

「え、まさかそんな」

教室を見た守屋が硬直する。

桜樹も一緒に覗きこんだ。

椎行凪が机に伏せ、死んでいた。

背に大きな包丁が刺さり、血が飛び散っている。

目を閉じた、すこし笑っているような安らかな顔を扉側に向け、背に包丁さえなければ、寝ているだけのよう。

「ウソ、ウソ、ウソ」

桜樹は教室に駆け込んで椎を揺さぶった。

信じられない。

今朝まであんなに元気だったじゃないか。

次に遊びに行く約束もしたじゃないか。

「ウソだろ。

起きろよ。

パンツ、売ってやるから、ううん、あんなのいくらでもあげるから。

ねえってば」

椎は片手には紙コップを握っていた。

紙コップを取り上げ、匂いを嗅ぐ。

なにやら奇妙な薬っぽいにおいがする。

「ちっくしょうっ」

桜樹は紙コップを握りしめ、投げ捨てた。

椎の背に刺さった、痛々しい包丁も抜き取る。

「ちょ、ちょっと、桜樹くん、まずいよ。

こっちに来て」

廊下から守屋が必死に呼ぶが無視した。

「ねえ、椎、椎ってば。

目を覚ましてよ」

椎の、ごてごてとぬいぐるみやらリボンやらがついた身体をなんども揺する。

いきなり視界が真っ暗になった。
やわらかな手で、眼の前を塞がれている。

とっさのことに、身動きができない。

甘い香の匂いが鼻腔に絡みつく。

「そう、そうのままじっとして」

ひどく心地の良い声が、耳元で囁いた。

「息、吐いて……吸って。吐いて、吸って。
そう、ゆっくりでいい。
いい子だね。
きみはいい子だよ」

優しい声でささやかれるままに身を起こし、気づくと教室の外に連れ出されていた。

長谷部結香は美しい瞳でまっすぐに桜樹をみつめ、

「ごめんね」

と心底、すまなそうに言った。

「う、ううん……」

結香は守屋に顔を向けた。

「連絡は、警察、大学事務局、の順。あとで通話記録調べられるかもしれない。あと、松っくんにも連絡して。兄サンには僕から連絡する」

守屋が携帯を取り出して、警察に連絡を入れるのを確認し、長谷部結香は電話を取り出した。

「あー、兄サン、今どこにいるの。八重山上布くれるっていったじゃない。こっちで公判があったから寄ったのに、ひどぉい……あ、ああ、そう、そうなんだ、じゃあ待ってるね。

そう、それとね、また兄サンの部屋で生徒さんが亡くなって、そう、そうなの、あ、守屋さんがここにいて連絡している、……殺されてるね、包丁……たぶん、兄サンのものかな？　で背からひと突き、いや、血痕の量からすると、いちど抜いて刺しなおしている、近づけばもっとよくわかるけど、見とく？　あ、そう、分かった、そうだね、……椅子にすわってて紙コップがふたつあるなあ、知人とお茶してたっぽいけど……ううん、ボクらならいざしらず、素人が家庭用包丁でこんなにも綺麗に背後から心臓を突き刺せるものかしら……え、名前？」

結香はいちど電話から口をはなすと、桜樹に椎の名前を尋ねた。

「シイユキナくんだって。

それと、ここに志摩津桜樹くんがいて、ちょっと現場をいじくっちゃった。

ボク、一部始終を見てたから、いざとなったらなんとかできると思うケド。
うん、松っくんにも声かけた。そう？　……そう、分かった。そうする」

結香は電話を切ると、ジャケットを着、ネクタイを締めると、ポケットから弁護士バッチを取り出し、襟元につけた。
つややかな黒髪を背でひとまとめにして、ゴムで結ぶ。

「兄サン、もう駅まで来てるんだって。すぐにタクシーで来るって」
「松芳サンもすぐに来られるそうです」

桜樹は教室のドアに立った。

すぐそこで、椎が伏せている。
桜樹よりずっと若いのに。
やりたいことも、夢も、たくさんあったのに。

かわいそう。
すごく、かわいそう。

ぼろぼろと涙が零れる。

「辛いね」

長谷部結香が純白のハンカチで、桜樹の涙を押さえた。

12.

「桜樹っ」

ヒステリックな声と同時に、松芳が飛び込んできた。警察より早い到着だ。

車をすっ飛ばしてきたようである。

「お前、なんで、また……、え、結香さん？

なんでここに」

松芳は長谷部結香をみると、硬直し、珍しいことにありありと動揺していた。

目の錯覚でなければ、怯えているようにもみえる。

「兄サンが八重山上布くれるっていうから貰いに来た」

「えええっ、それ、昨日、私が叔父貴のことづけで、長谷部の当主さまにとどけた？

なんで結香さんなんかに」

「そりゃあ、ボクがかわいいからでしょ。

志摩津のご当主さまにヨロシク言っておいて」

「そんなことより、松芳サン、冷静に聞いてくださいね」

守屋がこそこそと桜樹のしでかしたことを言った。

松芳はまず真っ青になり、次いで真っ赤になった。頬がぴくぴくと痙攣している。

「桜樹っっっっ」

落ちてきた雷に両手で頭をかばって身体をすくめると、結香がぽんぽんと桜樹の頭をやわらかくたたいた。

「かわいいよね、くれない？」

松芳は心底嫌そうに顔をゆがめ、

「勘弁してください、結香さん。そんなんでも本家筋ですから」

結香はかわいらしく唇をとがらせた。

「志摩津らしい言い方。
かわいい弟だから嫌、って松っくんが言わないともらっちゃうよ」

松芳は全身をこわばらせて、助けをもとめるように、視線を左右にはしらせている。

結香が天使の笑みを浮かべる。

松芳が諦めた顔で、くちびるをひらいたとき。

どやどやと警官が到着した。

見覚えのある刑事たちばかりだが、嫌みな、キャリアの目の細い刑事ははいっていなかった。

松芳は露骨にほっとしたように、息を吐いた。

ぎょろ目の刑事――警察手帳には半田警部と記載されていた、に守屋が経緯を説明し、長谷部結香を教授の弟で弁護士、と紹介した。

「あのぅ、たしか、芸者をやっている……とか」

半田刑事の嫌そうな問いに。
結香はにっこりと笑った。

「ああ、李香のことですね。ボクの双子の弟です」
「え、……でも、お兄さんはたしかに」
「一卵性双生児なので、兄はボクたちをいつも二人でひとりと、半人前扱いするんです」

結香が言うと、なるほど、そうならそう言ってくれれば、と半田警部は納得したようだったが、うしろでは松芳がげんなりした視線を守屋と交わした。

鑑識も到着する。
ひじょうに言いにくそうにしながら、守屋は桜樹の行動を説明した。

「はあああ？
いまどき、小学生だって、そんなことしないってのに……。まったく、どういう育ち」

慌てて半田警部は口を閉じたが、松芳にはしっかりと聞こえていたらしい。
あごを突き出し、冷ややかな目で睨みつけながら、

「家のしつけがなってなくて申し訳ない。
茨城県警には手間をかけるが、ご配慮願う」

高飛車に言い切った。

「あー、いや今時珍しい純粋な方のようで……そのう、本当に志摩

津検事の弟さんで？」
「そうだ。それがなにか」
氷点下の視線に、あー、左様で、とかいいながら、半田刑事は後ずさった。
松芳から遠ざかり、鑑識チームにぼそぼそと指示を出している。
桜樹は松芳にもたれかかった。
「兄さん、椎って兄さん紹介してって言ってたんだ」
「ん？　検事になりたかったのか」
「パンツ、欲しいって」
松芳は眉根をひそめた。
「お前、まさか」
「あ、兄サン」
結香が華やいだ声で、腕をあげた。
長谷部時宗が一段抜かしで階段を駆け上がってくる。
「すまない。タクシーがなかなかつかまらなかった」
長谷部教授はちらりと周囲を一瞥し、教室の前に立った。
椎が見えたのだろう。痛ましそうな顔をする。
「長谷部教授、念のためお聞きしますが、本日未明から今まで、どこでなにをしていらっしゃいました？」
半田警部が尋ねた。

「答えるつもりはない」

長谷部教授はきっぱりと言った。

松芳と守屋が唖然とし、結香は美しい瞳をぱちくりとしている。

「ええと、それはそのう、政府のお仕事とか機密事項で」

「いや、まったくのプライベートだ」

「しかし、そうしますと……」

半田警部はいかにもやりにくそうに、松芳と結香をちらちらと見ながら、

「そのう、署に来ていただくようなことになってしまいますが」

と言った瞬間、

「必要ない、県警の本部長にも連絡してある」

松芳がきっぱりと言った。

「いや、同行しよう。その方がお互い早く済むだろう。守屋、すまないが後を頼む」

ええええっ、と、一番困った声を上げたのは半田警部だった。

「兄サン、ボクが弁護しよっか？　ぜったいに実刑にしてみせるよ」

結香が両手をにぎりしめ、かわいらしい口調で言った。

「なんで実刑？」

教授が不思議そうに問う。

「冤罪で実刑なんて、いいネタになるじゃない。最近、兄サンの連載小説ちっとも面白くないんだもの、新聞解約しちゃったよ。マスコミだって飛びつくから宣伝もばっちり」

教授はでれっとまなじりをさげると、弟の頭をなでまわし、

「そうか、心配してくれたのか」

「ウン」

と結香が目をほそめて、にっこりとした。

「分かった、考えておく」

教授の返事に、松芳が「いったい、何考えてんだ」と血の気の引いた顔でよろめいた。

長谷部教授は若い刑事につき添われて警察署に行き、教室では鑑識作業が続いている。

椎を四方八方から撮影し、枠取りをしている。

見ていられず、顔をそむけて、松芳の肩にひたいをあてた。

「オイ、大丈夫か」

首を振る。

涙と胃液が同時にこみあげてくる。

「ち、ちょっと、こらえろ。
守屋、冷たい飲み物。スポーツドリンク系、すぐに買ってこいっ」

松芳は桜樹を手洗いに引きずっていき、便器の前でしゃがませた。
指を桜樹の喉につっこみ、無理やり吐かせる。
背をさすられながら、二度、三度、と吐き戻し、吐くものがなくなると、ようやく身体が落ちついた。

「オレ、もう嫌。
家に帰りたい」
「ああ。お前には無理だ。
叔父貴に言う」

「ダメだよ」

振り返ると、ペットボトルを持った長谷部結香が立っていた。

「自販機、遠いって言うから兄さんの部屋から取らせてもらった。
はい、どうぞ」

13.

長谷部結香は鏡にむかうと、円形の容器を取り出し小指にクリームをつけて、くちびるに塗った。
美しい切れ長の瞳は、鏡の中の自分を見ているようにも、そのもっと先を見ているようにも、見える。

「結香さん、どういう意味ですか。
何か知ってるんですか」

鏡越しに、松芳が結香を睨みつけた。
松芳の冷たい視線を気にした風もなく、結香はんーとくちびるを突き出し、リップクリームをこすり合わせている。

（この人、強い……）

全身の力を抜いているように見えて、隙がない。
たぶん、松芳よりもずっと、強い。

鏡越しに桜樹と視線が合うと、結香は目を細めてにっこりとした。
くるりと振り返る。

「ボク、公判があってこっちに来たんだけど。
松っくん、評判だね。
女性有罪率１００％だって？」
「知りませんよ、そんな統計」

うふふ、と笑って結香は白い手で松芳のほおをするりと撫でた。

「一度、法廷でお手合わせしよっか。
志摩津松芳検事に壊滅的な黒星つけてあげる。生きるの楽になるよ？」

松芳は無言で結香を睨み下ろしていた。
くっと、くちびるの端をひいて結香が笑う。

「チビ牛若クンはなんて言ってるの」
「吉鷹？
あいつは叔父貴の言葉に従うだけだ、って」
「じゃ、そうしなよ。
正直、ボクも兄さんが何考えているか分からない。
でも、志摩津、長谷部の両当主が桜樹くんにここに残れと言っているなら、そうするべきなんだ。
たとえ、弟が死んでもね」
「そんな……！
ひとごとだと思って」

ひとごと？

結香は切れ長の瞳を細め、薄く笑った。

「そう、そうかもね。
ボクは弟を二人も失った。
松っくんも同じ思いをすればいいんだ、なーんて思っているかも」

手洗いの床にへたり込んでいる桜樹に、結香は手をさし伸べた。

「ウチにくる？
もっと器用に護ってあげれるよ」

桜樹は結香をじっとみつめた。
この人は優しいし、綺麗だ。
それに、松芳よりも強い。

でも。
なにか、違う。

桜樹が黙りこくっていると。

「フられちゃった」

結香はちろりと舌を出すと、ポンと松芳の肩を叩いた。

「もっと、ちゃんと可愛がらないと。過保護と可愛がるのは違うんだよ。
失ってから後悔したって、遅いんだから。
まったく、心配だから家に閉じ込めておくなんて、いつの時代の発想？」
「技を繋ぐのは志摩津当家、志摩津本家の役割は血を繋ぐこと。
生きていればいいというのが、本家の役割」
「ふっるーいなぁ。もぉ」

結香はつま先立ちになって、松芳のほおにくちびるを寄せた。
キスをしているようにも、なにかを囁いているようにも見える。

松芳がピクリと眉根を寄せた。
結香は松芳に身体をぴたりとつけ、美しい切れ長の瞳で、可笑しそうに松芳の横顔を見つめている。

「……しか考えられないでしょう。
あの二人、単純だから。
だから、流れに身を任せるしかないんだよ」
「でも」
「こんど、祇園にも遊びにおいで。
松っくんも息抜きしないと」
「勘弁してください。
公務員の薄給でいけるわけないっしょ」
「チビ牛若クン、けっこう来ているよ。
月に二、三度。
京都府警に居た時は週三回」
「アイツは……いろいろ、サイドビジネスをやってるし。学生時代に荒稼ぎしてたし」
「奢ってもらいなよ」

結香はくすくすと鈴振るように笑い、ふたりにキスを投げた。
じゃあね、とゆうゆうと去っていく。

松芳は眼鏡をはずして、目を揉んだ。
疲れきっているようだ。
そういや、休暇も、ほとんど潰れちゃったんだっけ、と思い出した。

「兄さん」
「ああ、家まで送っていく。
先に駐車場で待ってろ。警察の連中に挨拶してくる」

松芳から鍵を受け取って、校舎前に停車している松芳の車の助手席に座った。
兄たちは、吉鷹も、早くに免許を取っていた。

なのに桜樹が免許を取ろうとすると、危ないと却下されたのだ。

夕暮れの中を松芳が、歩いてくる。

ぴんと張り詰めた背筋に、先ほどの疲れは見せていない。

松芳が車を発進させる手順を、桜樹はじっと観察した。

慎重な性格だけあって、松芳の運転がいちばん安定していた。

「どうした」

「オレも車を運転したい」

「必要ない……いや、どうしてだ?」

「ゼミのコが、女のコを乗っけてくるんだ」

松芳は奇妙な顔をしたが、すぐには何も言わなかった。

しばらく車を走らせてから、ちかごろの女はタチが悪い、先日の公判の女性は、昨今の女性犯罪は、お前は世間知らずだから、とくどくどと説教が続く。

柊はそんなコじゃない、などと言おうものなら、どこの誰だ、家柄は、家族構成は、志摩津家の家風にあうのか、などと続くはず。

じっと耐えて説教を聞いていると、アパートの前に停車してから、

「守屋に車を送っておく。

大学構内で守屋に習え」

「え、いや、ふつーに教習所でいいんだけど」

「そんな危ないところに行く必要はない」

きっぱりと言って、走り去った。

(危ないって?　ふつうの人は通っているじゃないか)

でも。
少しは、弟離れしたのかもしれない。

アパートの階段を上って行くと、藤井海の部屋のドアが開いた。
印象の強い黒縁めがね。チノパンに白いTシャツの、ラフな姿で海が出てくる。
わずか一日ぶりだと言うのに、もう、長いこと、会ってなかったように感じる。
なんだか、すごく懐かしい感じがした。

眼鏡の奥で、漆黒の瞳が桜樹を見つめる。

「桜樹、大変だったね。大丈夫？」
「椎くんが……」
「知ってる。守屋さんからメールもきたし、テレビでも今、やってる」
「テレビ？」

海は携帯のテレビ画面を見せた。
小さな画面に、地元の県会議員の息子が殺害されたとのニュースがながれている。
映し出されている写真は、短い黒髪で、くったくのない笑顔のあどけない少年だった。

「教授が警察に連れてかれちゃって」
「えええっ、教授が。なんで？」

そこまでは守屋から聞いてなかったらしい。
海は布団をひきっぱなしの六畳一間の部屋に桜樹を招き入れ、どうして教授が、と話を促した。

「よく分かんないんだ。兄さんも必要ないって反対したし。でも、教授がその方が早く済むって、自分で警察行くって言いだして。
なんか話したくないとかって言ってた」
「話したくない？」

海は腕組みをすると、うむむと考え込んでしまった。

「とりあえず、教授には出てきてもらわなきゃ」
「そんなの、どうやって。
結香さんなんか、有罪で実刑にしてみせる、って言ってたよ。すっごい綺麗な人。でも、兄さんが怯えてた。知ってる？」

あー、まあ、と海はポリポリと頭をかき、

「まあ、それはそれで置いておいて。
桜樹が『教授のゼミを受けたい』といえば、出てくるんじゃないかな」
「えー、オレ、受けたくない。ずっとなくたって困らない。興味ないもん」
「嘘も方便、って言うじゃない」
「嘘ついたら怒られるから、イヤ」
「キミねえ……」

藤木海はちゃぶ台にひたいをつけて、突っ伏した。

すりガラスの向こうは暗くなっていた。
すでに日が落ちたらしい。

桜樹は海の黒髪を引っ張った。

「あのさ、椎くん……、藤木くんのこと、昔はイイやつと思ってたって」

「んー、教授が着任する前ね。
見た目は昔からああだったけど、意外と真面目で。
よく図書館に来てたから、いろいろ相談にのってたんだ」

「相談て、キスとかパンツとか？」

海はびっくりと起き上がって、まじまじと桜樹を見つめた。

「アリスの初版の原書を読みたいとか、ブラウニングの詩集を読みたいとか。
キスとかパンツ、ってなに？
そういうイギリスの本、あった？」

「えー、あー、そう、そうそう、そういや、藤木くん、今朝いなかったね。
オレ、ここまで来たのに」

と桜樹は話を逸らせた。

「あ、家に帰っていたから」

「家？」

「うん、東京で弟がひとり暮らししてるから、時々様子を見に」

海は肩をすくめると、いきなり爆笑をした。
おなかを抱えて笑っているが、いつもながら、何に対して笑って

いるのか、よく分からない。
とにかく笑い上戸のようだ。

「いつか、桜樹にも紹介する。
すごく可愛いんだ」
「でも、いくら可愛くたって、弟でしょ。
妹がいい。妹はいないの？」
「妹もいるけど。
ちっちゃいからダメ。紹介しない」

つん、と澄まして海が言った。

小さいと言っても、海の妹なら中学生くらいだろうか。
そんなに大事にしているなら、よほど可愛いんじゃないかと勘ぐっていると、桜樹の携帯がけたたましく鳴りだした。

忍者ハットリくんを、大音量で着メロ設定してある。

吉鷹からだった。

14.

「よっしぃ、なんだよ。この音楽」
『どこにいるんだ。スーツ持って来たのに』
「スーツ？　なんで」
『友だちが亡くなったと聞いた。葬儀に行くんじゃないのか。家の玄関にかけて置いておく。それと』
「あ、ちょっと待って、すぐ行く」

桜樹は藤木海に従兄が来たからと断って、廊下に出た。

さすがの吉鷹も、吃驚した顔をした。
仕事帰りか。
すらりとした九頭身の長身に、光沢のある、グレーのソフトスーツを着ている。
いつもながら癪に障る、端正な顔立ち。
どうやったって、警察官僚には見えない。
知らない人は、芸能人かモデルと思うだろう。
認めたくはないけれど、桜樹が知る限り、吉鷹よりいい男は存在しない。
椎に、見せてやりたかったと思う。

「なんでそんなところにいるんだ」

ちらりと視線を走らせ、「藤木」という表札を確認している。

「同じゼミのコのウチ」
「挨拶しておく」

吉鷹が藤木海の部屋に行こうとするので、

「やめてよ、恥ずかしい」

あわてて吉鷹を遮って、桜樹の部屋に押し込んだ。

「同じゼミに『フジキ』なんていたか？」

「生徒じゃなく、図書館のアルバイト。

教授や守屋さんとすごく仲が良くて、ゼミにも参加しているんだ」

フン、と吉鷹は鼻を鳴らした。

桜樹の言葉など、この男はほとんど信用していない。

玄関に立ったまま、靴を脱がずに、スーツバッグを桜樹に突き出した。

「急だからオレが前に着ていたヤツだけど、ないよりマシだろう。

不祝儀袋はそのまま出せばいいようになっている。

数珠も一応入れてある。ウチじゃ本来使わないが、世間に合わせるために使いたきゃ使え。

それと」

吉鷹は手にしていた紙袋を、桜樹の頭の上でひっくり返した。

白いブリーフが何十枚も桜樹に降りそそぎ、床に散らばった。

頭に乗ったブリーフを、桜樹は慌てて払いのけた。

「なんだよ、これっ」

「パンツがないって聞いたから」

「い、いや。パンツは足りてる」

「洩らしたから足りなくなったんじゃないかって、松ちゃんがすご

く心配してたんだが」
「それはオレじゃなくて、オレがパンツを売ってくれって言われたんだよ」

志摩津吉鷹はありありと嫌な顔をして、桜樹を見下ろした。

「お前、パンツを売ってんのか。
お前のパンツなんかよく買うヤツがいるな。いくらで売れたんだ」
「だからオレのパンツじゃねーって。教授のパンツを売ってくれって言われたんだよ。
つかパンツパンツなんども言わせんなよ、恥ずいだろっ」

吉鷹は面倒くさそうな顔をし、

「用件はそれだけだ」

背を向け、出て行こうとした。
桜樹は思わず、吉鷹の腕をつかんだ。

不機嫌そうな顔で振り返る。

「キスして」
「はあ？」

仏頂面が、益々仏頂面になった。

「キスしてよ」

桜樹が強く言うと、断るのも面倒になったか、吉鷹は桜樹の腰を荒く抱き寄せた。

背骨が、体内できしむ。

熱い舌を奥までねじ込まれ、息が止まる。

（熱い……）

（熱くて、意識が遠くなる……）

たぶん、椎行凪が求めていたのはこの感触。

大人の男に成りたくて、憧れて。

あんなに真っ直ぐに、自分に正直に生きていた。

生きていれば、すごい勢いで成長していっただろう。

それこそ、吉鷹なんかより、ずっとまともでいい男になったかもしれない。

オレがもっとちゃんとしていれば。

オレが立派だったら。

オレにキスしてと言ったかもしれない。

オレだったら、意地悪せずにキスぐらい、してやったのに。

でも、椎の目には桜樹は大人の男と映っていなかった。

それが。

口惜しい。

吉鷹が腕の力を弛めた。

支えを失った桜樹は、ブリーフの散らかった床にずるりとへたりこんだ。

吉鷹は醒めた眼で、無様な姿を見下ろしている。

この男はいつか、桜樹を殺す。

憎悪や嫌悪といった個人的感情とは、まったく違う次元の理由で。
ただ。
まだ、その時期が来てないだけだ。

「長谷部教授って、イギリスにいたの？」
「知らなかったのか？
オックスフォード大学でずっと東洋の歴史と文化について、講義をされていた」
「エライ人なんだ」
「肩書きで言うなら、ノーベル文学賞も受賞しているし、帰国後は教育や芸術関連の政府仕事や各省庁の外郭団体の役員を歴任されている。知らない日本人の方が、オレには信じられない。
人物そのものについては噂は聞くが、オレ自身は面識がないから何も言えない。
お前の方が、よく知っているはずだ」

桜樹は顔をあげて、吉鷹を見上げた。

「オレ、教授の授業、一回も受けていない。
受けてみたい」

吉鷹は心の奥底まで抉るように、桜樹を見据えた。

「薬一式、睡眠薬もあったはずだ。
自己管理をきちんとしておけ」

いつものごとく。
吉鷹は挨拶も言わず出ていった。

15.

三人兄弟の次男ほど、損な立場はない。

志摩津松芳はたった一人で執務室で残業しながら、今日何度目かのため息をついた。

長谷部時宗教授の拘留を報告した松芳は、長兄にこっぴどく怒られた。いくら教授自ら、と言ったところで、父のレプリカのような兄には通用しなかった。

カロリーメイトをかじりながら、県警からもらってきた資料をもういちど見直す。

悪運の強い男だな、というのが正直な感想だ。

ふたつの事件、予定通りに長谷部時宗が研究室の横の住居に宿泊していれば、事実がどうあれ、あっさりと逮捕、起訴されても不思議はない。

だが、突発的な用事でちょうど東京に帰り、目撃者も多く、確かなアリバイがある。

（だが、いったい何を考えている）

すすんで警察署へ連行されたものの、事情聴取にはのらりくらりと応じ、否定も肯定もしていないという。

本気で冤罪になりたがっている、とも思えない。

（とりあえず、真犯人を見つけないと）

桜樹の大学到着にあわせてはじまった、連続殺人事件。

ひどく、嫌な気分である。
何者かが、時宗教授を犯人に仕立てようとしているのは、ミエミエだった。

ノックの音がした。

「時宗さまが拘留されたって」

志摩津吉鷹が入ってきた。
もう深夜だというのにスーツには皺もなく、端正な顔には疲れもない。

松芳が冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、

「車で来たから」

そっけなく言う。ビールどころか、ウォッカがぶ飲みしても、運転には支障はおこさないくせに、松芳と飲む程度のためにリスクを冒す気はないのだ。

あてつけのためプルトップを開けて、一気に飲み干し、もう一缶もあけて口をつけた。

吉鷹は指を四本立てた。

「いち、時宗さま拘留の件。
に、連続殺人事件について。
さん、桜樹のダメさ加減。
よん、蓉一さんへの復讐。
どれからいく?」

「蓉一兄さん？」
「電話で散々やられたようだから道場内なら復讐をゆるす、とご当主さまが言われていた。
また見合いで失敗したからヤツあたりだろうと。
二人がかりで行くか？」
「いいよ、桜樹じゃあるまいし。アニキにも言い分がある。
かわりに桜樹のヨメとりの件、相談に乗ってくれ。ゼミに気になるコがいるらしい」

ふだん感情のみせない吉鷹にはめずらしく、びっくりとした顔を松芳に向けた。

「桜樹のヨメ？
ずい分色気づいてるな。パンツ売ったり、学生生活満喫してんな」
「パンツを売る……？」

援交、ブルセラ、少年愛犯罪、変質者といったキーワードがざぁっと松芳の頭を駆け巡った。
やはりあんな世間知らずのバカ、家から出すべきじゃなかった。
家名に傷がつく。世間体。後始末。県警刑事のバカにするような眼。
なんで自分ばかりこんな眼に。

「あいつ、何やってんだ。
カネ、ないのか。やっぱり学生生活なんて無理だったんだ。これ以上、妙な事件に巻き込まれる前にやっぱり……」
「ストップ」

吉鷹が手のひらを松芳に向けた。

「松ちゃん、冷静になれ。
桜樹のパンツなんか買うヤツいないだろ。正確には、時宗さまのパンツを売ってほしいって頼まれたらしい。
それならまだ納得できるだろう」
「……私だったら、どちらにしろ買わないが」
「いちおう、松ちゃんに言われたから、桜樹にはパンツ1か月分届けたけど」

吉鷹はブリーフ30枚分の領収書を松芳に突き出した。
祇園で豪遊しているくせに、セコイ男である。
一円単位まできっちり出しておくと領収書と交換に受け取り、松芳の机の上の資料をちらりと見た。

「ゼミに今いる女子は三名か」

松芳はうなずいた。
死んだ野瀬もだったが、なかなかの美人ぞろいである。
いかにもキャリアウーマンっぽい、ワンレンの凛とした顔立ちの中国人女性に、可愛らしいショートカットの女の子、素朴そうな三つ編みの少女である。
兄からすれば、どのコでも悪くはない。

吉鷹は松芳のデスクに腰をおろし、三つ編み少女の資料をとりあげた。

「ん？」

奇妙な顔をして、マジマジと見なおしている。

「そのコな。地味だけど、しっかりしてそうだな。桜樹にはちょう

ど」

「松ちゃん、諦めろ。

この話はどうやったってダメだ」

「どうしてだ、桜樹だって志摩津の一員だ。いざとなれば名義だけでも相応の役職を与えて」

「そういう問題じゃない。

まァ、見とけって。面白いことになるから」

吉鷹はすらりと伸ばした長い足を交差させて、くちびるの端に微笑を浮かべた。

気心知れた松芳と二人きりだから、気が緩んでいるのかもしれない。

もともと、吉鷹は喜怒哀楽のはっきりした、一途な気質で、周囲の一挙手一投足にいちいち過敏に反応するようなタイプだった。

感情を押し殺すようになったのは、志摩津の次期当主の役目として、津久見の若君の執人としてお仕えするようになってから。

松芳は傍らで、吉鷹が若さまの執人として命と人生を賭す意志を固めていくのを見続けていた。

寂しくもあったが、それが吉鷹の望みならば仕方ないと思っていた。

だが、若さまが吉鷹を拒絶し、捨てた。

その時から、吉鷹の感情も、世界も、ぽっかりと消えてしまっている。

（言えないよなあ……）

――津久見の若さま絡み。

長谷部結香はそう松芳に告げた。

今一つ、松芳は納得しかねている。

確かに。

何千年にもわたり、志摩津、長谷部両家の主君筋として君臨してきた津久見家の若さまに対しては、両家当主ともどんな無理難題にも盲従するはずだろう。

（だが、どうやってあの若さまがこの件に絡みようあるのか）

本音を言うなら、吉鷹がどう傷つこうが、最後の最後で吉鷹を道具ではなく、人として扱ってくれた若さまに、松芳は感謝している。

代われるものなら松芳自身が執人となりたいところだが、それではダメなのだ。吉鷹でなければ、桜樹、もしくはまったく別の人物を育成するか……。

（やはり、桜樹の存在が絡んでいるじゃないか）

そもそも、少しばかり年上だからと、頭脳明晰ではしっこい結香、李香の双子には幼い時よりさんざんおちょくられたトラウマもあり、素直に信じられることができない。

やはり、不用意に吉鷹の心を乱すことはない。

松芳が決心した時、吉鷹は指をいっぽん突き立てた。

「いち、時宗さま拘留の件。時宗さまには出てきていただく。

松ちゃん、頼めるか」

16.

松芳は思いっきり顔しかめた。

「私だって、出てきてもらえるなら出てきてもらいたい。だが、時宗さま自らがすすんで警察に留まっている」

「桜樹が時宗さまの授業を受けたいと言っている。志摩津家としてもひとたび受け入れてもらった以上、面倒をみてもらうのがスジだろう。そう時宗さまに言ってくれ」

「桜樹が？」

松芳の記憶にある限り、桜樹は家に帰りたがっていた。長谷部時宗教授にも、とくに関心はなかったよう。それにあの怠け者、勉強嫌い、鍛錬嫌い、努力嫌いの桜樹は、どうひっくり返して殴っても「授業受けたい」と言いそうにない。

吉鷹は松芳の机に広がっていた書類をぜんぶ読み終えると、すらりと立ちあがった。

「理由は分からないが、それがなにかのキーワードらしい。アイツ、勘はいいからな。バカだから理由を聞いたところで、本人も分かってそうにないが。

松ちゃん、いいか」

「まあ、茨城県警には顔が利くから」

吉鷹はうなずくと、執務室のわきに置いてあったホワイトボードをがたごとと引っ張り出し、マーカーを手にした。

妙に楽しそうな、うきうきした顔をしている。

「じゃあ、その2とその3。
連中、桜樹のダメっぷりが大誤算だったんだ。今ごろ、頭抱えてるぜ。
サテ、どう出てくるか」
「連中？　大誤算て？」

吉鷹は今までの事件の流れをホワイトボードにメモしながら。

「もし、松ちゃんが桜樹の立場だったらどうした？」
「そりゃあ、誰かが時宗さまに罪をなすりつけようとしているのはミエミエだ。
自分の手で真犯人を上げて、時宗さまの濡れ衣を晴らす」

吉鷹は手でピストルの形をつくり、狙いを定めて松芳を撃つまねをした。
わざわざ、撃った後に形のよいくちびるを突き出して、煙を消す仕草までする。

「で、犯人を追い詰めようとして返り討ちに遭う、ってトコ。
それで、松ちゃんを犯人に仕立てて、犯行の末の自殺と見せかけて終わり。動機はゼミ内のイザコザを適当にでっち上げんだろ。
時宗さまのゼミは解散、桜城大の人気も落ちるし、桜城大に回されてしまった助成金も取り返せる。
なにより一人息子を失った椎行成（しいゆきなり）議員は、前のように反対し続ける気力を逸するし、もしかしたら辞職するかもしれない。
連中にとったら、一石二鳥……いや、志摩津のメンツもつぶれるし、上手くいけば、志摩津、長谷部が仲たがいするかもしれない。
三鳥、四鳥、笑いが止まらない話だったんだ。
計画では」

そこまで言ってから、吉鷹は爆笑した。

「一回目の殺人現場では嘔吐して失禁、次はパニックになって現場を荒らす、誰がどうみたって、桜樹を犯人に仕立てるにゃ無理があるだろう。

まして真犯人を追うなんて考えもしなけりゃ、すぐに家に帰りたいとぐずりだす。

志摩津本家の直系がこんなヘタレとは予想外だったんだ。

結香さんが居てくれたのもツいていた。

松ちゃんが有罪率１００パーセントの美人検事なら、結香さんはどんな悪人も無罪に仕立てる超々極道弁護士だ。

結香さん、桜樹への尋問すらさせないぜ。

連中、手詰まったんだ」

吉鷹はゲタゲタ笑いながら、桜樹もやるな、アイツらの顔、見てみてーとひとりでウケている。

松芳は唖然としながらホワイトボードを見つめた。

話の展開が、あまりに突飛過ぎる。

桃城大、と、その横に書かれた、紺良宇宙科学技術大学（仮称）を見比べる。

「証拠はあるのか」

「証拠？

連中が証拠なんて残すものか。桜樹に罪をなすりつけるための証拠なら用意してあっただろうケド。

さて、どう始末をつけてくるつもりか」

「じゃあ、どうやって逮捕、起訴するんだ」

吉鷹はくちびるを突き出すと、片手を腰にあて、もう一方の手で、マーカーを投げて受け止めた。

「そういうレベルの話じゃない。まあ、身柄押さえるとしたら実行犯の学生ぐらいだけど、面白くないじゃない」

松芳はボードの前に立った。

「話を整理させてくれ。よっしいが連中と言っているのは」

紺良の文字を赤のマーカーで丸く囲った。

吉鷹はうなずき。

「向こうにも言い分があるだろうな。紺良宇大の計画は三年ほど前から。宇宙開発ブームだったし、景気も良かったし、地元も乗り気ムードだった。桃城大とつながりのある椎家などは反対運動をしていたが、少数派だった。

だが、時宗さまが桃城大に着任して、流れが引っくり返ったんだ。なにせ日本を代表する知の巨匠。教育界の重鎮だぜ。地元の名士の親たちは、娘、息子を教授のゼミにいれさせるし、椎議員ら反対派は勢いづいてまだ建設前の施設に、環境などの法規制をがんじがらめにかけ始める。

リーマンショックで景気も後退し、母体の紺良グループですら資金調達が覚束ないうえ、絞られた助成金もそっくりそのまま桃城大に回された。

でもって志摩津の本家筋にまで来られて手を組まれたら、莫大な赤字だけ残して計画撤退しかないだろ。
だから起死回生の策に打って出た、ってとこだろうな」
「時宗さまははなから紺良とコトを構えるつもりで、桃城大に着任されたのか」
吉鷹はマーカーの尻でくちびるを叩いた。
「オレは時宗さまには面識がないから何とも言えない。
ご当主さまに聞くと、単純に日本の教育界にプッツンして、隠居を決めたらしいが。
松ちゃんは会ったんだろ。
どんな方だった？」
「分かるものか。私なんかに本性をみせる男じゃない。
長谷部のご当主さまと言うかなぁ、つらつら考えて、長谷部六兄弟、時宗、綺羅、仁資、結香、李香、慧斗の長兄って思うと……」
言いながら、松芳自身がうーと頭を抱え込んだ。
誰がどうとか嫌いとかいう前に。
そろいもそろって、掴みどころのない、やりにくい面子ばかりだ。
柔よく剛を制する一族。まともに、力と力、技と技でぶつかる志摩津の人間にとって最も苦手な連中だ。
名を読み上げるだけでも、悪寒が走る。
「成程」
うんうん、と吉鷹は腕組みをして頷き、

「松ちゃんの説明が一番分かりやすい」

涼しい眼でさらりと言った。

見なれた、端正な横顔。

ずっと見つめて続けてきた。

「これって、津久見は関わっているのか」

思い切って、言った。

17.

「それはナイ」

あっさりと吉鷹は言った。

「でも、紺良絡みなら」

遥か昔より、志摩津や長谷部らの主家として君臨してきた津久見家。

紺良は津久見に比べれば歴史は浅いが、現代社会では津久見よりも圧倒的に企業規模も大きく、莫大な権力を有する。

だが、歴史も格も社会に対する影響度も、津久見が紺良を上回る。つねに、なにかにつけ紺良と津久見は反目し合っていた。否、津久見は紺良を相手にはしていない。一方的に、絡まれているのだ。

「津久見が絡んでいて、オレが知らないわけがない。だいたい、アイツはこんなヤマに」

いちど言いかけて、吉鷹は口を閉じた。

じっとホワイトボードを見つめる。

紺良宇宙科学技術大学（仮称）から線をひき、碓氷透（うすいとおる）と書き加えた。

「初代学長就任予定。……オレたちの同級生で、紺良から奨学金をもらって米国に留学したんだ。

でも、まだ帰国していないと聞いたし」

松芳に、というより自分に言い聞かせるようにつぶやき、すぐに、

碓氷透の上に取り消し線を引いた。
それだけでは気が済まないようで、ぐちゃぐちゃに塗りつぶしている。粘着質な性格だけあって、いちどはじめると今度は止められずに、きっちりと枠取り黒く塗りつぶし始めた。

（よっしい、結構、子どもっぽいんだよな）

兄貴分の眼からすれば、時折、桜樹と同レベルかそれ以下の時もある。

「この件、どうするんだ」
「向こうの出方次第だな。
オレが奴らなら、さっさと実行犯の学生を処理して手を引くし、それならこちらも深追いする必要はないが、アイツら馬鹿だから。
しかし、先に潰すには奥が深すぎる」
「私としては実行犯だけでも逮捕、起訴したい」
「検事としてなら構わない」
「桜樹は大丈夫なんだろうな」

吉鷹は塗りつぶすのを、ぴたりと止めた。
キュッとマーカーのキャップを閉めると、振り返って真っ直ぐに松芳を見つめた。

「松ちゃん、いい加減にしろ。
自分で自分の身を守ることができなければ、それまでだ」
「だって……アイツはまだ子どもだ」
「オレとふたつしか違わない」
「でも、桜樹だし」

吉鷹は片手を腰にあて、じっと松芳をみていた。

薄いくちびるが動く。

「志摩津家としては、ひとたび桜樹の身を時宗さまに預けた以上、手出しはしない」

「じゃあ、結香さんなんかにくれてやるのか。ドロンドロンのぐっちょんぐっちょんのゲチョゲチョにされるぞ」

吉鷹は唖然としたように口をぽくりと開いた。

「松ちゃんって、結香さんのことどう思ってるんだ」

「どうって、見たまま」

「見たままァ？」

吉鷹は腕を組むと、にぎった拳をあごにあてた。

「見たままだったら、ふつう、天女のようとか言われている、よな」

「どこがっ。人の弱点つくの上手いし、脅すし、口は達者だし、ワナにはめるし」

過去に遭ったあんなことやこんなことがぞわぞわと脳裏をよぎり、身体を抱えて身震いした。

「うーん、それは半分李香さんも交じっていると思うが。まァ、それはそれでおいといて。

そういや『フジキ』に会ったか？　どこの資料にも名が出て来ないんだが。

桜樹と同じアパートに住んでいて、図書館のアルバイト、教授のゼミに所属しているらしい」

松芳はゴクリと唾を呑みこんだ。

「いや。
そんなヤツがいたのか。そいつが実行犯なのか」

「ぜんぜん違う。
桜樹の面倒をみてくれているようだ。時宗さまがつけてくれたのだろう、長谷部のテのものらしい。
長谷部の家にそんな名を聞いたことはないから、偽名だろうな」

吉鷹はくちびるの端に笑みを浮かべ、

「それにしても器用に身を隠す。座敷童みたいなヤツだな。
顔を見てみたかったのに。
まあ、だから大丈夫だろう。なんだかんだ言って、桜樹も勘はいいし、志摩津の直系だ」

吉鷹はちらりと腕のブレゲを見た。
もう二時を回っている。これから東京へ戻って仮眠をとるのだろう。
吉鷹も松芳も、明日も激務を抱えている身だった。

できればすぐに帰宅させてやりたかったが。

「水戸の分家は関係ないのか」

ずっと心に引っかかっていたことを、言った。

すうっと。
吉鷹の表情が失せていった。

いつもの無表情に戻る。

仮面のような端正の顔立ち。

自分の感情は見せないまま、松芳の深層を暴くように深く抉るように見据える。

「松ちゃんは志摩津の一族が裏切るとでも？」

「考えたくはない。

だが桜樹は鴫那の息子を殺している」

「あれは訓練中の事故。

しかも鴫那晄が望んでした真剣勝負だ」

吉鷹は射抜くように松芳を見、背を向けた。

ドアを開きかけて、手を止める。

「もし、鴫那が関わっているとしても、桜樹自身の問題。

志摩津家としては関与しない」

背中越しに言い捨てて、吉鷹は出ていった。

松芳は重い身体を引きずるように立ち上がり、イレーザーを握った。

いつか。

吉鷹か桜樹か、選ばなくてはいけない時がくる。

志摩津の名のもとに、ただひたすら自己研鑽につとめ、志摩津家につくしてきてくれた吉鷹を切り捨てるわけにはいかない。

能力も人物も、圧倒的に吉鷹の方が上。

松芳自身、吉鷹が好きだ。

だから、桜樹を捨てるしかないのだ。
いずれ消す身ならば、本人の好きに遊ばせてやればいいのに。

（なぜ、叔父貴はいまさら桜樹を世間に引きずり出すのだろう）

まさか今になって血のつながった甥可愛さに、吉鷹を捨てる気か。
あの叔父はそんな人物ではない。第一、それなら吉鷹に、桜樹の世話をさせるはずはない。

ホワイトボードを消しかけた手を、松芳は止めた。

夏惟

細い線で、落書きされている。
涙で目がにじむ。

本当は。
松芳自身が若さまに出てきてもらいたいのだ。
あの時、吉鷹を救ったように。
桜樹、吉鷹、どちらの人生も生かしてやってくれないかと、虫のよい期待を、まだ捨てきれずにいる。

松芳はホワイトボードに一点の筆跡も残らぬよう、力を入れて消した。

18.

三日後の薄曇りの日に、椎行凪の告別式が行われた。
志摩津桜樹は吉鷹の持ってきてくれたスーツに身を包み、参列した。
田舎の実力者らしい、広大な敷地に建つ平屋の重々しい日本家屋で、吃驚するほど多くの人が来ていた。

花輪や供花の数も、椎の年齢にしては異常なほど多く、椎自身の人気もあるのだろうが、家柄の重さを物語っていた。

人の流れにのって焼香をする。

遺影は高校時代のものらしい、黒髪の、あどけない笑顔の写真。
本当に子どもだったんだな、と思うと涙が出てくる。
喪服に身を包んだ両親も、まだ若く、参列者に丁寧に頭を下げながら涙を押さえている。

外に出ると、藤木海以外のゼミ仲間が全員揃っていた。

来るときに、海にも声をかけたが、そんなに親しくなかったし、第一嫌われていたから、と申し訳なさそうに言われて、無理強いはできなかった。

「志摩津くん……？」

びっくりしたように、稲岡碧が目を見張った。

「ずいぶん、違うね」

言いながら、柊まどかをひじでつついている。

『スーツ姿だと、大人っぽいね』

黒いワンピース姿の柊が桜樹を見上げて、告げた。

「従兄の借りもんなんだ」

義理的に笑顔を見せて応じたが、それ以上会話をする気力はなかった。

重い空気が全身にまとわりついている。

門の外で、ざわめきが起きた。

黒塗りの車が何台か止まり、長谷部時宗ほか重々しい顔ぶれが降りてきた。

人々がしぜんと道を開ける中、紋付き袴姿の長谷部教授が厳しい顔で歩き出す。喪服姿の守屋もつき従っている。

長身の体躯から、周囲を圧倒する力がにじみ出ている。

誰もが息を呑み、言葉を失い教授に見惚れている。

（この人……）

（オレらなんかに授業を教えるような人じゃないんだ……）

格の違いを見せつけられる。

でも。

教授にあこがれ続けていた椎行凪のことを思うと、すこしばかり救いになる。

焼香を済ませた長谷部教授が出てくると、椎行凪の両親も駆け足

で出てきて、幾度も頭を下げている。
長谷部教授は丁寧に応じていた。

（すごく、優しい人だ）

そして、懐も深い。
ようよう今になって、長谷部時宗という人物が見えてきた。

椎行凪は人をみる目があったのかもしれない。
長谷部教授に心酔していたし、認めたくはないし、癪にも触るし、恨みつらみはたくさんあるが、松芳だって情は深い。
桜樹をいきなり親友だと言ったのも、椎の家を見ていると、なんとはなしに、似たような過保護育ちのおぼっちゃまなんだと分かってくる気がする。
そういや、教授との三角関係（？）になる前には、藤木海にも懐いていたんだっけ。

（あれ？）

違和感に気がついた。

椎の両親が去ると、教授はまっすぐに桜樹たちのところにやってきた。
ひとりひとりに視線をあわせて、確認をとっていく。

「明後日、土曜日からゼミを再開する。
次回は榛名くんだったな。準備は」
「ハイっ」

眼鏡男子がしゃちほこばって応じた。

「ではみんな、遅れずに集合するように」

教授は頷き、ちらりと桜樹を見て、去っていった。

空気がホッと和らぐ。

なんだか気持が楽になった。

みなでざわめきながら出棺を待っていると。

「志摩津桜樹くん、ちょっといいかい」

振り返ると、村上警部がそこに立っていた。

捜査の一環で来ているらしく、背広姿である。

イヤ、と言いたいところだったが、言うわけにはいかなかった。

少し、人から離れたところまで歩く。

「今回は洩らさなかった代わりに、現場を滅茶苦茶にしたんだって？」

村上は、あいかわらず見えているかどうか分からない細い眼で言った。

「本当にびっくりしたよ、きみがまさかあの志摩津の三男坊だなんて」

奇妙な言い回しだった。

「私も昔は志摩津の道場に通っていた。

といっても本家じゃない。水戸の分家。そんなに才能もなかったしね、長くは通っていない。

ただ同じ道場の兄弟子が認められて、本家の内弟子になっていたから、すこしばかり御本家の事情も知っている。
覚えている？」

村上の細い眠そうな目が桜樹に向いた。

鴫那晄

その名がちくりと桜樹の心臓に刺さる。

「晄は死ぬ寸前まで、志摩津当家の跡取りにふさわしいのは志摩津本家の三男坊。
吉鷹なんていう紛い物は排除すべきと、鼻息荒かったんだよね。
志摩津吉鷹と警察で同期になって、彼の優秀さにはびっくりしたし、じゃあさぞかし志摩津の三男坊ってのはすごいヤツかと思っていたんだけど」

桜樹は首を振った。
鴫那は勘違いをしていた。
ずっと。
そもそも桜樹自身、志摩津当家になんて興味がないというのに、あの鴫那が一方的に……。

「血筋だけの問題なら、志摩津検事でも充分資格があるはずだ。
なのになんでお前なんだ」
「そんなこと、オレ知りません」
「晄はなんで死ななきゃいけなかった」

離れたところで、喪主の椎行成が挨拶をはじめた。もう間もなく出棺だ。

最期まで、きちんと見送りたい。

「オレが殺した」

桜樹は吐き捨てるように言うと、村上を振り切って参列者の群れに戻った。

出棺を見送った後、ゼミ生たちで昼食を食べていくという。
桜樹も誘われたが断って、途中で二人分の弁当を買って藤木海のところへ行った。

海は桜樹を出迎え、塩をまくと、

「びっくり。桜樹ってスーツを着ると、ずい分、大人っぽい」
「みんなに言われたけど、スーツがいいんだよ。アイツ、高いの買っているから」

一緒に弁当を食べながら、教授が来たこととか、葬儀の様子とかをぽつぽつ話す。
余計な話はすべて省いた。

満腹になってごろりと横になった。
薄曇りのぼやけた日差しが、差し込んでいる。
ひどく疲れていて、眠い。

「寝れてないの」

食後のお茶をすすりながら、海が心配そうに言った。

「ううん、睡眠薬飲んで、ちゃんと寝ている。

ただ、今日はちょっと疲れちゃって」
「寝ていきなよ」
「うん……」

海に誘われるままに、うとうとと瞼を閉じる。
この部屋はひどく居心地がいい。
いや、藤木海のそばにいるのが居心地がいい。

ずっと。

ずっと昔にも。
こんなこと、確か、あった、け……。

桜樹が寝入ると、藤木海はそっとタオルケットをかけ、ぽんぽんとあやすように叩いた。

19.

土曜日、午後三時。
計九名の生徒が長谷部時宗教授の教室に勢ぞろいした。

桜樹も海と並んで、口の字型の一角に座る。
教授と守屋はすこし離れた場所で、黙ったまま生徒たちの様子を見ている。

「じ、じ、じゃあ、プリントを配るので」

肩に力の入りまくった眼鏡男子がぎくしゃくとプリントを皆にまわしはじめた。

Ａ３で数十枚の力作。
表面には、

夜這の正当性について　榛名雄一（はるなゆういち）

と誇らしげに書かれている。

「よ、夜這……？」

桜樹はどぎまぎと周囲の、とくに女の子たちの顔色をうかがった。
こんなこと真昼間から、ゼミで、女の子たちの居る場所で話していいものなのだろうか。

榛名はページをめくりながら、資料の説明をしていく。各地域ごとの特色や分類。歴史。出典資料などを丁寧に解説していく。

資料そのものは真面目だ。

けれど、性交とか強姦、輪姦といった言葉まで出てくる。ちらちらと柊たちの顔色を伺うが、気まじめな顔で、食い入るように資料を読んでいる。男子たちも真面目な顔だ。

資料の解説が終わると、議論が始まった。

多夫多妻制というのは、狭い共同体ではむしろ自然だったのでは。いや、やはり性悪説に基づくと、人としての本質に堕落があり得る。一夫一妻制で縛るべき、それはキリスト教的思想……

と、ポンポン議論が進んでいく。

女性の出産可能期間を考えると、効率的ではないのか。女性には生理的に受け入れられない男性もいる、いや、安心しないと男性を受け入れることは苦痛だ、と生々しい話を碧が言う。でも、女性側にも断る権利があって、青年団が取り仕切っているって、と柊が手話で言うと、中国人留学生女性が、取り仕切っているあたりが男女差別じゃないか、とたどたどしく言う。

男からすると、自分の子が誰だかわからないじゃないか、むしろそのほうがいいのか、だから妻問い婚とか、女系家族が日本の文化には適しているのではないか。

もてる男の場合は、もてない男の場合は、と話が急展開で進んでいく。

桜樹がついていけずにくらくらしていると。

「志摩津くんはなにも言っていないけど、どう考える」

榛名が桜樹にふった。

「え……と」

桜樹が口を開いた時。

バン

教室のドアが開いて、鬼のような形相の松芳が立っていた。
つかつかと入って来て、いきなり桜樹の腕を掴んで引っ張り上げる。

「桜樹、家に帰るぞ」
「ちょ、ちょっと、兄さん何言ってんだ。
だいいち、オレ、家に帰れない……」

松芳は桜樹の胸倉をつかみ、顔をよせた。

「村上警部が殺された」

息を呑んだ。

「松芳くん、いまは授業中だ。
外に出てくれ。桜樹くんも一緒に。
守屋、ゼミをつづけてくれ」

長谷部教授はすばやい身のこなしで、松芳の腕をつかみ、教室の外へ引きずり出した。

桜樹もあわてて後を追う。

「兄さん、いったいどうしたって。
村上さん、なんで殺されて」

松芳は桜樹の両肩をつかんだ。

「村上は昔、志摩津分家の道場生で、鴫那晄とも親交があった。公式には発表しないが、村上には拷問を受けたあとがあった。茨城県警は今村上が担当している事件絡みの線で追っているが、違う。たぶん、お前のことだ」
「鴫那の知り合いだって、言ってた」

桜樹が言うと、さっと松芳の顔が朱に染まった。

「お前、知っていたのか」
「ウン。椎の葬儀の時に会って、言われたけど……」

馬鹿やろうっ、と松芳が声を張り上げた。

「どうしてすぐに言わないんだ。
いつもいつもお前は、問題をややこしくしてから……！」

「見苦しい」

長谷部時宗が強い口調で松芳を遮った。

「まったく、志摩津の頑迷さにはいつもながら腹の立つ。
そんなことより、この一連の事件の処理を先にしたらどうなんだ。
志摩津の最も得意なところだろう」

松芳は気まずい顔になって、視線を伏せた。

「まさか、まだ、なにも分かっていない、なんて言うんじゃないだろうな。

志摩津の当家本家が雁首そろえて」

「吉鷹は……紺良が絡んでいる、ゼミに実行犯がいるはずだと」

「志摩津の次期当主どのか。なかなか良い男だとの噂は聞いている。ならば、なぜ、動かない」

松芳は沈黙した。

目に見えて、時宗教授は苛々している。よほど、授業を邪魔されたのが嫌だったらしい。

どうしよう。

オレがなにが言った方がいいのだろうか。

桜樹が口を開きかけたとき、先に、松芳が言った。

「吉鷹は、こちらから追うには奥が深すぎる。

向こうが実行犯を始末して手を引くなら、深追いはしない、と」

「だがそうはならなかった」

きっぱりと長谷部時宗は言った。

「さあ、行きたまえ。

これは我が長谷部家に対する悪意だが、こちらが黙って傍観しているのは、志摩津のメンツを慮っているからだ。

君の弟思いの情に免じ、授業の妨害をしたことは見逃してあげよう。

桜樹くん、教室に戻りたまえ」

松芳が声にならない声を上げた。
「桜樹を戻すんですか、あの教室に」
手を伸ばして、桜樹の手首をつかんだ。
力を入れて、握りしめる。
まっすぐ。
不安そうに桜樹を見つめる。
「大丈夫。
兄さん、大丈夫だよ」
桜樹はそれだけ言って、松芳の手を振り払った。
教授の後を追う。
「長谷部時宗さま」
松芳は崩れ落ちるように床に膝をついた。
そのまま両手を揃え、深く頭を下げる。
「弟を……弟を、宜しくお願いします」
「いい加減にし給え」
長谷部時宗は足を止めなかった。
「志摩津直系が自分の身を守れず、他家の当主に保護を求めるのか。
志摩津の誇りと使命をなんだと思っている」
背中越しに吐き捨てるように言うと、桜樹を教室の中に入れ、ぴ

しゃりとドアを閉めた。

藤木海が漆黒の瞳で、不安そうに桜樹を見た。

（大丈夫）

こそっとサインを送る。

教室内では白熱した議論が続く。

桜樹はそれを聞き流し、まったく別のことを考えていた。

教授は授業終了後、榛名をまずねぎらい、ひとりひとりの発言内容や議論の進め方を丁寧に講評した。

次回の発表者を決め、授業は終了した。

生徒はみな、大きなイベントを終わらせたあとみたいに、高揚した、誇らしげな顔をしている。

荷物を片づけ、がたごとと三々五々散っていく。

「桜樹」

不安そうに藤木海が言うのと。

「藤木くん、ちょっといいかな。
頼んでおきたい本があるんだ」

教授が藤木海を呼ぶのが一緒だった。

「はい……」

と返事をするものの、海は不安そうにちろちろ桜樹を見ている。

「下のカフェで待ってる」

桜樹は安心させるように笑顔を見せると、柊、水戸部、稲岡と坂道を下って本校へ行き、カフェに入った。

土曜日の夕方とあって、ほとんど人はいない。

この時間に授業をやるのは、時宗教授くらいだった。

今日の議論さー、榛名、真面目すぎーとあたりさわりのない会話につきあいながら、ジンジャーエールに口をつける。

舌先に微かだがみょうな味を感じて、そのままコップに吐きだした。

胸ポケットに幼いころから持ち歩かされている粉薬の包みをとりだし、喉に流し込む。

苦い。

顔をしかめてせきこむと、水戸部と稲岡があっけにとられた顔をしていた。

「志摩津くん……？」

「あ、これ、毒消し」

「毒消しぃ？」

碧が高い声で叫んだ。

桜樹はハンカチで口を拭うと、保存袋をとりだし、コップと内容物を別々につめて封をした。

「きみだったんだね」

水戸部鉄士に向かって言った。

20.

椎行凪のことを考えていて、気がついた。
周囲の年上の男性にコメントしていた椎だったが、水戸部についてはなにも言っていなかった。

水戸部も年上だし、わりと器用そうな、長身の、今風の男だ。そこそこ仲がよさそうに見えた。
なのに椎の「いい男センサー」にはひっかかっていなかった。
椎のセンサーを反応させないなにかが、コイツにはある。

そこから逆算して考えていった。
椎を教授のゼミ室に呼び出すことは、顔見知りの水戸部には簡単なこと。
教授のパンツのことを桜樹が水戸部にしゃべったから、そんなエサで椎を呼び出したのかもしれない。
桜樹と村上警部が、椎の葬儀の時に、ふたりでひそひそ話しているのも見ていた。

「何言ってんだ、コイツ」

水戸部鉄士はわめくと稲岡碧の手首をつかみ、ひきずるようにして出て行った。あっけにとられて目をぱちりと開いた稲岡も、引っ張られるままについていく。

「どうしたの」

遅れてカフェに入ってきた、藤木海はけげんそうに水戸部たちの後ろ姿をみていた。

「なんでもない」

桜樹は保存パックを二重にくるみ、かばんにいれた。兄さん経由で茨城県警に提出して鑑識に調べてもらえれば、椎が殺された時に飲まされていた睡眠薬か何かと同じ成分が検出されるはず。運が良ければ、水戸部の指紋も紙コップから出るはずだ。

柊まどかさっと何かを書いて藤木に見せた。
藤木海の顔から表情が消えた。
白いうなじを曝して、がくりとうなだれる。
藤木は柊の手をくるむようにして握った。

「分かった。
もう、終わりにしよう」
「藤木くん？」
「柊、水戸部を連れて来てくれ。
桜樹と一緒に教授のところにいる」

柊まどかはうなずいて、すらりと立ちあがった。

「行こう」

藤木海はまっすぐに桜樹に手を伸ばした。

教室では長谷部教授と守屋がくつろいでコーヒーを飲んでいた。
香ばしいかおりが漂っている。

「どうしたんだ、ふたりとも。
忘れものかい？」

「コーヒー飲んでく？」

教授と守屋がにこやな顔で声をかけてくる。

とても穏やかな光景。

穏やかな午後。

「もういいんだ、教授。

終わりにしよう」

藤木海は窓際の席でデイパックを下ろして、トン、と椅子に座った。

黒縁めがねも外して置く。

漆黒の瞳がぱちりと開き、教室内を映した。

開け放された窓から、春の風が流れ込み、白いカーテンがはためいていた。

海の漆黒の髪も、風になびく。

「水戸部が桜樹を狙って、逃げた。

いま、柊に追ってもらっている。

ここで待たせて」

教室に沈黙が落ちた。

すこし間をあけて、教授はことりとマグカップをテーブルにおいた。

「これはあなたの責任ではない」

「でも、僕がここにいなければ、教授はもっと早くにカタをつけてられたよね」

桜樹は藤木海を見下ろした。

よく知っている小柄な少年。
見なれた漆黒の髪と瞳。
白い、透けるような皮膚。

いや……。

ぞわり、と、桜樹の中で得体のしれないものが目覚め、蠢く。

もっと遠い昔から。
オレはこいつを識っていた。

がらりと引き戸が開き、緊張した顔の柊まどかが現れた。
首すじに、銀光りするバタフライナイフがつきつけられている。
水戸部鉄士が背後に立っていた。

『稲岡さんが階段で転落しました。
重傷で、救急車を呼んでいます……で、水戸部鉄士をとりあえず、連れてきましたけど、どうしましょう?』

柊が手話で告げた。
連れて来たというより、人質に見えるけど。
普通の女のコにしては、ずいぶんと落ち着いている。
むしろ、ナイフをつきつけている水戸部の方が、テンパっているように見えた。

「志摩津、だせよ、さっきのコップ」
「もう兄さんに渡したよ」

水戸部を睨みつけながら、嘘をつく。
水戸部は忌々しげに舌打ちをした。

「こんなときだけ、素早い。
まァ、いいさ、どうせ稲岡の指紋しか出て来ない」
「きみが彼女に入れさせたのか」
「まあね、ハバネロの粉飲ませて、からかってやろうって誘ったんだ。
あいつ、面白いの好きだったし」

たとえようもない嫌悪感がこみ上げてくる。
あんな可愛い子。
幼馴染でつきあってたんだろ。
どうしてこんな酷いことができるんだろう。

「きみが突き落としたのか」
「しょうがないだろ、騒ぎだしたんだから」
「だからって！」
「お前が悪いんだっ」

水戸部はいきなり叫んだ。

「志摩津の直系と言うからさぞかしすごいヤツと思いきや、まさか死体にビビって漏らしちまうなんて。
誰もお前のことなんか、疑いやしない。
馬鹿なフリをしてた、と通すんだって、無理がありすぎる。
おかげでこちらの計画は狂いっぱなしだ」
「村上さんはなんで」
「お前の長所とか、隠されたすごい才能とか能力とか、なんかない

かと聞いただけだ。
しかし欠片もいいところが出て来なかった。
ホント、どうしようもないヤツだな」

すごい言われようだ。

本当は緊迫したシーンだろうに、いまひとつ、教授や守屋もビミョーな顔をしているし、海にいたっては笑うのを必死にこらえて、無理やり澄ましている。

柊がわずかに指先を動かした。

『人質のふり、まだ続けますか？』

「あ。
もういいよ、お疲れさん」

海が言うと同時に、柊はするりと水戸部のナイフをすり抜け、桜樹の傍らに立った。
桜樹と目があうと、にこりと小首をかしげる。

「あ、おい、待て」

慌ててナイフを振り回そうとした水戸部の手首を、いつの間にか桜樹のわきをすり抜けていた海が掴んだ。

漆黒の瞳で水戸部を見すえて、水戸部の手首を握りしめる。
みかけより、ずっと力があるらしい。
水戸部の手からナイフが落ちた。
海がそれを蹴ると、守屋が拾って刃をたたんだ。

「藤木……」

水戸部はうめき声を上げながら、顔をしかめた。

「お前はいったい何なんだ。いつもいつも教授たちと一緒にいて。そのくせただのアルバイトだし。椎じゃないけど、どうにも気味悪い」

藤木海は満面の笑みを浮かべた。

「ミゾチカさんの幼馴染、って言ったら？」

水戸部の顔から表情が消えた。

ポーカーフェイスを作ろうとしているような、警戒するような、奇妙な顔だ。

「なんのこと」

かるい声で言うが、全身がこわばっている。

「うふ」

海は肩をすくめて笑うと、水戸部の手首を勢いよく引いた。

バランスを崩した水戸部がよろめくと、水戸部の顎をひとさしゆびですくった。顔をあおむかせキスをする。

くちびるをゆっくりはなすと、漆黒の瞳を細め、

「ミゾチカさんに伝言。

ちゃんと伝えてね、『カイからだよ』って。

いいね」

漆黒の瞳を細めて、笑う。

感情の読めない、海らしくない顔だ。

「な、なに」

「じゃ、ね」

海は落ち着いた声で言うと、水戸部を部屋の外につき出し、ぴしゃりとドアをしめた。

「桜樹」

藤木海が振り返った。しなやかな指で桜樹を指す。

「志摩津に電話」

「え」

「志摩津吉鷹にかけて。ほら早く」

吉鷹に意味もなくかけると怒鳴られるとも思ったが、海の声には有無を言わせない迫力があった。

電話をかけると、すぐに海がひったくった。

「あ、志摩津？　ぼく」

一拍、間があいて、離れていてもわかるほどのわめき声が聞こえてきた。

藤木海は片耳を押さえて顔をしかめ、携帯電話を耳からはなし、たっぷり十秒は待った。

わめき声は止まらない。

「黙れ」

海が電話口に向かって言うと、ぴたりと静まり返った。

「だから、説教はあと。
今までの経緯、聞いてるでしょ。
実行犯は水戸部鉄士だが、黒幕は紺野溝近だ。
桜樹に罪を被せて終わらせる計画だったと思うが、くぎを刺した。
アイツはバカだけど、さすがにここまで来たら手をひくよ。水戸部に遺書持たせて自殺させるだろうね。
てなところで始末しといて。じゃね」

また吉鷹のわめき声が聞こえたが海はあっさりと電話を切り、桜樹になげて返した。
全開にした窓から風が流れ込み、カーテンが翼のようにはためいている。
長谷部時宗も、守谷もじっと海の行動を見ていた。

「そうされるのですか」

しずかな声で教授が言った。

藤木海は両腕をくむと、とん……と本棚にもたれて、天井をにらみあげた。

「かーなーり不満はあるけどね。
ここらが限界じゃない。アイツ、バカだし。ひつっこいし。
すこしばかり譲歩しないと、下がらないモン。
教授にもちょっと迷惑かけるね」

長谷部時宗は彫の深い顔に、微笑を浮かべた。

「わたしのことなら、何とでも」

「え、えーと、藤木くん、どういうこと?」

藤木海はちろりと桜樹をみると、ぷぅっ、とほおをふくらませた。

「どーゆーこととって、正直、いいたいのはこっちの方だ。こっそり世を忍んでのんびり隠遁生活をしていたら、教授は現れるし、きみもやってくるし、あげくの果てに紺野溝近だなんて勘弁してほしい」

「こっそり?世を忍んで、って???」

桜樹が茫然としていると、

「本当に気づいていなかったんだな」

教授が呆れたのを通り越して、感心したようにつぶやいた。

「志摩津の直系なのに。志摩津本家の面目丸つぶれですねえ……」

守谷もぼそっと言う。

「ななな、なに?」

「ここまで来るとうらやましいくらいだ」

教授が天井をあおいで嘆息した。

「長谷部もだが、志摩津も数千年以上も前から津久見に代々仕える身。
津久見の御当主を前にまったく、何も、気づかないなんて」
「津久見？
御当主？？？　って」
桜樹が恐る恐る横を見ると。
「津久見の御当主さま。本名は津久見夏惟」
と、藤木海……もとい、津久見夏惟は自分をさしてにっこりとした。

21.

「ええ、えええええっ。
つ、つくみのわかさま……」

ざあああああっと血の気が引く。

妙なざわざわ感と懐かしさがあるし、マメに世話してくれるから、てっきり志摩津の血族かなにかと思っていた。

志摩津家の主君筋。

千年以上にわたって仕えてきた主。

なにより。
よっしいの大切なご主人様だ。

（ど、どうしよ……）
（オレ、リンチにあう、いや、殺されるかも）

顔色どころか、顔ごと失いかけくらくらしていると、教授が苦笑しながらいった。

「正直なところ、志摩津家がなにかを嗅ぎつけてきみをよこしたんだと思っていたんだ。なんやかんや理由をつけてね」

桜樹はぶんぶんと首を振った。

「そ、そ、そんな……そんな器用なこと、オレにできるわけない…

…」

うんうんうん、と、皆がそろってうなずいた時。

バン、と音をたててドアが開いた。

立っていたのは、志摩津吉鷹だった。

片手を引き戸口にあてて、ぜーぜー息を切らしている。

ダークグレーのスーツに、ネクタイをきっちりと締めているが、髪は乱れ、汗だくだ。

らしくない。

本当に吉鷹？　と桜樹が目をこすると、

「かあああああいいいいいい」

吉鷹が絶叫した。

うげ、と夏惟が身をすくめ桜樹の陰に隠れようとしたが。

吉鷹が、がっちりと夏惟の両腕をつかんでいた。

「お前、こんなところで何やってんだよっ」

つばをちらして吉鷹が叫んだ。モデル張りの二枚目が台無しだ。

らしくない。

あまりに、吉鷹らしくない。

「社会勉強？」

夏惟はくちびるに指をあてると、うふ、とかわいらしげ肩をすくめた。

「どの口がそんなこと言うンだ。だいたい、紺良なんかに関わってんじゃねェっ」

吉鷹はぎっ、と夏惟の両ほおを思いっきり握った。

「ひょひょれは、ひょくじゃなく……」

夏惟がばたばたともがいた。

「ひょ、ひょんなことより、ひょんかいのこと」

「ああ、話はつけてきた。そのくらい片付けずに夏惟の前に顔を出せるかっての」

吉鷹は歯を見せて笑うと、夏惟の頬から手をはなした。

目の錯覚じゃない。

ほおを上気させ、ふん、と鼻をこすり、子供のような顔で笑っている。

（こいつ、笑えるんだ）

はじめてみる吉鷹の、人間らしい表情だった。

まなじりにしわを作って笑った視線が。

夏惟に触れる指先が。

志摩津吉鷹にとって、どれだけ大事な存在なのか、苦しくなるほどに伝わってくる。

夏惟は赤く染まったほおを両手でくるみ、ひどい、玉のお肌に、とぶーぶー文句を言った。

「にしても、早かったねえ」

「松ちゃんから村上の件、一報受けてすぐ、こっちに来てたんだよ」

吉鷹はキュッとネクタイを締め直し、髪を整えると、長谷部時宗の前に立ち、さっと頭を下げた。

ピシッと直角に体が曲がる。

逆光のシルエットが、細身の長身をさらに強調して、絵のようだった。

「時宗さま、はじめまして。

志摩津吉鷹と申します。

このたびは当家のことで諸々ご迷惑をおかけし申し訳ありません」

長谷部時宗はぽかんと口をあけていた。

「時宗さま？」

と守谷が教授のまえで手をひらひらさせる。

長谷部時宗は、

「いい男だなァ」

とつぶやいた。

「は？」

吉鷹が聞き直した。

「いや、仁資たちから話は聞いていたんだが……、あまりに違うんでびっくりした。婿に来てもらえないかな」

「違う？」

「そりゃあ」

守谷がくくくと笑って、桜樹と吉鷹を指す。

吉鷹の外向けの笑顔が凍りついた。にっこりとひきつった笑みを浮かべ、

「話は伺っています。

桜樹がいろいろとご迷惑をおかけした、のですね？」

と語尾をあげてたずねた。

いやいやいや、と教授が両手を振った。

「すごく楽だった。楽すぎてかなり不安だったというか、余計に勘ぐってしまったのだが。

まさか、志摩津本家の直系が、津久見の当主と一緒にいて気付かないなんて想像外だった。いくら演技といっても、吐瀉物の始末を津久見の当主にとっさにさせられないだろう」

吉鷹の肩がぴくっと震えた。

「そーそー。ジーンズの裾まくってあげようとしたら、蹴りいれられるし。

引越しの手伝いはさせられるし、お茶はいれさせられるし、あとは夜一人じゃ寝れないとか。とにかく手間がかかってかかって。

甘やかしすぎなんじゃない」

夏惟が恩着せがましく言って、手を広げてひとつひとつ数えていく。

「へえええええ？」

吉鷹が絶対零度の視線で、振り向きざまに手を伸ばした。桜樹は身をすくめたが、吉鷹の手は素通りして、夏惟の襟首を締めあげた。

「なーにを自慢げに言ってんだ。
オレが何度、秋彦のゲロやお漏らしの始末したと思ってんだ」
「えと、三回くらい？」

うふ。
と夏惟はかわいらしく小首をかしげて、にっこりという。

「数百回はしてるだろっ」

ぎりぎりぎりと、吉鷹が夏惟の襟首を締めあげている。

「いーじゃん、秋は可愛いんだから」
「オ、ウ、ジュ、だって可愛いだろっ」
「あー可愛い、可愛い、けど大人じゃん」

ばたばたと夏惟はもがいて、吉鷹の手から逃げ出した。

吉鷹はぴたりと動きを止めると、握ったこぶしを顎にあて、じっと夏惟をみた。ちらりと、桜樹に視線を走らせる

「『フジキ』？」
「さっきまで、藤木海だった」

桜樹が言ったとたん。

「ちゃんとフルネームを言えっ」

ぼかりとすごい勢いで桜樹の頭を殴った。
目の前を星がちかちかしている。

「え、ええ～っ。
だって、そんなの知らないもんっ」

うふうふふ、と夏惟は両手で口元をおさえると、漆黒の瞳でにこにこ笑っている。

「いやあ、志摩津が家の前にきた時はびくびくしちゃったァ。いちばんビビったのは、松芳サンがクラスに入ってきた時だけど」
「アレには私も吃驚した。
とっさに松芳君を遠ざけようと、きつく当ってしまった。
申し訳なかったと伝えてほしい」

苦笑いしながら時宗教授が言う。

「あー、松ちゃんは別にいいと思うけど」

と言いながら、吉鷹は柊まどかに体を向けると、スカートを思いっきりめくり上げた。
白い下着と細い足がむき出しになる。
吉鷹はぺたりと下腹部に触れた。

「わっ」

柊が声を上げて、あわてて両手で口をおさえた。

（声、出るんだ）

（てか、この声……）

ぐらぐらと眼の前が回り、力が抜けていく。

吉鷹は片手を腰にあて、胡散臭そうに柊を見ている。

「おまえ、東祁鶯円（とうぎおうえん）だな」

「ご無沙汰しております」

柊まどかこと東祁鶯円は、少年の声で、優雅に一礼をした。

「こっちが長谷部の密偵か」

「さすがに津久見の若さまがいるのに、徒手空拳というわけにもいかないからな。

ただし、夏惟さまが目立つのを嫌がられたので、志摩津にもいた守屋ならいざというとき腕も立つし、東祁鶯が唖の少女のふりをしていると誰も警戒しないし、この二人だけ配置した。

東祁鶯には夏惟さまの指示で水戸部にはりついていてもらってたんだが」

「えーっ、じゃあ、藤木くん、じゃなくて夏惟さま、ずっと水戸部って分かったの。

どうして」

桜樹がいうと。

「そりゃあ顔でしょ」

「顔だな」

夏惟と吉鷹がどうじに言い、互いに顔を見合わせてぱちんと手の

ひらを合わせている。

志摩津家の次期当主として吉鷹が津久見の若さまの近習となり、その生涯をかけて忠誠を誓っているのは知ってはいたが、主従関係というより、単に仲の良い友人のようにみえる。

吉鷹はすっと立ち位置を変えた。

夏惟から離れ、背を本棚に、戸口と窓と、夏惟を見渡せる場所に立つ。

（あァ、そうか……）

守屋と東祁鶯の身元を確かめたからだ。

この空間の一部を、ふたりに預け、もっとも効率のよいフォーメーションをとる。

それまではじゃれていふざけているようでいて、夏惟に手の届かない場所まで離れなかった。

それがもう身についている。

ずっと、そうやって大事なご主人様を護ってきたのだ。

「それで」

と吉鷹は夏惟に向かって顎をしゃくった。

行動は殊勝だが、態度はでかい。

「なんで、お前がここにいるんだ」

22.

夏惟は足でパイプ椅子を引きよせると、両足を大きく開いてすわった。
そろえた両手で座席をつかみ、上半身を前のめりに身を乗りだした。

「そ。問題はそこ。
もともと、ぼくがこの大学にいたんだ。
ぼくが一番先ね、一番なんだから、一番」

夏惟は人差し指をつきたて、一番、一番、一番、とくどくどくり返す。

「うるせっ。続けろ」

吉鷹が一喝すると、ぷううっとフグのようにむくれながら先を続けた。

「ちっとは世間を勉強しないといけないかナってね。父さまにもナイショで、誰にも知らせずに、アルバイトしてたんだけど。
そしたら教授がいきなり着任してサ、どうしたもんかと思っていたんだけど」

教授が苦笑いしながら、話をひきついだ。

「日本に帰国してしばらくは政府の教育関連の仕事をしていたのだが、なにかにつけ前例がない、予算がない、人手がない、口先ばかりでなにひとつ変えようとしない。

その一方で、日本の子どもたちの質は学力、精神力、気力、すさまじい勢いで劣化しているのに、指導すべき大人には誇りも気概もない。

それで長谷部ゆかりの小さいけれど自由のきく大学に腰を落ち着けて、寺小屋みたいなものをはじめようと考えていたんだ。

正直、私も構内ですれちがって驚いたというか、パニックになったというか。

夏惟さまからは誰にも言うなとの指示だったが、わたしにも長谷部当主としての面子がある。万が一、なにかあったらわたしの命でも片付く問題ではない。

その一方で、せっかく大学に居らっしゃるんだから、教育者としては授業に参加できる機会を作りたかった。

それで、守谷と柊を呼び、ゼミを持つことにした。ちょうど地元の有力者からもゼミを持ってほしいと懇願されていたので、小規模で生徒も厳選して。

ところがそれをどう知ったか、志摩津のご当主から甥を入れてくれと話がきてね。何度も理由をつけて断ったのだが、もともと志摩津家には弟たちも世話になっているし、むげにはできない。断り続けるのも不自然になって、夏惟さまに相談して、桜樹くんを受け入れることにしたんだ」

夏惟は両手を組み合わせ、顔の下半分をおおった。

「志摩津と言っても本家じゃ頻繁に会っていたのは松芳サンくらい。桜樹とは小さい時会ったきりだし。

のらりくらりと避けてやり過ごそうとしてたら、いきなり道路の真ん中で座り込んでてサ。

アパートも同じで出来すぎ、っても思ったけど、よくよく考えり

ゃ、この辺じゃ、あそこしか条件を満たす物件がないんだ」
「条件？」
「住人全員の身元がはっきりしていて、二階でもベランダ側から侵入できない構造、表通りに面しており、管理会社もしっかりしていて、通学も生活も便利なところ。
ぼくは目立ちたくなかったので、粘り強く二階の角部屋があくのまったけど、志摩津は前の住人を追い出したよね」
吉鷹はチッと舌をならした。
「ご当主さまに頼まれたからナ。半端はできないだろ。前の住人にゃ、別の広い物件を手当てしたサ」
桜樹はあっけにとられた。
あんな変哲もなさそうなボロアパートに、吉鷹がそれだけ手間をかけてとは思わなかった。
この大学のことにしても、時宗教授の人となりを知った今では、叔父の想いを強く感じる。
「まあ、だから志摩津家が夏惟さまのことに気づいているなら断ろう、そうでなければ、よほど飛翔くんが困っているのだから、私にできることはしようと決めたんだ。
だが、桜樹くんの到着にあわせてここで死体が発見された」
夏惟ははあと息を吐いた。
「アルコールの匂いが残ってたからね。
酔ったところを一突きされた、ってのはすぐに分かった。んでもって、血痕の量からしても、移動させてきたのは分かったし。

タイミングといい、やっていることといい、このアホさかげん、溝近さんの匂いがプンプンした。
でもってゼミの顔ぶれみると、アイツのいちばん好みは水戸部だったし」
「そんなに早く分かっていたら、すぐに警察に言ってよ。
そうすれば……」
椎行凪は殺されずにすんだんじゃないか。
「被害者が広がるだけ。
水戸部を切り捨てて、次の誰かを手先に仕立てるだろうね。それこそ、稲岡とかが次の暗殺者にさせられたかも。
水戸部を泳がせておく方が、まだ手の内が読めたんだ。
紺野溝近ってそーゆーヤツ。
アイツに目をつけられたら、自分が何しているのか、何させられているのか、死ぬまで分かんなくなっちゃうんだ。
僕もこの生活気に入ってたからもうちょっとばかり続けたかったし、桜樹も気に入ったし」
(気に……入られたんだ)
夏惟が漆黒の瞳を細めてにこりとする。心臓がばくばく鼓動する。
津久見のご当主さまとか別にして、単に『藤木海』でも、夏惟のことは好き。
だけど、気に入られる根拠に、心当たりがない……というか、なさすぎ……。
「どこが?」

桜樹が言ったとたん、夏惟が腹を抱えて笑いだした。

「そ、そ、そーゆー、とこ……」

震える人差し指を、桜樹に向けながら、ひーひー笑っている。

さすがにむかっとくる。前までは蹴っ飛ばせたのに、さすがに、津久見の若さまに対してはできない。

吉鷹が気の毒そうに桜樹を見た。

「要は笑いモノになってた、てか」

長谷部時宗は日焼けた彫の深い顔に、微笑を浮かべた。

「津久見のご当主さまが笑っていてくれるなら、それで充分じゃないか？」

吉鷹はちらりと時宗を見。

「あァ」

と前髪をかきあげた。

教室の固定電話が鳴った。

桜樹以外の皆の顔が、引き締まった。

守屋が受話器を取り上げた。

大学の交換室からのようだ。

「はい、つないでください」

と守屋が応じた。
夏惟は『スピーカーフォンにして』と手話で伝えた。守屋はうなずき、設定を切り替えた。
ボリュームを最大限にした。
ざああっという音がスピーカーから流れている。
夏惟は凄まじい笑みを浮かべて、片手を机についた。
びりびりする沈黙が続く。
『よお、ちび』
根負けしたか、ザラりとした甘ったるい声がスピーカーから流れてきた。
「ども」
満面の笑みですかさず夏惟が応じる。
吉鷹は本棚に軽く持たれたまま、腕組みをして横目で夏惟を見ている。
教授は椅子に座ったまま、じっと夏惟の様子を見守り、守屋は教授の背後に立ち息を殺している。
東祁鶯もぴんと背筋をのばし、静かな気を放っていた。
『素敵なことづけをありがとう』
「気に入ってもらえた？
なら、良かった」
『近くまで来ている。

会えないか』
「奇遇だね、僕も会いたいと思っていたとこ。
今からそっちへ行く。
待っててくれるかしら」
『今際の際までも』

ブツリと野暮な音で回線が切れた。
ツーツーツーと無機質な音が続く。

津久見夏惟が身をひるがえした。
今までとは別人のように引き締まった顔。
一言も言わずに部屋から出ていく。
当然のように志摩津吉鷹がつき従う。
誰も。
何も言わない。
長谷部時宗ですら、無言で身動きせずにいる。

「オレも……。
オレも行くっ」

桜樹は立ち上がった。

椎行凪の。
仇を取りたい。

23.

「ちょいと待ったァ」

守屋に襟首を捕まえられた。
離れた場所にいたはずなのに。素早い。

「も少し、空気読めない？」

呆れかえったようにため息をつく。

長谷部時宗教授がかがんで、桜樹に視線を合わせた。
にっこりと笑みを浮かべる。

「足手まとい、って言葉があるんだけど、知っているかな？」

もはや小学生扱いである。
むくれて教授を睨みあげる。じたばたともがいても、守屋の手は外れない。

靴音を立てて、志摩津吉鷹は振りかえった。
じっと桜樹の奥底まで抉るように見る。

「来い」

刃のような声だ。

「構わないな？」
「任せる」

夏惟が短く応じた。
桜樹は守屋の手を振りほどき、二人を追った。

妖怪校舎の前には、吉鷹の純白のＢＭＷが止まっていた。さほどぬかるんではいないとはいえ、跳ねあげた泥が純白の車体にいくつもついている。

だが、まったく吉鷹は気にしてないようだ。

いそいそとＢＭＷ　Ｍ３クーペの助手席のドアをあけている。分かっちゃいるが、桜樹の時と露骨に差がある。
だが。

「これ？」

と夏惟は顔をゆがめて車の横に立ちすくんだ。

「先月買ったばかりなんだ。エンジンが」

吉鷹は自慢げにしゃべるが、

「ちょっと……」

と夏惟は言いよどみ所在なげに、デイパックの肩ひもをいじった。

「え」
「目立ちすぎやしない、かなあ、なんて」

桜樹は心の中でガッツポーズをとった。

そうだ。
その通りだ。
目立ちすぎ。
はっきりいって、悪趣味である。
若さま、よく言ってくれた、としみじみと夏惟を見直した。
だが。

「えええええっ」

吉鷹は予想してなかったのだろう。

「だって、お前、白い車に乗りたいって言ってたじゃんっ」

声を張り上げていった。
夏惟は首をぽてっと傾げた。漆黒の眼をぱちぱち瞬いている。

「ほら、いつも。学校に行くのが黒塗りのリムジンだったから。白い車に乗りたいって、言ってて。
だからオレ、白にして」

ああ、と夏惟はぽんと手をたたくと、

「ああゆうの」

と、傍ら止まっていた守屋の、古い、汚れた白のファミリーセダンを指した。
吉鷹は口をあんぐりひらき、硬直した。
アイデンティティを消失したようだ。

「あ、いや、志摩津は車でいけばいい。ぼくたちバスで行こう。じ

や、現地集合で」

夏惟はにっこりとして、桜樹の手を握り、ひいた。

「え、でも、まってよ」

桜樹はあわてて時刻表をひらいた。

やはり予想通り。バスはいったばかりで、あと小一時間は来ない。

「ありゃ」

夏惟は困った顔をした。

「うっそお、間に合うと思ったのに」

聞えよがしにいうが、吉鷹は車のわきに立ったままだ。

どおしよう、困ったなあ、と、通る声で、夏惟は言い続けるが、吉鷹は意固地に聞こえぬふりを続ける。

そういう状況じゃないはずだ。

守屋や教授を呼んで見せたい。

オレよりこっちの方がはるかにガキっぽいじゃないか。

「じゃあ、よっしぃの車で行かない」

たまりかねて、桜樹が言った。

ううん、でもぉ、とぐずる夏惟の手をとって、吉鷹のところへひっぱった。

「よっしい、バス行っちゃったんだ。乗せてよ」

ボンネットに肘をつき、むくれていた吉鷹はじろりとみると、

「乗りたくないンだろ」

とつっけんどに言う。

「ウン」

素直に若様が返事をするのをあわててさえぎり、

「あのう、でも、急いでいるんだよね」

と夏惟をなだめた。

「そりゃあ」

「だ、だからね、今日のところは、よっしいの車で行こ」

「そお？　じゃ、そうしよっか」

桜樹が夏惟を説得したのに、吉鷹は感謝するどころかあからさまに不機嫌になった。

桜樹の頭をつかみ、モノを投げるように、後部座席に押し込む。

ヤツ当たりだ。

そもそも吉鷹のセンスに問題がある。

誰だって、男同士でこんな派手な車に乗りたくない。

桜樹がいなかったらこいつらどうするつもりだったのか。

そんな桜樹の気も知らずに、助手席でシートベルトをつけた夏惟

は、狭いねえ、あまり座り心地良くないねえ、とのどかに感想を言う。

その感想自体はまったくもってその通りだが、運転手は吉鷹である。桜樹がはらはらしていると、吉鷹は鬱憤をはらすように、強くアクセルを踏み込んだ。

がくんと車体が揺れる。後部座席の桜樹はたまったものではない。

「でさ、なんで桜樹を連れていくの」

と夏惟は言った。

「手土産」

不機嫌な吉鷹はぶっきらぼうに回答する。

「え？」

「紺野溝近に」

吉鷹の言葉に、なにがツボにはまったか、夏惟はけたけたと腹を抱えて笑うと、

「いいのォ？」

後部座席をふりかえって桜樹をみた。漆黒の瞳がきらめく。くちびるに指をあてると、うふ、と肩をすくめた。

「溝近さん、ド変態だよ。

まァ、死んで帰れればラッキー、みたいナ」

「じ、冗談、だよね」

「さあ」

と前に座ったふたりは同時にいった。

「て、その人、どういう人なの？」

「臭い」

夏惟が即答した。

「ぜったい、アイツ、腋臭だよな。ナ、ナ、ナ」

「知るか」

吉鷹の返事はそっけない。

「でもって、アホ、バカ、カバ。

そうだカバ面、カバそっくり。いい年して若づくりだし」

「あのう、そういうことじゃなくて」

おずおずと桜樹が言うと、バックミラー越しにちらりと吉鷹が桜樹を見た。

「紺良会長の孫息子。

男系の血族を重んじる紺良一族の中では、サラブレッド中のサラブレッド。

品行に問題がありすぎて、父親からは勘当寸前だが、会長の嫡孫のなかではいちばん力があるとも言われている。

要は『取扱厳重注意』ということだ」

あ、いーね、その言い方気に入った。

ついでにそのまま南極に発送しちゃえ、と夏惟が助手席ではしゃいだ。

吉鷹が止めたのは紺良宇宙科学技術大学建設予定地。
途中まで着工して、計画が中断しているらしい。
高く組まれた、鉄筋の枠だけが寒々しくそびえたっている。

工事現場のエレベーターに乗り、上に上がる。

鉄筋で組まれた骨組の中央に、男はスプリングコートの裾を風になびかせ、夕陽を背にひとりで立っていた。

心臓がどきりと鳴く。

肩幅ががっしりとした見惚れるほど長身の、若い男だ。
艶やかな髪がほおの長さで切りそろえられており、男の動きにあわせてゆれる。

紺野溝近は眼を細めて、笑顔を見せた。

笑っているのに、全身から殺気がはなたれている。
距離があっても嗅ぎとれる、男くさいコロンの香りにくらくら目眩がする。
吉鷹ですら、この男に見比べると、華奢なお子さまにしか見えない。

「よぉ、ちび。大きくなったな」

甘い官能的な声が言った。

24.

夏惟が一歩前へ出た。
くちびるの両端をつりあげ、微笑する。
漆黒の瞳が闇の色で煌めく。
紺野溝近に負けず劣らず、すさまじい気だった。

「溝近さんこそ、ホント、どこにでも出没するねぇ、ごきぶりみたい」
「言っておくが、こちらの計画が先だったンだぜ」
「でも、桃城大が長谷部教授のゆかりの地だとは知ってたんでしょ」

紺野溝近は酷薄そうなくちびるに微笑を浮かべ、髪をかきあげた。

「そりゃァな。
だが、誰が現役真っ盛りに第一線の現場を退いて、こんなド田舎の大学にやってくると思うか」

夏惟は甲高い声で笑った。

「で、目ざわりになったから、嫌がらせしたンだ。溝近さんらしいね」

男はにっこりとし、夏惟に歩み寄った。
ほおに触れ、耳もとから首筋までを愛おしげに撫でる。
見ているだけで総毛だつほど、淫らな指さきだった。

「世の中から引きこもって、廃人同様とも聞いていたが、ずいぶんと元気そうじゃないか」

紺野溝近の手のひらの中で、津久見夏惟は艶めかしい視線を流した。

「残念？　それとも嬉しいのかしら」

「さてね」

溝近の指先が、夏惟ののどをたどり、顔を仰向かせる。

夏惟が力を抜いて身を任せているのを愛おしげに眺め、なでまわし、くちびるを重ねる。

溝近がくちびるを離すと唾液がつながり、また、ぬめった舌を夏惟のくちびるに突き刺す。

見ている方が達しそうな、口づけだ。

「溝近さん」

吉鷹がヒステリックな声をあげ、桜樹の首筋をつかむと強く押し出した。

桜樹はバランスを崩して、よろめき、鉄筋に手をつく。

ぜんぜん。

迫力が違う。

場に呑まれて、声も出ない。

「その辺で勘弁してもらえませんか、コイツ、好きにしていいですから」

「志摩津のガキか」

紺野溝近は桜樹に視線もくれずに言った。

「ずいぶんと、自分のご主人さまを安売りするようになったじゃないか」

ぐっ、と吉鷹が声につまった。

吉鷹が殺気をはなつのを、夏惟はしなやかに腕をのばして遮った。

「溝近さん、前から言っている。志摩津はぼくの友だちだよ」

くくく、と溝近は喉の奥で笑った。

「津久見の若さまの従者想いは相変わらずか」

「ずっと変わらない、みんな僕の友だちだ」

溝近のくちびるに勝ち誇った微笑が浮かんだ。

「みんな？」

「そ」

「碓氷透も安威美有夷（あいみゆうい）も？」

吉鷹の顔がかっと朱にそまったが、夏惟は表情をかえなかった。

だが、答えはしなかった。

紺野溝近はひびく声で笑った。

「今日は気分がいい。

こんな愉快な気分は久しぶりだ」

津久見夏惟は腕を組んで、真正面から紺野溝近を見すえた。

「じゃ、気分が良くなってもらったところで、本題。

要求は」

紺野溝近はにやりと性質の悪い笑みをみせた。

「こっちの計画、進めさせてもらう。
妨害から手を引かせろ」

「しょうがないね」

「それとウチの大学にも、長谷部時宗殿に講義を持っていただく。
かわりにウチの学長をそちらにも派遣しよう。
共存共栄でいこうじゃないか」

夏惟は否定も肯定もしない。
視線を伏せ、冷たい風に黒髪を嬲らせている。

紺野溝近はまた響く声で笑った。

溝近が身をひるがえすと、どこからともなく、黒服の恰幅のよい男たちが十名ほどあらわれ、溝近につき従う。
ぎょっとしたのは桜樹だけで、夏惟も吉鷹も分かっていたかのように、無反応だった。

男たちとともに紺野溝近が去ると、

「げー、うげーっ、気色悪っ」

津久見夏惟は体をまるめ、げーげー、うなりながらぺっぺと唾を吐き散らかした。

「だから止めてやったろ」

吉鷹は苦り切った顔でいう。

夏惟はごしごしと口を拭い、げーげー、騒ぎながら、

「いっつも思うんだけど。ぼくって愛されているのかしら、憎まれているのかしら。ワケ分かんないよねえ、あの人」

「そ、う、思、う、なら、頼むからっ、お願いするからっ、紺良になんて関わらないでくれよっ」

吉鷹がわなわなと体を震わせながら言った。

「だから、向こうが絡んでくるんだって。知っているでしょ」

「倍返しとか、もういい加減やめろ。三倍返しとか、十倍返しとか数増やすのも禁止！」

「はいはーい」

吉鷹はまったく信用していない、冷めきった視線を流し、

「この建物ぶちこわしてやろっかな」

つま先で鉄板を蹴った。

カン、とよい音が響く。

「志摩津」

呆れたように、夏惟がたしなめた。

「聞いているんだろ。初代学長。アイツ、よりにもよって紺野溝近と組むなんて……それで、それで、こんなにバカにされて」

ぎりりと吉鷹が歯ぎしりをする。

夏惟は漆黒の瞳を細めた。
荒い風に黒髪が流れ続けている。

「逆だ。
ぼくが先にみんなを裏切った。知っているはずだ」

夏惟はにっこりとすると、へたりこんでいた桜樹に手を差し伸べた。

「気にしなくていいよ、溝近さん、人を見る目はないから」

情けない。
自分が情けなかった。

椎の仇を取ってやるまでとはいかなくても、なにかできると思っていた。

気に呑まれ、嫌みを言うことすら、できなかった。

涙がぼろぼろと零れる。

「あー、怖かったよね。
だから言ったでしょ、ヤな奴だって」

夏惟によしよしと涙を拭われ、桜樹が立ち上がるのを吉鷹はじっとみていたが、

「夏惟、はずしてくれないか」

とさみしげな顔でいった。

「嫌」

津久見夏惟はきっぱりといった。
目を細め、からかうように吉鷹を見て、

「ダメだよ」

という。

「これは志摩津の問題だ」

吉鷹の手にはいつの間にか小刀が握られていた。
視線はまっすぐに桜樹に向けられている。

「オレは孤児だ。
だが、ずっと志摩津の家でご当主さまにも、家長さまにも、良くしていただいた。こんな決断をさせるわけにはいかない。
手を下すのはオレでいい」
「だから、溝近さんにあげようとした？　そうすれば命だけは助かる理由ができるって」

吉鷹は無言で桜樹をみつめていた。
憎しみや怒りがあるならいい。
憐れみだった。
桜樹を憐れんで、哀しんでいる。
もう怒鳴りもしなければ、怒りもしない。

桜樹の全身から力が抜けた。
たぶん。

本当に、もうダメなんだ。
すっと、昔の記憶がよみがえってくる。
叔父の道場で、ふたりの兄たちと訓練をうけていたころ。
いつの間にか、吉鷹が志摩津家に養子として、現れていた。

桜樹の身代わりとして。

はじめはおない年生まれた桜樹が、津久見夏惟の執人になるはずだった。だが、三人兄弟の甘ったれの末っ子で、すぐに桜樹には性格的にも能力的にも無理があると判明した。
そこで孤児で才能のある吉鷹に白羽の矢を立て、志摩津の名を与える代わりに、一生津久見の若様に仕える役目を与えた。

吉鷹の人生にははなから自由はなかった。
行動も将来もすべてが決められていた。
だから吉鷹が怖かった。
無表情の下に、桜樹への怒りや恨みつらみがあるのではないか。
けれど。
コイツ、若さまのことが好きなんだ。
若さまも、イイやつだった。
ほっとした。
心底、ほっとした。

だから。
もういいよ。
オレ、みんなの迷惑になるばかりで、なんの役にも立たないし。

夏惟が桜樹を背に、吉鷹の前に立ちふさがった。

「セコイ真似してくれたじゃん。

そんなの紺野溝近に通用するわけないじゃない」

吉鷹がぎくりとし、うろたえた。
ぱくぱくとくちびるを動かすが、声はない。

「おかげで、この僕もバカにされたよ」

吉鷹はいまや蒼白だった。

「桜樹はぼくがもらう。それと今、志摩津家に帰れないんだって？
それ、取り消してね。
御当主さまへ伝言よろしく」
「夏惟、なにをいっている」

吉鷹は悲鳴のように叫んだ。

「オレのどこが桜樹に劣るってんだ、オレはずっと努力してきた。
絶対に執人の地位は渡したくなかった。
夏惟、お前のそばに居るために」
「そーゆーとこ」

んべ、と夏惟は舌を出した。
いきなり桜樹の手首を握って駆け出す。

下まで一気に降りると真っ赤な丸っこいコンパクトカーが止まっていた。

コルトリミテッド　レッドメタリック

運転席には、少年の姿に戻った東祁鶯円が座っている。

「松芳さまから車が届きましたので、守屋さまの命でお届けに参りました」
「ちょうど良かったぁ」
夏惟は桜樹のからだを押し込むようにして、一緒に後部座席に乗り込んだ。
「帰ろ。
お家に、帰るんだ」
透けるような笑顔で夏惟は言った。

25.

都心の広大な屋敷の勝手口で東祁鶯は車を止めて二人を降ろすと、去っていった。
すでに日はおちて、心細い外灯の白い光がついている。
色褪せた古い塀ではあるが、昔の、頑丈そうな作りだ。塀の上には尖った柵と有刺鉄線が張られている。

勝手口には無骨な鍵が5つついていた。

「ええ、と、鍵、鍵、えと、めんどくさ。
秋〜っ」

夏惟は鍵をとりだすのをやめて、握りこぶしでチャイムをガンガンと叩いた。
しばらくして、ドアがひらいた。

（うわぁ）

夜の光のなか現れたのは、目が覚めるような白人の少年だった。
すらりと華奢な四肢をし、銀色のやわらかそうな髪をふわりと肩までのばしている。
瞳の色はガラス細工のような灰色。
古いスリムなジーンズと無地の白いTシャツ姿が、少年の清涼さを際立たせている。

少年の透明な瞳が、ちろりと桜樹をみた。
小動物のようにピリリと警戒した瞳だ。

「か、かわいい……」

桜樹はうろたえて夏惟のシャツをつかんだ。

体の芯がぐにゃりと蕩けそうに、可愛い。

「言ったじゃない、秋彦はかわいいって」

夏惟はそっけなく桜樹の手をふりはらった。

「予想以上というか、似てない……」

人としても。

いきものとしても。

こんな可愛らしい存在があるなんて、信じられない。

鍵を開けると、少年はさっと華奢なからだをひるがえした。

夏惟もつづく。

桜樹はあわてて鍵をかけ、ふたりを追った。

塀のなかは暗闇だった。

志摩津の家も、都心の中心に道場を構えているが、この津久見邸はさらに大きな屋敷だ。

夏惟を追って、洋館の裏口から入った。

ひどく古いつくりの、やたらにひろい台所に出、食堂につづくドアは開け放されている。

食堂に夏惟と少年はいた。

二〇人ほどは座れるだろう、広いダイニングテーブルがあった。

天井からぶるさがったシャンデリアもくすんだ鈍い光を放っている。

食堂からは庭が眺められるようになっていた。

暗くてよく見えないがとてつもなく、ひろい空間のようだ。

なんだか、ものすごく懐かしい気がする。

夏惟は桜樹の首をつかむと、どん、と前に押し出した。

「秋、これ、おみやげ」

少年はびっくりしたようにうろたえて身を引いた。目をぱちくりさせて、桜樹をまじまじとみる。

「お土産って……オレ？」

桜樹がリアクションを取れずにいると。

「あー、お肉、うまそーっ」

夏惟がいきなり大きな声をあげた。

大きなダイニングテーブルには一人分だけ、料理が並んでいた。広げられたナプキンの上に、ピカピカに磨かれたカトラリーが並び、一人分だけにしては不自然なほど、きれいにステーキとスープが盛り付けられている。

夏惟は少年を押しのけてテーブルに着くと、ナイフとフォークをにぎって肉を切り始めた。

「ん、んま、秋、料理じょうずになったねー」

美少年は口をあんぐりとあけ、胸元でゆびを一生懸命動かした。

手話だ。

『夏惟、それ、オレの。
オレのお肉だってっ』

と訴えているが、夏惟は顔をあげないので、伝わらない。
少年は両手でばんばん机を叩いて抗議をしたが、やがてあきらめて細い肩をおとし、がっくりとした。

ガラス細工のような瞳をうるませて、恨めしそうに夏惟をにらんでいる。
姿かたちだけなら、宗教画のようだ。

（オレ……なんか変）

胸が苦しいほどに、どくどく波打っている。
この銀髪の少年から、目が離せない。
無条件に、甘やかしてやりたい。
どんな無理欲求でも受け入れてやりたい。

「あ……、その、ひどいねえ、君の晩ごはんだったんだよね？」

桜樹が話しかけると、少年は濡れた目で、桜樹を見た。
警戒するように口をきゅっと結び、わずかに体をひく。

「ぼくは桜樹。志摩津桜樹」

桜樹は話しながら、同じ言葉を手話で告げた。
少年は顔を桜樹にちかづけ、くん、と匂いを嗅いだ。桜樹のほおに少年の吐息がかかり、しろい首すじから清潔な石鹸の香りがたち

のぼる。

体の芯がぞくぞくする。

『志摩津？　志摩津じゃないよ』

透明な瞳が、じっと桜樹をみあげた。

意識丸ごと、吸いこまれそうだ。

「えー、と」

「志摩津だよ、そいつも志摩津だって」

もぐもぐと食べながら夏惟が言った。

「ぼくは津久見夏惟で、お前が津久見秋彦だろ。

父さまだってそうだ。たくさん津久見がいるだろ。そういうこと」

秋彦は驚いたように大きく目をひらいた。

『そうなの』

とたずねる。

年のころは十代半ばくらいだろう。

あまりに天然だ。

「ごちそーさま、あ、洗濯物持ってきたから」

夏惟は秋彦に紙袋を押しつけると、大きく欠伸をしてすたすたと

どこかへ行ってしまった。

ぐすん、と秋彦は涙をぬぐうと、食器の汚れを丁寧に拭い、隣接

する厨房であらいはじめた。

「あ、手伝う、手伝わせて。
お願い」

秋彦は驚いた顔をしたが、嫌がりはしなかった。
食器を片づけた後は、夏惟の洗濯物をもって、離れた洗濯室へ行った。

信じられないほど広大な屋敷だ。
石造りの、ひんやりとした空間に大型の古い洗濯機やら、いくつものアイロン台がならんでいる。
秋彦は慣れた手つきで、洗濯物を洗濯機に押し込み洗剤を入れ、ボタンをセットする。

「えらいねえ」

桜樹が本気で感心すると、秋彦は白いほおをピンクに染めた。

そのはにかみ方も初々しくて、そのまま抱きしめたいような、どうにかしてしまいそうな、こちらがどうにかなってしまいそうな、なんともいえない気分だ。

「ひどいお兄さんだね、藤木くん、じゃなくて、夏惟、いつもこうなの？」

秋彦はこっくりとうなずいた。

「シンデレラみたいだ」

と思わずつぶやくと、

『シンデレラ？』

秋彦がたずねた。

「ああ、ごめん、あれはお姫様の話だし、いぢわるな継母だもんね。ちょっと違うか」

『それ、なに』

秋彦にせがまれ、桜樹は洗濯室の石の階段に腰を下ろし、うろおぼえのシンデレラの話をした。

つっかえつっかえの危うい話だが、秋彦は桜樹の膝にひじをのせ、きらきら煌めく瞳で桜樹を見上げ、話をじっと聞いている。

『いいなあ、シンデレラ』

と秋彦はしきりにうらやましがった。

「え、でも、シンデレラはお姫様だから」

『カボチャ。カボチャの馬車、食べたことない』

「あ、そっち……」

ぐうううう、と、秋彦の腹が鳴った。

「お腹すいたんだ」

と桜樹がきくと、ぐすぐす泣いて、涙をこすった。
きゅん、と、胸がつよくしめつけられる。

「まって、まって、泣かないで。
洗濯終わったら、何か食べにいこ。ね、ね、美味しいのあるよ」

秋彦が濡れた目をあげた。

『カボチャ？』

「かぼちゃもいいけど、お肉食べ損ねたじゃない」

肉、という言葉に、ぴくりと秋彦は体をうごかした。
いちいち行動が素直でかわいいのだ。

洗濯モノを一緒に干し終わると、桜樹は秋彦を連れて屋敷を出た。

志摩津家の近くにあるステーキハウスへ行く。
津久見邸からも、ぶらぶらと徒歩で行ける店だ。

夜の外灯に照らされた街を、秋彦は軽い、羽のような足取りで歩いて行く。
先に行っては桜樹を待つようにじっと止まり、手をのばすと、するりと逃げて嬉しそうに笑う。
桜樹が本気になったふりをして追いかけると、すごく嬉しそうに駆け出しては、ついてきているか確認するように振り返って、桜樹を見ると笑顔になった。

可愛い。
本当に可愛い。

現実とは思えない。
これ。
夢なんじゃないだろうか。

本当は吉鷹に殺されちゃって、あの世で夢をみているとか。

そうか。
その方が納得できる。
じゃ、もっと楽しまなきゃ。

じゃれているうちに、あっという間にステーキハウスに到着した。

二十席もない小さな店で、マスコミなどには出ないが、味とボリュームは志摩津家のお墨付き。
物心ついたころからの行きつけの店だ。
時間も、訓練を終えた道場生たちがよく行くから、夜遅くまでやっている。

ドアを開いた瞬間、しまった、と思った。
長兄の志摩津蓉一が道場生たちと食事中していた。

気づかれる前に、ドアを閉めようとしたが、するりと秋彦が中に入ってしまった。目を丸くして店内を見渡し、カウンターで焼かれている分厚い牛肉を見て、ゴクリとつばを飲み込んでいる。

秋彦はふりかえると嬉しそうに、桜樹の手を握り、ひっぱった。
かわいい笑顔だ。

（ま、まあ、いっか……）

どうせ、夢だし。

秋彦は食い入るように、目の前で煙をあげて焼かれた肉をみている。

薄紅色の、かわいらしいくちびるからだらーっと、よだれがこぼれるのを見て、桜樹はあわててナプキンで拭いた。

年の割にはあどけない、というか、幼すぎる。だが、それがまた、桜樹の父性本能をむちゃくちゃにくすぐるのだ。

「それ、他のお客さんのだから。オーダーしようね。なにがいい？　ヒレ？　ロース？　サーロイン？　ええと三〇〇グラムくらい食べる……」

秋彦がくびをかしげているので、好き嫌いがないかだけを聞いて、桜樹がオーダーした。

目の前で焼かれた肉が皿にのせられほかの客に運ばれていくのを、秋彦は恨めしそうに見送ったが、すぐに自分の肉を見せられ、目を輝かす。

（純粋なんだなあ）

しみじみとかわいいと思う。

よくよく考えれば年上にばかり囲まれていて、年下の相手をしたことがない。

桜樹の今までの人生、年下だったのは椎行凪ぐらいだ。

年下の子の方が、自分には向いているのかもしれない。

秋彦の肉が焼きあがって出されると、にこにこと肉にかぶりついた。
繊細な指先でナイフとフォークを使用する。
器用な少年だし、マナーも見とれるほど優雅だ。
そのくせ天然ボケだし、ずれていて、純粋だ。
気が狂いそうにかわいい。

「さっきの食事。秋彦が作っているの？
ずいぶん綺麗に並んでいたけど」

『だってその方が美味しい』

「いつもそうしているの」

秋彦はぱくりとフォークを咥えたまま、こっくりとうなずいた。

「えらいなあ」

桜樹が感心すると、秋彦の頬がピンク色に染まる。

（オレ……ダメかも）

気が狂いそうに、可愛い。
人目がなければ抱きしめているところだ。

秋彦はロース三百グラムをぺろりと平らげ、デザートのアイスクリームも食べると、両手でぽんぽんとお腹を叩いた。

飽きてきたようで、きょろきょろと店内を見渡している。

「そろそろ行こうか」

勘定をしようとすると、店長が「お兄さまが」と小声で告げる。
思わず振り返った。
夢にしては、妙にリアリティがある。
ここまではだれも求めていないんだけど。

「いいよ、オレが」

強引に払おうとすると、

「でも」

と店長が困った顔をする。桜樹より、蓉一のメンツが大事なのだ。
やはり現実だった。
秋彦の前で、恥をかきたくない。

「いいってば」

桜樹はつい声を荒げた。
秋彦がおどろいた顔で立ちあがった。

『どうしたの?』

「あ、いや」

秋彦はすっと目を細めた。顔つきが変わる。
あごを突き上げ、ゆっくりと店内をねめまわす。
店内が静まりかえった。

巨漢の長兄が歩み出てきた。
身長１９０センチ超、体重１００キロ。
威風堂々とした体躯で、防衛省のキャリア官僚でありながら、つねに現場の最前線で陣頭指揮を執っている珍しい存在だ。
世界のどこの国、どこの文化圏へ行っても異様なほど男にもてるが、女にもてたことはない。
先日の見合いで３０回目のお断りをされたばかりである。

「申し訳ありませんでした」

すっと頭を桜樹と秋彦に向かって下げる。
ぎゅっと心臓がつかまれたようだ。
こんな兄の姿、見たくない。
これだったら、オレが惨めな思いしている方が、よほどいい。

『これでいい？』

にこにこと秋彦が言う。

「もういい、行こう」

桜樹は秋彦の手をひいて、店から出た。

（オレ、なにしたいんだろ）

吉鷹みたいにかっこよくなりたかった。
松芳兄さんみたいにしっかりしたかった。
蓉一兄さんみたいに逞しくなりたかった。

でもダメ。

どんなに努力したって、ぜんぜん追いつけやしない。
その努力ですら、アイツらは桁が違う。

だったら苦しいしんどい思いするより、遊んで、楽している方がいいじゃないか。
だって、誰も、桜樹に頼ろうとしないのだし。
いつか死ぬんだし。

秋彦が桜樹の手を振りほどいた。

心の中の情けなさを見抜かれて嫌われたかと、ドキッとしたが、秋彦は透明な瞳で、志摩津の道場を見つめていた。
津久見邸ではなく、志摩津の家に帰ってきてしまった。
秋彦が首をかしげる。

「あー、ごめ……。
つい、無意識で家に来ちゃった」

津久見邸へ帰ろうとすると、秋彦はぴょんと跳ね、道場の中へ入って行った。

「えっ、秋彦、ダメだよ。
すっげー怖いのがたくさんいるよ。
化け物ばっかなんだから」

あわてて捕まえようと追いかけるが、秋彦はじゃれているのと勘違いしているのか、笑顔で桜樹の手を逃れては、奥へ奥へと行く。

「ダメだってば」

ぴたりと秋彦は止まった。

廊下の壁へ、じっと向かい合う。

（？　なんだ？）

桜樹が口を開く前に、秋彦は壁のいっかくに手を触れた。

「え？」

壁に見えていた場所が、音もせずに開く。

なかはちいさな部屋だった。

こぶりの道着や武具、漆塗りの脇息がきちんとならべられている。

秋彦はきょろりとあたりを見、さらに奥の引き戸を開いた。

桜樹は声を出しそうになって、あわてて両手でふさいだ。

四畳ほどの畳敷きの向こうに御簾がかかっており、御簾の先は道場となっている。

生々しい打ち合いの音が響いてくる。

（知らなかった）

道場の一角に御簾がかかっているのは見慣れていたが、まさか、こんな隠し部屋から続いているとは思わなかった。

秋彦は透明な瞳を御簾の向こうへむける。

二十人近い道場生が汗だくで床にころがっているのが、透けて見える。

「誰だっ」

殺気が放たれると同時に、御簾がまくりあげられた。

吉鷹だった。

26.

いつも外見第一。
身だしなみ最優先の吉鷹にしては珍しく道着がはだけ、全身から汗が滴っている。

（てことは）

よほど荒れ狂っていたのだ。
吉鷹の背後に累々と横たわった道場生たちは被害者なのだろう。

ふだん無感情無表情な吉鷹だが、それだけにキれた時は手のつけようがない。
やけにステーキハウスに長っ尻していたけど、もしかしたら蓉一たちは避難していたのかもしれない。
原因は容易に想像がつく。

背筋がぞーっと冷えた。

「ごめーん、お邪魔しました。
続けて続けて」

桜樹はかるーく言って秋彦の手を引いて逃げ出そうとしたが。

『志摩津だ、志摩津』

秋彦は嬉しそうに吉鷹に抱きついた。
吉鷹は御簾をまくり上げたままの姿勢で、硬直していた。

「……あ、きひこ？」

秋彦はこくんとうなずいた。

吉鷹はばさりと御簾を落とし、中へはいってきた。秋彦の真正面に立つ。

拳をあごにあて、まじまじと秋彦をみている。

「……大きくなったなあ」

ひとりごとのようにつぶやくと、手を目線のたかさで動かし、秋彦の身長をはかっている。

そういや秋彦のおむつを替えたとか何とか、言ってたっけ。いまですらこんなに可愛いのだから、ちっちゃい頃の秋彦は滅茶苦茶可愛いかっただろう。

ずっと小さいころから吉鷹が秋彦を見てきたのかと思うと、なんだかやけにムカムカしてきた。

「いま、いくつ」

秋彦が胸元でゆびをうごかした。

「あ。十五歳だって」

桜樹が通訳をした。吉鷹が不思議そうに桜樹を見る。

「なんで分かるんだ」

「手話。ほら、おれ、福祉部にいたから、中学の時。じゃんけんで負けて」

笑われると思ったが、吉鷹は、

「へぇ、人間、とりえがあるもんだな」

とあごに手をあて、感心したようになんどもうなずいている。
吉鷹が桜樹をほめる（？）のはこれがはじめて。
ひどく気色悪い。
吉鷹は瞳を左右に動かし、秋彦を見て、桜樹を見、また秋彦を見て、桜樹をみる。

「あァ、なる……そういうことか。
……それは、アリ、だろーな。ったく、言えよ」

とぶつぶつと言いながら、頭をかいている。

「え？」
「かっこ悪ぃ」

吉鷹はぼやくと、

「ま、頑張れよ」

と桜樹の髪をぐしゃぐしゃにかきまぜた。

「な、なんだよ、いきなり」

吉鷹は白い歯を見せると、ぱあんと拳を叩いた。

「よし。いっちょ、しごいてやる。
お前ら、道着に着替えてこいよ」

「えー、いいよ。
急に言われたって用意してないし」

もう長いこと道場に顔を出してない桜樹は、自分の道着や武具などとっくにどこかへ失くしてしまった。

「お前はオレのを使え。洗って返せよ。
秋彦のはあるだろう」

吉鷹は先ほどの隠し部屋へ入った。
棚にはきちんとたたまれた道着が重ねられて置いてある。

「津久見の嫡子の分はずっと置いてあるんだから」

吉鷹は空気にとけそうな声で言うと、一着の道着に触れた。
柔らかな、優しい眼の色をする。

きゅっと口元に笑みを浮かべると、手を滑らせて横の棚から道着一式を取り出した。
桜樹の手にしっかりと持たせる。

「着せてやれよ、ばあやさん」

どうしよう、と聞く前に、秋彦はするりと服を脱いでいた。

記憶をたどりながら道着を秋彦に着せて、自分も着替えると、おそるおそる道場に入った。

しんと静まり返った夜の道場。
吉鷹だけが背筋をのばし、坐していた。

静謐な空気が、凛と張りつめている。

ボロ雑巾のように転がされていた道場生たちは、解放してもらえたらしい。

秋彦は透明な瞳でぐるりと周囲を見渡すと、すたすたと御簾の前でぺたりと座りこんだ。

吉鷹が微笑を浮かべる。

そこが、秋彦の座るべき場所。

志摩津の道場での上座。

幼いころの桜樹は「御簾の奥には神様がいらっしゃる」と教わった。

志摩津の力と技は津久見のご当主を護す為のもの。善悪の判断も、是非の判断も、津久見ご当主の意志に基づく。

だからこそ、志摩津の当主は津久見の当主と様々な意味で共に居られることが、いちばんの条件。

能力や技術は次の条件で、志摩津当家においては血筋などにはなんの意味もなかった。

「どれからいく?」

吉鷹が言った。

志摩津式古武術十術。

柔術、剣術、空手術、十手術、捕手術、舞術、野術、兵法術、心

理術、薬術

すべてを身につけているのは叔父貴や吉鷹、あとは各地の道場主のうちの幾名か。

ふたつ、みっつで範士を取れれば上出来な部類である。

いちおう桜樹も全てをやらされ、全てを忘れてしまった。

頭を使うものや武具を使うものは完全に、抜け落ちていて無理だ。

とすると、まだ体で覚えている、柔術か空手術だけど。

「いくか」

見透かしたように吉鷹が言って、立ち上がり柔術の構えをとった。

一点の隙も無駄もない構え。

ピンと張りつめた気迫。

一昔前の叔父貴のよう。

組み合うまでもなく、勝てるわけがない。

できれば、秋彦の前ではみっともないところを見せたくないのだけれど。

吉鷹も察して桜樹に花を持たせてくれないだろうか。

願望むなしく。

あっさりと投げ技を食らった。

倒れ込む間もなく引き起こされ、なんども道場の床にたたきつけられる。

手加減など、全くしていない。
意識が途切れると、水をかけられ、覚めさせられる。
吉鷹の、冴えた刃のような眼だけが、脳裏に喰いこんでくる。
（コイツ……本気だ）
今まで、散々、叔父貴や兄たちにしごかれていて、卒倒したのも一度や二度じゃないが、本気でかかってこられたことはない。
また意識を失い、冷水を浴びせかけられた。
すでに道場の床も水浸しである。
動きたくても、力がない。
もう指一本動かせやしない。
こんなんじゃダメだ。
オレ、もっと強くなりたい。
強くならなきゃ。
なんで今までだらけていたんだろう。
こんなんじゃ。
オレ、秋彦のそばに居られなくなっちゃうじゃないか。
ぼやける視界のなかで、白い影が動いた。
秋彦だ。
秋彦が桜樹を背に、庇うように立った。

27.

「来いよ、秋彦」

まさか、と思った瞬間。
吉鷹は秋彦を投げ飛ばしていた。
本気だ。
道場が揺れるほどの力で叩きつけられている。
ロクに受け身も取れていない。

こんなんじゃ、骨の一本や二本、あっという間にやられちまう。

「まだまだ」

吉鷹は秋彦を引きずり起こして、再度、投げ技をかける。
とっさに飛び出して、投げつけられた秋彦の体を受け止めた。

桜樹にも力がないから、ふたりして吹っ飛ぶ。
それでも、クッションにはなった。

まだあどけない秋彦の体が、ぐったりと桜樹の腕にのしかかる。

「庇うなっ」

吉鷹は桜樹を一喝した。
桜樹はむしろ、秋彦の体を抱え込んだ。

「あ、あんた、夏惟にもこんなことするのかよっ」
「当たり前だろ」

吉鷹は桜樹を見据えた。

「お前、なにをみていた。
今回だけで何人、夏惟の周りで死んだと思っている。
紺野溝近はマシな方だ。あいつは夏惟に嫌がらせしても、周囲のザコは殺しても、夏惟に危害は加えない。
節度ってものは守ってるよ。津久見の当主に危害をくわえたらどれだけの余波が起きるか、わきまえてる。

だがそういう連中ばかりじゃない。
二十四時間、俺はそばにいてやれない。
夏惟自身が強くなきゃ、俺よりも強くなってもらわなけりゃ、守れないんだ」
「でも、だからって……」

秋彦は桜樹の腕の中で、ピンク色のくちびるを開き、ぜーぜー喘いでいる。

（こんな可愛いコに、そんなこと……）

吉鷹はしゃがみ込むと、ぴたぴたと秋彦の頬をたたいた。

「でも、桜樹を護ろうとした。
その心意気だけは買ってやるよ」

秋彦が吉鷹の手を払った。
ぎっと睨みつけ、立ち上がる。
そのまま一目散に道場から逃げ出した。

慌てて桜樹も追った。
門を出る直前に、秋彦の手をつかんだ。
「まて、まって。そのまま帰ると……目立つし、着替えないと。あと、打ち身も手当てしないとあとで痛くなるよ」
秋彦はイヤイヤと首を振り、ぼたぼたと涙を零した。
『オレ、夏惟にはなれない』
桜樹は秋彦を見た。
よくわかる。
痛いほど、気持ちはわかる。
自分のみじめさは、自分でよく知っている。
自分がよく知っている。
「ウン……オレも吉鷹のようにはなれない」
桜樹はわらってみた。
笑ってごまかそうとした。
惨めさがよりいっそうひろがる。
「ごめんね。
オレがもっとしっかりしていれば、秋彦をこんな目にあわせなくて済んだのに」
おずおずと秋彦を上目づかいに見る。
「やっぱ……、秋彦はよっしいの方がいい？

吉鷹に側に居てもらいたい？」

秋彦は透明な瞳をぱちくりとした。

夜の暗闇の中を、透けそうに白い手がまっすぐにのびて、桜樹に触れる。

水浸しの桜樹の髪を撫でた。

なにかを確かめるように、桜樹の顔をいくども撫で、くちびるに指を添わせる。

桜樹はまっすぐに秋彦を見つめた。

もし。

もし、秋彦が桜樹を必要としてくれるなら。

今度こそ、本気で生まれ変わってみせる。

にぱっと秋彦は笑った。

『桜樹って可愛い』

「え、ええっ？

いや、そうじゃなくて。

ほら、オレの方が年上だし、その志摩津の直系で」

『大丈夫。

桜樹がいじめられても、守ってあげる』

秋彦がにこにこしながら、いい子、いい子するように桜樹の頭をなでる。

なんか、違う。

絶対に、違う。

兄たちのあきれ果てた顔や、ため息がリアルに浮かぶ。

「あ、秋彦、あのね、オレもちょっとは努力するから、その」

『桜樹、好き』

秋彦はがっしりと桜樹を抱きしめた。

たぶん。

まったくもって、桜樹に執人としての役目なんか期待していない。

(でも。

す……、好き、って言われているなら、いいかな?)

いや。

駄目だ。

いくら桜樹にだって砂粒ほどのプライドがある。

それに、やっぱ秋彦を守ってやりたい。

桜樹は心の中で堅く堅く堅く堅く決意した。

オレ。

絶対に、強くなるっ。

28.

秋彦が桜樹について出て行くと、広大な津久見邸はしんと静まり返った。

まるで巨大な棺桶。

津久見夏惟は純白のひんやりとしたシーツにくるまり、目をつむる。

昔の華やいだ光景が、断片的に浮かんでは消える。

戻りたい。

戻れない。

微かに空気が揺れた。

風だ。

彼はいつも風をまとっている。

しばらくその場でためらっていたが、志摩津吉鷹は音もたてずに歩み寄り、ベッドに腰をおろした。

秋彦が来たよ、といった。

「大きくなったな、びっくりした」

夏惟はシーツにくるまったまま、芋虫のようにもぞもぞと体を動かした。

吉鷹のジーンズにあごをのせ、次に耳をのせ、しっくりこないので、ごろりと転がり、あおむけになった。

大人になった志摩津吉鷹が夏惟を見下ろしている。

変わらない視線。
いつも夏惟を見守っていた。

戻りたい。
戻れない。

あの頃。

夏惟はシーツを口元まで引きあげた。

「秋のヤツ、ぶりっこしてたろ」
「そうなのか、オレは漏らししたり、涎垂らしてた記憶しかないからな。ああ、あと、あの騒ぎのときと。
とりあえず、人間並みになっているのでおどろいた」

くふっと、夏惟は笑った。

「秋、見え見えだから。桜樹の気をひきたくてか弱いふりして。
吹き出しそうになっちゃった」

吉鷹の長い、骨ばったゆびが夏惟のほおをたどった。
シーツをはがしながら首すじをなぞり、胸をおり、またゆっくりとなでてあげる。
夏惟はくびをねじり、吉鷹のおやゆびを咥えた。
舌で味わい、歯を立ててがじがじとかじる。

「また大学に戻るのか?」
「うーん……、溝近さんしだい。アイツにばれちゃったからなあ、

つきまとわれるとうざい」
「ホント、惚れられてるな」

吉鷹は感心しているように、言う。

「シツコイよねえ。言ってよ、しつこい男は嫌われるってサ」
「なあ、お前が桃城大に行ったのって、碓氷……」

夏惟は漆黒の瞳を瞬くと、がじっと吉鷹の指を噛んだ。
吉鷹は微笑し、しばらく夏惟に指をかじらせていたが、

「今度こそ本気で津久見の当主の座、降りるんだな」

夏惟は志摩津吉鷹を見上げた。

「志摩津はどう思う？」
「ま、別にいいんじゃない。
お子ちゃまコンビでレベルは一緒だし、気があっているようだし。
周囲は後始末がそうとう大変になりそうだけど」
「志摩津も、次期当主の座を降りる、の？
いいの、桜樹に渡しちゃって？」

吉鷹はびっくりしたように、夏惟の顔をのぞき込んだ。

「当たり前だろ。
オレ、別に次期当主になりたかったわけじゃないし、夏惟のそばに居たかっただけだから。
夏惟が津久見の当主から降りるなら、別に興味ない。
て、ずっとそばに居て、そんなことも分からなかったのかよ」
「分からないよ、分かるわけないっ」

夏惟は吉鷹の手をはねのけて、がばっと起き上がった。
「志摩津だって僕のこと全然分かってないじゃない。
前だって僕が当主の座を降りたいっていうのに、絶対認めなくて」
「そりゃあ、やっぱり夏惟には夏惟にふさわしい地位に居てもらいたい。
それは、正直、今でもそう思っている」
夏惟は両手をシーツにくるんだまま、むーっと吉鷹を睨みつけた。
「自分が志摩津の当主になりたいから？」
吉鷹はカチンとして、真顔で夏惟を睨み返した。
「怒るぞ」
「僕だって怒っている。
志摩津はいつだって僕の話、聞いてない」
「オレがいつ」
「いつも、いつだって。
ほら、車のことだって、ぜんぜん分かってなかったじゃない」
あれは……。
吉鷹は澄んだ切れ長の瞳をまたたくと、
「ゴメンナサイ」
ぺこりと頭を下げた。
うむ、と夏惟は重々しくうなずく。

すぐに吉鷹は顔を上げ、

「で、でも、あのボロは勘弁してくれ。もすこし、小ぎれいなので……。ジャガーとかどう？

アウディもいいじゃない。

ほんとはフェラーリ・カリフォルニアがいいんだけど。

そっちの方が絶対に夏惟に似合うって。そうだ、色なんだけど、やっぱ白よりも」

すぐにでも車のパンフレットを取り寄せてきそうな勢いである。

夏惟はとっとっとと重心を横に傾けて、ごろんとベッドに転がった。

「ダメだ、こりゃ」

28．（後書き）

残り1話となりました。ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

次作「ナルシスふたり（ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２６０７ｎ／）」は8月31日21時から、約1ヶ月間掲載予定です。

かなり際どい話ですので、１８禁指定ＢＬ、ムーンライトノベルズ掲載です。

苦手な方は次々作「１０月の少年（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３８１０ｎ／）」を10月1日21時より掲載いたしますので、しばらくお待ちいただけるようお願い申しあげます。

終章

志摩津飛翔は霧のような春雨に蛇の目傘をさし、長谷部邸を訪れた。

震災も空襲も潜り抜けた長谷部の屋敷は、江戸時代の日本家屋のまま、修理はしても作りは変えていない。

夜も更けているが、門は開け放したまま。

モノには執着せず、すべての財産は目に見えぬものというのが長谷部家の家訓だ。

流れに流されず。

されど流れに逆らわず。

でも知力で人知れぬ間に流れを捻じ曲げているのが、長谷部の生き方。

玄関口で声をかけるが、さすがに家人は出て来ない。

勝手知ったる家なので、そのまま庭へ回った。

大座敷の縁側で、着流しの長谷部時宗がひとり碁を打っていた。

本を見ながら、たどたどしい手つきである。

「時宗さま、いつから囲碁を?」

「この前アニメでやっているのをみて真似てみたのだが、誰もつきあってくれなくてひとりでやっている。

飛翔くんは」

「すみません、全く」

飛翔は蛇の目をたたんで雨を切ると縁側に腰をおろし、抱えてき

た森伊蔵の一升瓶を差し出した。

「この度は、ずい分と甥たちがお世話になりました」

長谷部時宗はにやりと人を喰った笑みを浮かべた。

「どこで気がついた」

「気づいたと言えば、はじめから。

やけに桜樹の受け入れを固辞されるあたり、時宗さまらしくなかったもので。

ただそれはそれとして、桜樹を更生させるにはやはり時宗さまにお預けするのが最良との思いに変わりはありませんでした。

何分、家に居ると過保護な兄が三人もおりますし。

自立させようにも無理がありました」

「彼はちょっと昔の君に似ているな。気質は良いと思う。

大器晩成型だ。時期が来れば目覚めるだろう」

「下の若君とは意気投合した様子。

それはそれで、先が思いやられます」

「新しい時代が来るかな」

「兄サァン、見て見て。

仕立てあがったよ」

華やかな声で八重山上布の夏着物に、八重山みんさーの半幅帯を一文字に締めた結香が入ってきた。

くるりと回って全身を見せる。

「これはまた、気が早い」

七月八月の着物だから、まだ二カ月以上も先である。

「最近の日本は暑いから、いいんだもーん」

結香と一緒に現れた、長谷部仁資がコツリと弟の頭を叩いた。

「志摩津のご当主さまにお礼を申し上げるのが先だろう。
この度はけっこうな物を頂戴いたしまして」

長谷部六兄弟の三男、紺袴姿の仁資は美しい所作で、正座をし、恭しく飛翔に頭を下げた。
紺色が良く似合う、涼やかな瞳の純日本風の美男子である。

「酒も貰ったんだ。どうだ、お前たちも。
支度してくれ」
「は。では、お言葉に甘えて」

結香と仁資は手桶に氷水を張り一升瓶を冷やすと、薩摩焼のぐい呑みと山菜、新香などを運んできた。

結香の酌で、森伊蔵をいただく。
澄んだ味が五臓六腑にしみとおる。
飛翔は隻眼で、結香に笑いかけた。

「よく似合っている」
「で、っしょー。
聞いて。松っくんなんか、『結香さんなんかに』って言ったんだよぉ」
「お前が昔、散々苛めたからだろう」

仁資がいうと、結香はあらぬ方を見た。

「ボク知らない。李香じゃない？」

時宗は目を細めて、弟たちの姿に笑っている。

結香の華やかさに、救われているのだ。それは長谷部の一族だけではない、志摩津もだった。

だから、結香の喜びそうなものを、時宗に贈った。それがなにより、時宗にとって嬉しいもののはずだから。

時宗は森伊蔵を一気に呑み干した。

「今回はじめて吉鷹くんに会ったが、いい男だな。よく育てあげた」

「彼はいいコでしたよ、昔から。素直でまっすぐで」

仁資もにこやかに言う。

「ちょっこしワルもしてたけど、それがまた、いい男ってカンジ？」

結香らしいコメントだ。

長谷部の面々に口ぐちに褒められて、目がしらが熱くなり、誤魔化すために飛翔は頭を深く下げた。

「私はご覧の通り独り身ですから、本家の家族に放り込んだまま、特には何もしてません。あの子の素養です」

時宗はぐいと身を乗り出した。

「そこでものは相談だが、うちのムコに貰えないだろうか」

仁資、結香の二人がいきなりむせかえった。

この二人を驚かせるということは、ただ事ではない。

飛翔は居住まいを正した。

「長谷部の家にそのような女人がおりましたか」

「私の娘だ。イギリスに置きっぱなしで、どうも女らしくないというか、色気がないというか。

それなりの男性とつきあえば角も取れてくると思うのだが」

仁資が息を整えながら、恐れながら、と話に入りこんだ。

「その話、志摩津家に非常に失礼というか無礼というか、物事にも限度というものがあります」

「チビ牛若クンとだと、美女と野獣ってとこ？」

「だいたい、兄上の教育の問題でしょう」

「あー、ダメダメ、あのコ、父親のこと、一切信用してないもん」

弟たちに口々に言われて、はあああっと時宗はため息を吐いた。

長谷部家の当主にして、日本を代表する知の巨匠。

それでも思い通りにならぬことは、ままあるようだ。

飛翔は微笑した。

「吉鷹にはこれからは当人の望む人生を歩ませてやりたいと思っています。

ご縁がある時はあるでしょう」

夜空が明るいと思ったら、雨が降ってはいるが月が出ていた。

十六夜か。
雨雲に霞んでいる。
空になったぐい呑みに、結香が酌をする。
こんな夜には。
失った人たちを、儚く思い出す。
「さすがイイ飲みっぷり。ささもう一杯……アレ、もう空いちゃった？」
結香が一升瓶を逆さにしてブンブンとふった。
「いったい、いつの間に」
愛らしく小首を傾げているが、長谷部のウワバミは血統である。
「イイ酒はなくなるのが早い、なにか蔵になかったか。せっかく志摩津のご当主様がいらしているというのに、空の杯では申し訳ない。早く持ってこい」
「器が小さすぎやしませんかね、もっと大きいのに……」
賑やいでいると、着流し姿の守屋と長谷部の祐筆衆、東祁鶯円が現れた。
「ご挨拶が遅れました」
三つ指をつき、深く頭を下げる。
志摩津飛翔はあわてて縁側に上がり、最敬礼をした。

「こちらこそ、今回はずい分と世話になった。
話は聞いている」
「ち、ちょっと……、志摩津のご当主さまにそのように頭を下げられましては、我らは……」

「お酒、あったよぉ～」

明るい声で一升瓶を四、五本抱えた結香が戻ってきた。
顔に似合わぬ怪力である。

「おお、ちょうどいい。お前らも飲んでいけ」

長谷部時宗はいそいそと宴会の支度を始めた。

「せっかくだ、他に起きている連中もいるなら呼んで来い」
「樽が必要になりますよ」
「おお、そうだ、よく気がついた、仁資。
調達して来い」
「えええええ、そんな意味で言ったのではありません。
こんな時間に無茶です」
「いいから行けって」

生まじめな仁資が、兄に追い立てられて、とぼとぼと出ていく。
飛翔は微笑した。
どこの家も、いつの時代も、いつになっても、兄は弟に無茶難題をふっかけるものらしい。

甥っ子たちの弟離れも。
やはり、まだまだ先になりそうだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5863m/

桜散る

2011年10月7日10時03分発行